

# 地名研究会報

第21号

昭和63年9月4日

鹿児島地名研究会

I. 第21回例会 昭和63年6月5日(日) 教職員互助組合会館小会議室  
参加者: 青柳俊二・池田信夫・江之口沢生・江平 望・大田照夫・片岡八郎・坂本 誠・下野敏見・  
浜崎盛雄・平田信芳・本田親光・松田 誠・宮原景彦・山口静也(計14名)

邊藩名勝考説会: P.60~P.65

(問題となった地名および事項)

## 唐船(とうせん)

浜崎 唐船という地名が南薩には多いが、唐の船とゆかりがあるのか。

平田 唐船岩・唐船石という地名が多いが、これは格好が唐船に見えるためについた呼び名。実際に見ていないが、その形にもとづいて付けられた地名とみなしてよいだろう。

## II. 徳光と現王

問題提起——江之口沢生

江之口 今日の案内は「徳光と現王」ということでしたけれども、今までの語源中心の地名研究と言うのもマンネリ化しているように思いましたので、僭越ではあるんですけども、今まで地名研究を通じて感じたこと、あるいは自分自身でこういうことが出来たら良いなあと思っていることを、まず話してみたいと思います。「地名研究ノート・I」というのがそれです。

その前に少しだけ時間をもらいまして、先程配りました資料について説明させてください。地名とは直接関係はないんですけども、出来るだけ多くの先生方に見て頂いて、いろいろ指摘して頂いたり、助言を頂いたりということで、場違いなものを持ってきました。お気付きになった点などアドバイスを頂けたらと思います。

## 野間(のま)

江之口 野間と娘姫の関係は?

下野 野間が娘姫から来たとする伝説はある。

ラヂ=カセの故障に気付き、急場しのぎに、ラヂ=カセ購入に世話を役の平田が出掛けたため、休憩に入り、話は進展せず。

川内に、「長崎堤防」という堤防がありまして、ちょうど去年、起工三百年ということで、地元では催しもあったようですし、新聞でも紹介されましたのでご存知だと思います。その堤防には「人柱」の伝説があり、しかも鋸の刃のような特異な形をした堤防であるという、その二点において、あまり例のない、ある意味では特殊な堤防とも云えます。この「人柱」についても、また、この特異な形についても、今まで全く研究されておりません。七年ぐらい前から気になりまして、資料を集めてきました。去年、ちょうど三百年という節目の年にあたりましたので、それまで集めた資料をまとめてみました。本題ではないので詳しくは話せませんけど、「人柱」というのは、あくまでも伝説であって事実ではないということが、まず指摘出来ると思います。

『鹿児島県維新前土木史』という本があります。日本土木学界が声を掛けまして各県別に作られ、それらを全国的にまとめたものが『日本全土木史』になります。岩波書店が出した分厚い本で、当時七万八千円。あの中に、土木技術とか各地の資料が大体集っていますので、そう云ったものを参考にして、いろいろと考えてみました。鹿児島県の場合、一つのパターンがあると思います。人柱になったのは、常に監督とかそういう責任者であるという点で特色があります。全国的には、巡礼が人柱にされるとか別にありますが、鹿児島の場合、監督が人柱になるようにしむけられた嫌いがあります。資料(3)の1、菱刈・美坂堤というのがありますが、これは明日検査があるという前の晩に、監督の家に婦人を忍びこませて、わざと縫い付けている。そんなことをすれば、監督が人柱にならなければいけないというふうになって来るわけです。何故監督が人柱になるかと云いますと、いわゆるノルマがきびしかったがためとみられます。逆に云えば、人柱があるような工事は、かなりきつかったというふうに見ることが出来ます。過酷な労働に対する反発が、監督を殺してやるとか監督が居らんとなればというような気持を起こさせ、人柱にしむけたような、そんな感じを受けます。

『維新前土木史』の中に、このような記述があります。大崎村都万神社の石塔に左の刻字あり、「奉寄進山下善右衛門・二見藤左衛門」とあって、左側の側面に「慶應元年九月より同二年四月に至る、首尾よく成就につき、これを獻する」というような刻字が石塔にあるそうです。首尾よく成就という内容がどうなものであったかというと、『土木史』が編纂される過程で、当時93歳という人の証言が得られたのだそうです。その証言によると、非常にきつかったことが書いてあります。ちょっと読んでみます。「人夫は志布志および大崎郷より出でたり。一

日平均三百ぐらいなりき。なお、この他に熟練夫として日置郡串木野村より五十人ばかり来りたり。現地まで運ぶには石の大きさにて、四人持ちと八人持ちとに区別して、一組八人に対する運搬量を決め、これを終らざる間は帰宿せしめざる規定なり。この規定を設くるには、初め串木野夫に石を運ばしめ、その所要時間を計り、これを基準としたるものなるが、地方の人夫にしてはすこぶる困難なる作業なりし。習熟したる後は、八人持ちの石を四人に担ぎ運びしに至りがため、着衣は肩に食い入りて、出血してはれあがり、生涯それはれ瘡えざる者ありたり」と。こういうような内容が、首尾よく成就というふうなことになって来るわけです。そういうことで仕事のきつさ・ノルマというのが、監督に対するにくしみ、それから人柱というものを生んだのじゃないかなと思っております。

ところで、日本的な「人柱」は、ちょっと調べてみると、これはすべて工法名です。例えば(4)の1に大分の例が入っています。龜市神社という、犠牲になった龜と市を祀った神社というのがあります、これは工法名だということです。和歌山県に若尾五男というお医者さんがおられ、民俗学のこういう分野を研究されておられます。その人からも、いろいろアドバイスを頂きました。その人によると、工法名ということです。つまり、これは寄砂(よりすな)；砂を寄せるという工法名で、人の名前ではないということです。「巡礼」というのも、そうですし、備前堀とか備前様というのも、これはいわゆる石樋(せきひ)。巡礼の出身地が備前だから備前様というのじゃなくて、それは石樋のこと。工法名から来たものであると言えます。そのように人柱というのは、ほとんど事実無根と考えます。ただ、まあ、今で言えば、いわゆる労災ということで人柱、ちょっと石に押されて亡くなつたというのを、人柱というふうな概念でとらえたことはあった

かも知れませんが、生きているものをそのまま人柱ということはあり得なかつたと、私は考えます。

次に特異な形ということについて。鋸形の堤防が八つあったということです。これが何故か、ということも地元では研究されておりませんが、結論から言うと、寄州(よりす)の現象を表わした堤防であるということです。私は小さい頃から川内川で泳いで、夏は川につかり放しだったので、経験から判のですが、例えば大水で大きな木の根っこが流れて、たまたま止ったとする。そうすると、それからどういう現象が起るかというと、その直前はものすごく抉られるわけです。川の流れで抉られるのです。抉られた砂はどこに集るかというと、木の根っこのうしろ側にたまります。前の方は抉られて深くなりますが、その砂はうしろの方に来るためには反って流れないわけです。これを寄州(よりす)と言って、鹿児島でも江戸時代の終りの方で、これを利用した干拓工事もあったようです。知林ヶ島の干拓工事ですかね。そういうのが、どこか書いてあったように思いますが、ちょっと見付け出しません。

一番重要なことは、この形が最初からあったように考えられていますが、私は新しいのじゃないかと思います。というのは、こういう複雑な土木技術というのは、最初からやるというのはどうしても不自然で、一度堤防が壊れてその反省からこういう新しい工法が採り入れられたと、私は考えます。この堤防は文政年間に一度壊れております。文政十一年に決壊しております。それより二年程前の文政九年(1826)の銘がある「高江村絵図」があり、その絵図を見ると、土手が三ヶ所描いてあります。一つは、代官塘のところ。地元では「デカン殿」とよぶことについて、高江の青崎速先生がデカン殿というのは下男ではなくて代官見立新田であろうと言っておられます、その通りだと思います。それから、長崎堤防。そのうしろの方に倉浦の堤防があります。

その三つの堤防の図を、今写真で回しておりますが、その絵図を見る限り、他の二つの堤防と全く同じように描いてあります。そういうことからも、文政十一年堤防が壊れる前は、普通の堤防であったと言えるのではないかと思います。決壊の反省として、こういう形(鋸形)が出来た。その反省というのは普通の状態だと、ちょうど此処は川の流れがまともに強く当る位置にあります。川内川の流れを見ますと、平島の御釣場(おつりば)、島津の殿様が釣りをした所が、その真向い。流れがまっすぐに堤防に当って、根元の砂を取って、そのために堤防が壊れた。そこで、考え出されたのではないかと私は考えております。

それと、これは余分な話ですが、長崎堤防の工事は八年かかりますけど、堤防の工事というのはわりと難しくないわけです。何が難しいかというとここに樋を入れる作業が難しい。河口に近いためにどうしても潮が来ますから、干潮を利用してたまつた潮水を出さなければならない。そのためには堤防に樋を取り付けなければならない。明治以前の技術というのは、樋の取り付け部分の工事技術が進歩しておらず、そこがやられていました。文政十一年の決壊の時も、東一番水道と二番水道の一部がやられておりました。ですから、小野仙右衛門当時の堤防工事というのは、それほど難しいものではなかったんじゃないかなと思っています。昔の工事は八年といえば長いように見えますけど、農作業の時は休みますし、正月も休み、雨が降れば休んだりですから、それほど難しい工事じゃなかったんじゃないかなと私は思っています。ちょっと長くなりましたが、今日の本題に入って行きたいと思います。

徳光から入って行きます。私の所(川内市樋元)に、資料の一一番上に書いてありますが、俗に「トッコドン」という所があります。どういう場所かというと、道路が通っておりまして、反対側は墓地に

なります。小字は小園（こぞの）という所です。徳光寺という所もあり、「一体ないごて言うたーろかいたな」と聞くと、「トッコどんが鳴ってよ」と云われとった。実際に今でも鳴くもんですから、別に問題意識を持っていませんでした。ところが、山川町に徳光神社というのがあるほか、調べてみるとあちらにもこちらにもあったということで、これは一度調べてみる必要があると感じました。おことわりしておきますが、資料としてまとめてみようということになったのは、実は鶴田町に大野さんという方がおられ、その人が去年の夏頃から調べておられるのを私も知っていましたので、「はんがすんなら、おいもしてみろ」ということになって、まとめたというのが一つ。それから、川内市に小倉先生という方がおられます。絵描さんで郷土史にも詳しい方で十数年も前から調べておられるということで、そういう資料が手元にあり、それをまとめたに過ぎません。分布調査など若干私の資料を加えておりますがこの資料のベースというのは、そのお二人の資料を基にしたということを、最初におことわりしておきます。

分布から入って行きたいと思います。こうして見ますと、開聞町とか山川町とか。山川町は徳光神社があるから当然ですけど、鹿児島市小野とか高尾野などに、「徳光」という小字があります。鹿児島市的小野という所に、実は今朝行って来ました。実業高校のテニス=コートのある所で、こっちから行けばテニス=コートの左側にあり、道路を隔てた反対側で、見晴らし良い所です。桜島が真正面に見えます。現在は若干埋め立ても進んでおり、当時のおかげはないんだそうです。ここを徳光迫という。徳光迫東・徳光迫西という地名もあります。「迫」ですから狭い所です。本来は谷底のような所だったのですが、今はもう斜面になっております。そういう眺めのよい所。その眺めが良いというのは、

偶然か、非偶然か。「徳光」がある所、ほとんどがそうなんですね。その辺も解く鍵になるんじゃないかなと思います。

それから一つ注目したいのは「徳光仏」という小字が現存するということです。（2）の最初の行に「三角徳光仏上」というのか書いてあります。この他に「徳光仏」というのがそばにあるそうです。これは見落としました。それから5行目に「徳光仏作」と長島町の地名がありますが、これは「徳光作」が正しく、訂正します。ですから、開聞町に「三角徳光仏上」と「徳光仏」、それから鹿屋市海道町に「徳光仏」、三ヶ所「徳光仏」があります。

東郷町には、いわゆる梟という字を書いた「梟段（とっこだん）」がありますが、これは確認しておりません。

それから、関係があるんじゃないかなと思われる地名で「時仏」。「ときぼとけ」と読むのでしょうか三ヶ所あります。今日は見ておられませんが、藤浪先生から隼人町にもあるということを教えて頂きました。説仏（とっぽとけ）というんだそうです。

それから、「とっこう」が一向宗・時宗と関係があるんじゃないかなということで、加治木の時宗田を入れておきました。これは、松田先生によりますともう町の中になっている所だそうです。（3）分布のBに、通称でトッコダン・トッコバルというのを入れておきました。その下に、「トッコウ」と読めるかも知れない字名をあげておきました。これらははっきりしません。調査を続けなければいけないのですが、可能性としてあげておきました。新しく出来た『熊本の字』で拾いますと、「徳行」という地名が葦北にあるようです。それから「徳仏」と書いてあるのが、矢部・砥用・坂本の三村にあるようです。この辺は、実際関係があるのかは判りません。

それから（4）は、時宗の関係もあるという説があるもんですから、念仏塔も含めて、時宗に関係の

ありそうな事項を一覧表にして編年をしておきました。これは、あくまでも可能性。そうであると言うんじゃなくて、資料として出しました。

編年資料のA、時光仏。これは私の勘違いです。Aの2番目、一結衆というのがあり、時宗だろうということであげましたが、これは川内市の泰平寺。その他いろいろ並べてありますが、可能性は判りません。右へ移りまして、1行目のD、トッコドンというのが舟木古城址にあります。大田さんが写真を持って来ておられますが、これと全く同じものが南瀬の「トッコ原」にもあります。今まで誰も気が付いておられないようですが、全く形も年号も同じです。四方仏を刻んである点でも、このDとEは一緒です。それから、徳光名（とっこうみょう）というのも、旧記録に出て来るようです。それから「とっこ石」。そこに書きましたように、1メートルぐらいの無銘の自然石です。「とっこどん」というのは、別府原古墳から見える位置にあります。ちょうど向う側。現在、大規模な造成工事をやっている所で、山を削り谷を埋めています。来年、丁度「とっこどん」のある所をどかすということです。これは何か出て来るかも知れんと楽しみにしています。

それから『肥後国誌』の中に、水俣の龜嶽峰に、これは大口と水俣の境ですが、「とっこどん」「徳光仏」というのが出て来ます。しかし『肥後国誌』の書かれた時代には字が読みなかったということ非常に残念です。

その他に「徳光ヶ丘」というのが輝北町にありますけれども、輝北町はどうしてか、何度も手紙を出しても返事をくいやれんですが。それから「徳荒神」というのがあります。これは実は新しいもので、山川町にある檍の木の神様だと思います。どうも、道祖神的なふうに祀られているようです。それから、時仏（ときぶつ）というのが、いくつかあります。阿久根市飛松に、一向宗の仏具等の焼却地。つまり

禁制になった時にそれまで使っていた仏具を焼いた所、いわゆる仏を解く、解任、というふうなことを阿久根市誌に書いてありました。そこに行ってみますと、神社になっておりまして、時仏神（ときぶつがみ）というようなことが書いてあったようです。阿久根には別に「とっこどんの墓」というのがあります。自然石を置いた墓のような感じのものです。「サカシバ」が供えてありました。

阿久根の場合、全く違う解釈をしております。これなんかも、全く研究されていないということでしょう。時仏というのを、全く相反する解釈があるというのは、非常に面白いと思います。

出水・牧園にもあるんですが、こちらの方には行っておりません。標題の下に「不完全・現在も調査中」としましたが、全くその通りであります。ここにあるとか、あるいはこうではないかということを是非教えて頂きたいと思います。これで、徳光は終ります。

次は現王です。これも徳光と同じで、私の所に現王段という小字があります。段ですから当然、山ですけれども。山と言いますが、高くなっている所で、隣の白浜町との境です。地元の人々に「ないこて、ゲンノどんと言うか」と聞くと、「ゲンノどんがおいやったでよ」と、そこまでは聞くんですが、「ゲンノどんとは、いけな人よ」と聞いても「知っちょいもんか」と、こうなるわけです。最初の頃はそれで済んだんですけども、いろいろ私も物好きで、あっちこっち歩き回っているうちに、泊野に現王神社というのがあることを知りました。それから角川の小字一覧を暇つぶしに調べてチェックしていると、あっちこっちにあるということで、それなら調べてみようかということになり、データがある程度揃いましたので出した次第です。

結論を申しますと、現王は山之神ということは判るわけですが、問題は一般的の山之神と何が違うのか

ということです。『鹿児島大百科事典』には「紫尾山周辺にのみ見られる」というような記述があります。項目は現王では出でておらず、狩獵伝承・狩獵で出でております。狩獵信仰、その中に出でております。私が調べた感じでは、どうもおかしい。少なくともその説はおかしい。というのは、宮崎県にもあります。現王神社というのがあります。しかも、歴史的には、そちらが古いわけです。ですから、そういう説は再考の余地があるんじゃないかと思っております。

分布を見ますと、東郷にずっとあります。資料の右側を見ますと、6番から12番まで、これらは皆現王神社です。東郷町の神社です。この辺を見ますと、確かに紫尾山の周辺と言えるのではないかと思います。それから溝辺町有川。これは少し紫尾山から離れております。小字がありましたので問合せましたら、最初はそんな神社はないということでしたけれども、現王という名の氏神様が郷社の飯留神社に合祀されていたことが判りました。明治40年合祀したという資料を送ってもらいました。ですから、明治40年以前は、独立して、現王神社が存在したということです。私は現場を確認しておりませんが、現王跡地とか現王池というのもあるそうです。

それから、求名。求名は(4)の下の方ですが、(4)のSを見てください。「山ノ神」と書いてありますが、現王地区に現王神社がなく、昔からの古い山之神があり、恐らくその山之神と現王とが一体ではないかということで、あげたわけです。狩宿という地名もいろいろ問題が多いのですが、地元の方で、そこに書いてある下境田家ですね、昔からの家の人です。下境田さんに聞いたら、「島津さんが狩をした時、うんだげー、泊いやったじゃっち」とおっしゃるわけです。ですから、ここには現王神社そのものはないのですけれども、求名の現王というは、山之神と考えていいのではないかと思います。

それから、塔之原には、現王と現王下というのがありますけれど、これはもう確認出来ません。市比野の現王というのは、県立図書館の『神社帳簿』に出ておりました。また確認はしておりませんが、確認出来るのじゃないかと思います。

現王原（げんのうばる）というのが、田海（とうみ）にあります。田海に郷土史に興味のある詳しい方がおられるので、「あいはっじゃが」と云うて聞いたところ、最初は「ない、ない」と言ってやったんですが、最近になって「あっど、あっど」と云うて来ました。此の前行って来ましたら、はっきりと何か判らんけど、石が7体ほどあって、幣が切ってありました。ですから、今でも祀ってるんじゃないかと思いますが、「ここをなんちうとな」と聞くと「ゲンノどん」。「ゲンノどん」とか「ゲンノヤマ」と言うんだそうで、これも間違いないと思います。その「ゲンノどん」の所には「下現王屋敷（しもげんのうやしき）」という石碑がありました。宝暦十一年（1761）のものです。そんなに古くはないのですけれども、その中に下現王屋敷甚兵衛というような名前も出て来ます。それから現王屋敷というのも。今言葉たのは下現王屋敷ですが、現王屋敷というのは最近まであったそうです。

宮之城泊野は、現王神社です。現王川原（げんのうがわら）というのが武本にあります。これは岡場整備をして、もう何もなくなりました。平坦地と言いますか、緩かな傾斜地です。この他、出水には現王跡とか現王園という小字があります。その他鶴田町神子には新田公民館の所に「ゲンノ山」という山があります。今日は宮原先生がお見えになっておられるようですが、大口にもあるとのことで、案内して頂けることになっておりますが、一向に実現しません。現在ない場合でも、現王という地名の所には、かつて現王神社があった、神さまがおいやったということは言えるんじゃないかと思います。

宮崎県に行きますと、佐土原町上田島に現王があります。それから字は違いますが国富町に源王があります。国富町の八代北俣という所には天正年間建立というような記録も残っています。それほど古くはないですが。西都市現王島（げんのうじま）、そこに黒生野と書いてありますが、黒生野は消してください。現王島が大字になります。ここには現王神社はないのですが、日吉神社があるようです。年号は不明ですが、由緒の古い日吉神社があって、大山積神を祀るということになっていますから、まあ山之神、いわゆる現王と見ていいのじゃないかと思います。都城市にも瀬野というのがあるんですけども、これはもう町になって確認は出来ません。

(4)の編年を見てみると、中世史会報の中に「現王田三反」というものが出て来ます。これは、鹿児島県のものよりずっと古い初見になります。現王城、これも宮崎ですね。Cに「ミや田くち」というのをあげておきましたが、宮田というのは現地では現王神社のことですから、宮田とある以上は、現王神社がこの時代あったということで入れておきました。D.は私の計算間違いです。E.の「亨」という字も間違いで、これは享徳3年です。下の線が一本抜けております。これは1454年です。ですからD.の「羽島見知日記」より上に来なければいけない。

(5)現王神社の祭神を見てみると、資料の右の方、現王山之神とか現王山神社とか、祁答院には現王妙見、大居神があります。ここでちょっと注意したいのは、11番の東郷町藤川原のところに、伊弉册尊・事解男・速玉男という祭神がありますが、これはもう熊野信仰です。一説「山積神」と書いてありますが、この辺はちょっと注意がいるんじゃないかと思います。それについては、あとで説明します。14番鹿児島市の現王。5年ぐらい前、南日本新聞に載ったのを記憶していて、しかも切り抜きを

したのですが、見つけ出しません。新聞社や市の教育委員会にも問合せたのですが、判りませんでした。現王神社が合祀されたということが書いてあったようです。鹿児島の方でお気付きでしたら教えてください。

少し離れますが、根占町や鹿屋市上祓川町にあります。17番、これは宮崎にあるという明確な証拠にもなります。紫尾山周辺だけではないということが言えるんじゃないでしょうか。18番、加久藤神社を昔は二之宮現王と呼んでいたそうです。

(6)伝説はいろいろあります。もう時間もありませんので、出典のページ数など出しておきましたので、参考にしてください。

そこで、この現王はいわゆる普通の山之神と何故違うのか、ということが一番の問題になりますが、一般的の山之神でもいいのではないかと普通は思うのですが、東郷とか宮之城には、京都から下って来たというような伝説がどうしてあるんです。京都からという、何故そういう伝承があるのか、やっぱり何かその源となったものがあるんで、ちょっと興味を持つわけすけれども、残念ながら詳しいことは判りません。ただ、紫尾山というのは熊野信仰が非常にさかんです。その熊野の正体というのも、いろいろ説があります。狩場明神とか丹生津神。これらの神様が弘法大師を高野山へ導いたというような開祖出伝説があり、熊野信仰がこちらに伝わった折にいわゆる高野聖とか熊野修験の人たちがこちらに伝えたんじゃないかというようなことも考えたりしております。

先程、大隅に、根占とか鹿屋に現王神社があるということを申しましたが、ご存知のように鹿屋には狩長大明神という神社があります。また、あの付近は、山之神信仰が濃い分布をなす一つの地域です。その辺も、一つの解く鍵になるんじゃないかなと 思っております。

それで、さっきから何度も言いますように、何故山之神でなくて現王なのか。それに引っかかっておられます。——テープ交換で若干中断———昔は鉄砲なんていわけですから、狩猟の飛び道具は弓ですね。宮之城江津の現王神社には、佐藤太の伝承がありますので、恐らく漢字で書くとすれば、この字「弦王」ではなかろうか。弓の王様ということで「弦王」でないかなということも考えているわけです。

大口市にもまだあるようですし、小字は角川の小字一覧でピックアップして分布の把握は出来ますが、通称地名となると把握は容易でないので、是非先生力のご教示を頼んで、何とかもう少し明確な形で解いて、又こういう場で発表させて頂きたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願ひいたします。以上です。

#### (質疑応答)

平田 もう一つ説明するのでは?

江之口 時間がないので、それは見てください。

平田 ああ、そういうことで。わりと面白い話が続きました。小野仙右衛門と長崎堤防。人柱は伝説であって、事実ではない。これは、新しい見方ですね。徳光の話、それから、現王。何からでも結構です。質問があったら、遠慮なく出してください。

本田 山窓が祀る山之神を現王という。そうじゃないの?

江之口 そこまでは、今までの調査では出て来ません。しかし、可能性はあると思います。いわゆる山を歩いていた人たちですから。

本田 山窓の小椋からムコをとったという話ですね。小椋の山窓が、今から二百年ぐらいですかね、入米の山之口に来て、住みついております。あれは箕を作ったり縫物をしたりするわけでしょう。それが山之神を建てておるんです。それがある。土地で

は、ただ山之神と呼んでいる。「ゲンノどん」とは言ってはおらんようだけど。

江之口 今まで調査した限りでは、鹿児島と言いますか、調べた範囲にしかありません。山之神と言えば、米良とか五木とか椎葉とかが、本場と言いますか、まあ本場ですね。本場ですから、向うにもありやせんどかいと思うて、問い合わせておるんですが、現王のようなものは出て来ません。

平田 現王という地名は南九州だけに限られているの?

江之口 今のところは、宮崎の一部と鹿児島県。

平田 他に北九州とか中国・近畿には?

江之口 ないです。

平田 徳光の場合も、南九州ですか?

江之口 私の調査が不充分なのかも知れませんが出て来ないようです。

平田 そうであれば、こっちで「トッコどん」と言えば「フクロウ」のこと。そうであれば、南九州の方言で、フクロウが鳴く所という地名の出来方になる。時光仏とか説仏(ときぼとけ)とかの関連であれば、全国的に同じような地名が出て来て当然だと思うんですよね。それが出て来ないということは逆に方言的な性格が強いということになるんじゃないの?

江之口 さっき言いましたけど、時光。実は昨日京都の木津町から三月に出した返事が届いて、ここには入っていないのですが、日本全国では時光町とか、そういうのはいくつかある。ところが、これを「トッコウ」と読んでいる例はないわけです。それと、「フクロウ」の話が出ましたけど、フクロウが鳴く所に何故そういう石を置くのか?置く必要はない。何かやっぱり、信仰というか、そういうような形のものがからんで来るんじゃないかなというふうな気がするわけです。何も置かなくてもいいんじゃないか、フクロウの来る所に。

平田 たいぶ民俗的な信仰のある所のようですね。その辺のことについて、どうですか。

うーん、例えばね、現王のプリントの右側の上、1から18まで番号が付いていますね。4番が現王妙見。妙見は星神様ですよね。それから大居神は老神と関係がありますね。8番の現王社は穴野。これは「シシ」でしょう。10番の鞘段。これは「サヤの神・サイの神」。まあ、こういう地名のあるところに合祀されたわけなんでしょうけど。

江之口 現王神社は、全然何もない所があるわけですから、よほどと言いますか、わりと早い時代に入々から忘れ去られていたんじゃないでしょうか。楠元の、そもそも出発点となった現王段というのではなく何もないわけです。

平田 何か、現王という信仰対象がありそうな気がする。

江之口 熊野信仰と関係があるかなと思って、熊野関係の本を片っ端から見てますけど、現王は出て来ません。狩場明神とか丹生津姫とか山之神は出て来ますけど。

本田 南瀬の徳光原の、あの石塔は良すぎるのですね。

江之口 ですね。右側のDとE、右側の1行目と2行目。大田さん、写真を回してくれんけ。写真じゃちょっと大きさまでは判らんかも知れんけど。非常に立派なのがあるわけです。それが偶々立っているから。そういう信仰があるということを伺われるの、どこか地に埋もれたりすれば、もう普通の石と変わらんようなのがあったりするわけです。その落差が大きすぎるわけです。だから、ますます頭が混乱するわけです。宮之城舟木と南瀬の徳光は明らかに錢を持った人が建てたんじゃないか、と思います。

本田 私は、あの石塔の形が不思議なんですよ。あの頃は、四角な塔が建てられるような時期じゃないかななど、私は思っている。

い。ほとんど、あたりまえの宝塔の時期ですね。二百年後です、あんなのが出来るのは、そういうものが出来ておるということが珍しいのじゃないか。

平田 他に質問はありませんか。質問もないが、補足することはありませんか。

江之口 長崎堤防について、あの形についてですが。これは何故こういう形に。普通の堤防だと、どうしても弱いので、「ダム」というのを出したわけです。そうすると、さっきも言いましたように前で抉られた砂が後にたまって浅くなる。ダムの後に砂が堆積するわけです。そうすると堤防の補強になる。こういう形は、大体、中流域に見ます。それと、日本の河川技術というのは、木曾川とか甲州の釜無川とか関東地方が進んでいた。鹿児島で川内川といえば「あばれ川」ですけども、全国的なレベルですると、とてもじゃないけど、それこそ大学生と幼稚園の差があります。鹿児島の川内あたりで独特の形があみ出されたとは、どうしても考えられないわけです。その源流はどこにあるかと言えば、釜無川。今、NHKで武田信玄をやっていますけど、最初に「出し」を考えたのは、武田信玄。のちに、これが段々長く伸びて「霞堤」とか「信玄堤」と呼ばれます。

それで、何故こういう三角なのかというと、あそこの地形を見ますと、河口部です。河口部は浪がある。普通の堤防は川の流れに対しては良いけれども浪の流れに対しては不向きで、とてももたない。うしろ側がやられるわけです、三角浪で。ですから普通に「出し」はとれない。それで、一番いいのは流れに対しての寄州の現象を効果的に生み出して、さらに浪に対しても寄州的な現象を生ずるということで、いわゆる三角が考え出されて来たんじゃないかななど、私は思っている。

平田 それで、それを小野仙右衛門がやったんじゃないというわけ?

江之口 ちょっと無理だと、私は思います。時代的に。その当時から、最初から、ああいう、お金のかかるような、手のかかるようなのは、ちょっと考えられない。この付近ではですね、考え出せられないと思っているんです。

平田 私も長崎堤防を調べに行かなければと思ってはいるのですが、なかなか実現しないのです。長崎堤防の出っぱった所で、本来の石を使っているのは一ヶ所しか残っていないと、本当ですか。新聞で見ただけですけど。

江之口 えーと、工事の歴史を3ページの(6)に入れておきました。現状ということで、わりに新しいのは入れておきました。

これが4つぐらい残っているんですかね。その中で、3番目と4番目が当時の跡を残している。あとには、皆、作り変えている。積み方を見れば、判ります。石の表面積を出来るだけ小さくして、縦長に積立てている。それに、あとからのものはセメントが入っている。

平田 セメントが入れば、現代のものだよね。

江之口 手が入っています。ですから、3番目と4番目の、このカーブが本来のもの。『土木史』を見ると、「弓のごとく」と書いてあります。まさに「弓のごとく」なっている。

ところが、復元したものは、見てみると、直線的に曲げています。しかも、間知石(けんちいし)を使っております。あの三角のですね。間知石を積んでるわけですね。ところが、潮水がありますから石がやられ易い。かどの所がやられて、水が入り、浪が寄せると、水が減る時に中の砂を持って行ってからになる。ところが、昔の石の積み方は厚みがあります。わずかの三角の点でなくて、面ですからなかなかやられない。昔の人はよく考えています。

平田 よく判りました。積み方で一つ聞きたいことが。まだ確かめに行ってないけど、何か碑文が

残っているのでしょうか。その碑文に誰々が作ったと石工名がずらーっと書いてあるわけですね。その石碑は確かに使用した石の採石場を記録してあるはずだから、石を見比べたら、本来の堤防の石がどこの石であり、後の石はどこから持てて来たと、それは証明出来るのではない。

江之口 ですね。それで(6)のところに、文政年間の決壊のことが書いてありますが、それはメートル換算ですが、実際に壊れたのは石垣が36メートル。それで工事はどうなったかというと、36メートル壊されたのに対して180メートルやっているわけですね。それと、その改修工事の中に「西石垣諸所取締」というような書き方がしてあります。ちょっと壊れたのを直すぐらいなら、付け足し的な形でやればいい筈なのに東一番水道の工事をしたり、二番水道の改修をした人たちが、独立した一つのブロックとして石碑に書いてあるわけです。その「諸所取締」というのを鍵形を作った工事ではなかろうか、というふうに思うわけです。僅か36メートル。僅かと言えば語弊があるかも知れませんが、その5倍もの工事をやっていることです。それと、さっきも言いましたように、決壊前の絵図面を見ますと、鍵形が全然描かれていないということもおかしいんじゃないかな。省略したというような言い方も出来ないことはないんですけども。ちゃんと、井樋の位置まで書いてあるのに鍵形が書いてないのは、ちょっとおかしいんじゃないかな。

平田 うん、それで、あなたの言いたいことは、今、川内で問題になっているわけですか。

江之口 いや、別に。ただ去年、最初に言いましたように、三百年祭。三百年になったから、まとめてみようかということで、出したわけです。

平田 何か新聞では、長崎堤防の保存について中入れ云々というのがあったんじゃないの?

江之口 改修工事計画があったみたいで

消えたんじゃないでしょうか。立ち消えになったと聞いています。

平田 ほう。

江之口 そのまま残す。いすれは又そのままじゃいかんわけですから、いすれは出て来るでしょうけど。現在は沙汰やみになったようです。

平田 小野仙右衛門らが手がけた所は極く一部分だが残っていると、そのような解釈でよろしいのですね。他に何か質問はありませんか。

江之口 別に今日でなくてもいいですから、またの機会でいいですから、意見を聞かせてください。

浜崎 さっきの人柱の話。指宿の佃遺跡とあります。『頃娃町郷土誌』に出ている昔の御領村の佃遺跡のことじゃないかと思います。指宿にも他にも佃遺跡があるのかも知れませんが。

江之口 ちょっと待ってください。

浜崎 頃娃町郷土誌にも出て来るようです。指宿郡のうちの頃娃という感じではないでしょうか。

江之口 昔の名で書いてありますから、私の勘違いかも知れません。

浜崎 昔だったら御領村の佃。

江之口 指宿郡頃娃村御領。

浜崎 ああ、そうですか。判りました。

江之口 頃娃村牧之内佃遺跡と書いてあります。

平田 下野先生、何か?

下野 人柱伝説。宝曆治水等記録が残る工事に人柱なし、不明の記録なしの工事に伝説が発生、とありますね。そのことは非常に重要なと思います。昔話が人柱のことを伝えるわけでしょう。人柱の話、日本中にあるわけです。長良の人柱があるわけです。やはり、昔話は昔はさかんでしたから。その頃は、昔話はしゃべる場合には子供が判り易いように必ず地名と結びつけてやる。あそこの土地は崖だとか、工事の跡だとか。こうやって結び付けますから、だから、指摘されたように記録のない所

に伝説が発生するということは、大半が昔話が定着したものであると言えますけど。ただ少数の例が本当にあったかどうかは検討の余地がありますが、大半はそうだろうと思います。

もう一つですね。現王考は大変面白かったのですが、山之神というのは二通りあるわけでしょう。

江之口 はっ?

下野 山之神というのは、そもそも二つあるでしょう。農民の祀る山之神。これは、まあ、木の森を祀る。もう一つは獣師の崇拜する山之神。これは獣を管理する山之神を祀るわけです。その違いがありますね。そこで、治理の場合が資料に出ていますが、「おこぜ」を山之神にあげていますよね、現王様に。「おこぜ」はシシがとれると、うろこを一枚剥いであげるでしょうから。そんなのは、今じゃなくなっていますけど、見ましたか。つまり、これはシシをとる獣の山之神でしょう。だから現王神社のこれは、伝承と、それから文書も、獣師の山之神であることは間違いない。そうなると、現王とはむしろ何か。「弦王」と云われましたけど、私はねゲンとは修験の「験」じゃないかと。

江之口 三国名勝団会に、どこか、根占のがありましたね。

下野 「ゲンノ山」というでしょう。鶴田町の。1ページの左側の「ゲンノ山」というのが示唆しますね。「ノ」も「王」ではなく、「能」だろうという気もする。これは検討の余地があります。「ゲン」は修験の「験」ではないか。験を現わす、験をよくする神である。だから「現」という字をそのままあてても構わない。つまり、その場合はもっと直接的にもっと庶民的に解釈して、修験のありがたみである「シシ」をくれる。そういうふうな獣師的な解釈ではないかと思う。

そして特に指摘されたように紫金山のあの辺が、薩摩修験の一一番の根本の聖地ですから。治理はその

入口でしょう。いよいよ、これは修驗道関係の信仰である、というふうに解釈するわけすけども。そして、その山之神をですね、二通りありますけども、猿師の山之神、験が現われる山之神、それ以前らしい現王信仰を伴なわない山之神。同じ猿師の山之神すけども、大隅半島や種子島に分布する山之神は、大隅の芝祭りとか、大根占町なんかのですね、そういう山之神。種子島国上の神社を中心とする山之神。これは狩獵神です。そこでは現王神は余り言わない。薩摩半島ではよく言うでしょう、どっちかというと。従って、これも二つある。大隅・種子島の古い形で、験が現われるのは昔の形でしょう。ただし、資料は13世紀がありますから、えらい古い形です。資料は資料として、その流れを確かめたいと考えるわけです。

それから「徳光」ですね、これも面白いと思いました。農民のですね、「トキ」という祭りが、民俗的な行事がずっとありますよね。そう言った関係ではないのか。むしろ、大変関係があって、その昔の形が、史跡・遺物として残るような信仰形態。

それは仏教ともからんで来る。例えば、六斎念佛が「トキコウ」とからんで来る。それが「トキコウ」ではなかろうか。そういう祭りが農民層に浸透して現在では農民のトキ・祭りがあちこちにある。

江之口 一種の休日として、いいですか。

下野 そうですね、休日ですね。

江之口 今日、見てですね、非常に眺めが良いでしよう。「おデバイ」をしたとじゃなかろかいと、思った。

下野 まぁ、それは「おデバイ」と見てもいいですね。「おデバイ」となると、また「おデバイ」には古い起源がありますから。形態はそう言ったもの。

江之口 とにかく、眺めの良い所で。今日は仕事せんが、今日はどこ行こかいと。

下野 骨休みをして、仏教の話を聞いた。僧侶がしたわけです。ただ「トキ」という言葉だけを見てつきつめていくと、これはもっと古いでしょ。例えば奄美なんかに、「トキグシ」という役目があります。これはもっと古い時代になりますが、一応、それは抜きにして、六斎目的なそういう「トキ」ですね。問題にしたら、どうでしょ。狩猟に出て行くには「トキ」の起りから考えて行く。これは明らかじゃないでしょ。以上、感想を述べました。

江之口 ありがとうございました。

平田 今日は以上で終ります。次回は九月第一日曜なります。

## 【1】はじめに

- 長崎堤防の位置：（地図参照）河口から約2.5km 左岸／広瀬田圃／対岸平島／八間川・江之口橋  
 “ ” 概略：小野仙右衛門が延宝7(1679)～貞享4(1687)の工事／文政11年6月に一度東一番水道付近が決壊した（現在この部分のみが残り、下流部は47年に改修された）  
 “ ” 特徴：長さ約650m・幅馬踏で約8m／八コの鋸刃形（下方はナシ・意味は不明確）  
 “ ” 伝説：監督・小野仙右衛門の子女架裟姫の人柱（詳細や実話なのか等は不明）

## 【2】人柱伝説の疑問点

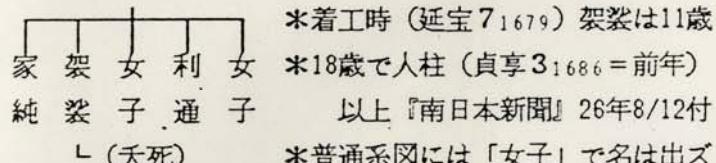
- a 『三国名勝図会』『薩隅日地理纂考』などの文献に「人柱」が出で（鋸刃形の記述もナシ）  
 千台川の南岸にあり、旧此ノ所周囲三里許の水湾なり、散策鳥追舟の謡に  
 九州薩摩ノ国云々日暮の里と申すは前には大川流れ末は湖水につづけりと  
 いへり、貞享中其湾を顛て田疇て為し高江新田と呼ぶ、時に此の石塘を築  
 て河防とす闊十二歩にして凡六町の長塘なり……『図会』

- b 「架裟姫」の実在性が疑問（墓ナシ、系図も不自然）

※一人娘説〔南日本新聞・維新前土木史〕と三女説〔高江村誌の系図〕

※小野神社は明和4年三月建立（分骨堂）

※『高江村誌』の系図



※小野仙右衛門は鹿児島城下士 ⇒ 単身赴任（@農閑期の工事 @姫が当地に居たか）

- c 架裟姫伝説の矛盾点（検証・比較）

※『南日本新聞』（伝説パトロール）

水神に位置を示せと祈る

（竣工後横ハギの乙女を奉ぐから）

縄を投入、六の弓を連ねた如く……

竣工後日堤防下手の岩付近で不明と

ソレが横ハギのある架裟姫の死体

※『鹿児島縣維新前土木史』

失敗続きで落胆の父を娘が気遣う

（高江三千石火の地獄）

小野氏の夢枕に権現様が出て神託アリ

（横ぬいの女を難所に立てヨ、ソコから縄  
 を投入してその通りに築ケ）

## ※【越路ヶの磨崖銘】

心

貞享三丙寅年

（為）四月下旬

此念壇塘成就

（）=市史

以来そこを「架裟ヶ瀬」と

\*六の弓の形は旧形⇒三下～四上

\*鋸刃形と架裟ヶ瀬の関係

★決定的差異は人柱が工事「竣工前」と「後」⇒（不安定なストーリーは実在性に疑問）

6月のある朝姫がない、翌日縄を投入

\*三千石(360間・300町・1400石)

\*姫が父を気遣い自ら人柱

## 【3】類似譜の研究A（県内の人柱伝説 = 『鹿児島縣維新前土木史』より）

- 1 菱刈・美坂堤 元亀頃 人夫の発案／キツイ作業で監督憎まれ／秘かに横キレを縫い付ける  
 2 桶脇・元村堰 嘉長3 柴→石の時／千人目の横キレ／人夫の発案／千人目に監督に横キレ  
 3 加世田大井手 弘化元 加世田郷の賦役にて築造せり施工を難み人柱を立てたとの伝説あり  
 4 大隅上勢井堰 天保？ 天保年間堰工事に関する圧抑に対し義民、酷吏を殺害せし為……  
 5 指宿・佃井堰 元禄7 隧道掘削中十間許りの堀違ひアリ、責任を重んじ施工者切腹

★人柱の提案は村人（人夫）から

★仕事がきつくなれば監督憎まれる背景（大崎大久保井手の広島県馬洗の例）

★垂水井河溝(49)年、出水五万石溝(20)年等の多工事あるも人柱の伝説ナシ

@高山鑓池完成セズ国分小村新田二度の潮止め失敗等難工事は多々あるも人柱とは無縁

★水神碑・記念碑等などには一切人柱の記録ナシ

@宝歴治水等記録が残る工事に人柱ナシ、不明（記録ナシ）な工事に伝説が発生

## 【4】類似譜の研究B（県外の人柱伝説 = 『明治以前日本土木史』より）

- 1 大分大井土堤 沈む袴が神意／発議者の袴／召使いの娘鶴とその子市太郎が身代／鶴市神社  
 2 巡礼曲輪 権現堂川危機時に親子の巡礼が現れ、万民を救わんと濁流に自ら見を投ズ  
 3 富士川筋雁金堤 毎年破堤し人柱の協議／百人目の渡河人／僧道心と女巡礼同時／決セズ  
 (護所の宮) 代官所で事情説明／兩人譲ラズ／代官提案で巡礼終了後に／四ヶ月後僧道  
 心が女巡礼の一生を托し鉢を打ち鳴らす中犠牲／生國により備前様と言う  
 4 横島町本田明神 小田牟田の潮止めが困難で人柱を協議希望者多く①「頭髪を柴の紐で七巻」  
 (七人) 次に「袴に横キレ」／伝作が自から横キレ『平凡社熊本90P シタ』  
 5 多良木百太郎溝 本流が20数m 鎌倉末に起工宝長7(1710)完成村役の夢枕に「袴に横縞のツギ」  
 この話を代官に進言し、さがすと百太郎に横縞『平凡社熊本』  
 6 青森藤崎堰 堀守大部左衛門曰一命を水神に／吾沈まん上は杭を打つべし自ら之を揉刺す  
 \*富士川筋雁金堤 代官古郡孫太夫が雁金堤の川表に備前様と称する土出シ堤を築きたり  
 \*群馬滝川用水 関東郡代伊那忠次が越中堀を延長したもので代官堀、備前堀、大川とも呼ぶ  
 ▷「沈む袴」とは文字通り沈み袴（水制工法）  
 ▷「鶴市」は工法名で一般には竜骨・マツラ。軟弱な地盤の場合粗朶（松枝）を敷く

\*大口で調所・堀内某で実施の例

「巡礼」「備前様・備前堀」は共に伊那備前守考案の工法名で別名代官堀とも言う

### 【5】長崎堤防災害伝説の背景

横ハギ →堤防に対して直角の「袴」(補強)

袈裟姫 →出シを僧衣の「袈裟」に見立てる力(若尾五雄・説)

→チヨと紙田のケサ女(五万石溝) / ツルとケサ(鹿屋弘法大師の泉)など袈裟は一

般名称か \*また袈裟ヶ瀬と鋸刃形は相関関係にある力(マツラ=出シで寄洲)

\*ナリヤキ 宿指知林ヶ島及び鹿児島脇田浜で寄洲による干拓 以上私説

バターン→\*女が身代り(日本健命) \*長良の人柱

### 【6】長崎堤防の現状(改修歴)

①文政11年決壊 \*別紙資料参照(石垣36M 横22M 高3.9 深4.5M) ★西石垣諸所取締

(石垣180M 東一番新水道明 二番水道改修甫)

嘉永2年八間川開削(広渕田圃の排水工事) / 同3年用水不足のため宮里に溜池を築く

②昭和9年~ \*五ヶ年計画

③昭和45年~ \*三ヶ年計画 (下流部分約420M=別紙資料参照)

④昭和62年~ \*今回計画中 (上流部、残りの部分)

★「樋」の耐用年数、出シの構造上(塩水・波の影響)小規模な工事は上記以外にも

★下流部分は「復元工事」だが ④弓状でない ⑤柱石でない(潮吹き)等問題アリ

★「樋」の問題\*数(地誌は4) \*材質は木か石か(木なら耐用年数は5,60年)

本県で木・柴→石は天明頃――肥後は昔から技術優秀

★現在残された部分も「応急処置」されており古形は三番出シ西側~四出シ東側のみ

@間知石(角ハ柱石)使用 @L弓状→6の弓を連ねたるが如=縣土木史

@二等辺三角形(直角) \*石材の産出地追求(文政12年改修時は東郷)

### 【7】鋸刃状の正体(ルーツ・目的)

1 出シの古型は柵シガミカ→堰→『万葉集』

竜王高岩付近に復元されている

現存分では長サ7M~18Mの出シで野面石使用

2 信玄堤 \*甲州流水制工法→永禄3年釜無川の三三附出(霞堤に幾度も改良で現存セズ)

3 勢子石 \*重き大石に枝葉のあるままなる松木を藤蔓を以てしばりつけたるを……しかし

(海の場合) て後堤を築き立たる時は絶えて波に崩壊の憂いあることなし是古法なり……

大石無き土地にては勢子石の代りに雜木を地にふみこみ立て松木のすこぶる

成長して其枝葉多き所を……其丸柱に引掛けおくこととなれり……自然に荒

波の力にて砂を打ちよせて松の枝葉の方に山の如く……『内洋経緯記』

4 川の場合 \*牛(百足・聖牛・川倉)牛の双角の形状から→組んで蛇籠を置く  
(共通) \*梓(弁慶・鳥居・地獄)文字通り→箱をつくり詰石をしづみ梓とする

\*出シ(土・石・籠・杭・竹・網代)→補強の為乱杭や柴竹・蛇籠等をめぐらす

5 本堤の保護 \*直接的(水流を河心へ向ける)→発展して猿尾

(目的) \*寄洲の現象(本堤の川表に土砂が堆積)→袴or横ハギ

\*下流部分に「鋸刃」が無い理由

★工法としていつごろから使われた力 ★近辺に類例は?

★「鋸刃」と袈裟ヶ瀬との関係→偶然力or必然力

### 【8】文政9年高江村絵図

1 築堤時の形状\* 高江村絵図には代官塘や倉浦堤と同形で鋸刃形が無い

\*西石垣諸所取締(一ブロック工事扱い=文政12年四月水神碑)

\*東一番新水道明/二番水道改修甫/石垣180M(文政12年五月水神碑)

2 代官塘

\*長崎堤防以前の干拓工事で「代官見立新田」力

\*肥後に「大名塘」アリ、群馬滝川用水をまた「代官堀」とも呼ぶ同類力

3 八間川

\*同河川は排水溝用に弘化5(1848)年の新開削とされるが絵図には描かれている

### 【8】対岸平島築堤の年代(長崎築堤工事に与える影響)

※旧は此地川中の島にして周廻半里許なりしが往歲此島の東西に堤を築き其北の地を水田とす、是よりして連墳となる『名勝図会』

※「御諏訪土手」「湯ノ浦塘」「ウシロ塘」等の俗称アリ=縣土木史

1 藩政時代 \*『川内市史・上巻』資料・伝承も無シ→「……であろう」

2 寛文年間以降\*『図会』では鳥居が河心方向/船からの参拝/諏訪社建立(寛文8(1668)年七月棟札有り=神社誌)当時堤防がなかった=陸からは参拝不可

3 長崎築堤以前\* 当時平島茂山鹿垣普請の大工事中(天和3(1683)年三月延長2600余間夫役約7千人

飯米40石を廃止、長崎築堤へ)→干拓完了し、新田が既にあった可能性

@湾奥の水田だけで茂山鹿垣大普請は疑問

★川幅が広く長崎築堤工事には影響なし力

★『日記・追録1』寛文10年頃の記事では出港が京泊・船間島で着港は平島(トトンロ)

★御仮屋の下がトトンロ ★諏訪神社建立は御仮屋との関連力

## 〔地名〕『徳光』考

(不完全=現在も調査中)

鹿児島地名研究会

63・6/5 江之口汎生

63・2/14サウセイ A-1:とっこ A 3/45/48

### 【1】はじめに

- \*川内市楠元下の俗称「トッコダン」=梟が毎夜鳴く場所である。
- \*山川町の「徳光神社」=カライモ神社=前田利右衛門
- \*亥の子の行事=『民間暦』308P(宮本常一・著)
- \*小倉氏の「斎講=時講=徳光」説
- \*斎(トコ)の日

### 【2】分布A (県内=角川地名・鹿児島より)

- ・徳光=高尾野町下高尾野/山川町岡児ヶ水/輝北町下百引
- ・徳光迫東・徳光迫中・徳光迫西=鹿児島市小野
- :川内市城上字徳光下(墓地=通称トッコドン)
- :川内市西方字徳光段(墓地)
- :徳子田=川内市中郷
- :梟段=東郷町藤川
- :徳光仏作=長島町城川内
- :徳光仏・徳光岡=鹿屋海道町
- :徳光平=伊集院郡
- :時仏=牧園宿窪田/横川町下ノ/出水市荘
- :時宗田=加治木木田
- :三角徳光仏上=開聞町仙田

### 【3】分布B (県内外=俗称、その他各種・文献資料より)

- \*俗称 トッコダン=川内市楠元
- トッコ原=東郷町南瀬
- トッコ迫=鶴田町柴尾
- トッコ石=鶴田町新田玉田/薩摩町中津川北方
- トッコ谷=宮之城浅井野
- トッコドン=姶良町北山/菱刈町の民家の氏神/川内市吉川(時光下字下方)
- 川内高城字染敷/川内陽成町宮小平/川内綱津町字迫田
- \*字名 徳行丸=隼人町西光寺
- 徳高=串良町細山田
- 徳広=宮・日南市西弁分/宮・高岡町飯田
- 戸高講平=宮・日南戸高
- 時宗=宮崎市大塚町

### 【4】「トッコウ」編年(念仏塔も含む)

- \*A 時光仏 正元元1259 南条七部次郎時光作/久遠於身延山 『開聞町郷土誌786P上』
- ? 历応31340 泰平寺五輪塔銘文 法界衆生殊一結衆等菩提『三国名勝図会』
- ? 至徳41387 宮之城佐志葦院殿 奉造立塔婆結衆等敬白『祁答院旧記』
- B 時講 嘉慶21388 同上 奉造立法身如来時講一結衆各敬白『同上書』 「切開殿とも
- 時衆 嘉慶21388栗野町広田 每月廿四日時衆『南九州の石塔・7号41P』
- C ? 康応21390 宮之城佐志?『吉川小学校百周年記念誌』 「藤川清氏宅内
- ? 康応21390 薩摩町小永田 一結時講衆『南九州の石塔・7号44P』

D トッコドン明徳21391 宝塔 舟木古城址にある『町史891P』

E 徳光原碑 明徳21391 宝塔 南瀬徳光原 上と同体 「トッコドン」か

F 徳光名 応永181411 8/10条 大隅国菱刈院の内『日記雑録・前編II No822』

G 斎=時講 応永221415 和歌山県中津村中木=最古 宝篋印塔『日本石仏事典109P下』

? 延徳31491 京都加茂町 板碑 念仏一結衆十七人南無阿弥陀仏

? 文亀31503 " " 板碑 六斎念佛人衆南無阿弥陀仏『京都古銘 記』

H 斎=時講 弘治31557 " " 板碑 斎講供養南無阿弥陀仏『同上書』

I " " 永禄31560 " " 十三仏 斎講結衆敬白『同上書』

K 徳光院 正徳51715 徳左衛門者相 干徳光院自披……『東郷町郷土誌626P』

L 徳荒神 天明61786 奉建立徳荒神天明六年十月平経鉢 『開聞町郷土誌819P下』

### 【5】その他 (文献・伝承・備考)

とっこ石 :鶴田町神子・新田玉田 高さ1Mくらいの無銘自然石

とっこどん :薩摩町中津川北方 山の中 高さ1Mくらいの無銘自然石

A とっこどん:『肥後国地誌8P上or54上』 「水俣・龜嶺峠『平凡社・熊本788P中』

B 徳光仏山 :薩州ノ堺山上ニ石浮屠アリ徳光仏ト云銘文消滅シ不明『肥後国誌下434P』

C 徳光ヶ丘 :百引・原別府部落の岡、徳光どんと前床どんの伝説『輝北町郷土誌219P』

D 徳荒神 :上記6と同、旧街道徳光仏脇、通行人は松の枝を手向け安全を祈る櫛木神トモ

E 時仏 :とっぽどんの墓とも。永禄3年ポルトガル船沈没。外仏で船長の墓という

F 時仏 :阿久根市飛松 一向宗の仏具等の焼却地『市誌1111』「阿久根の文化財230P

G 時仏 :横川町下ノ 相良家の宝篋印塔があつて昔時の鐘をならした(教委の回答)

同石塔はジブツと呼ばれている『南九州の石塔・7号44P』

H 時仏 :牧園宿窪田・出水市荘 共に未調査 不明

### 【6】その他 (今後の研究課題・問題点)

\*「B」は「せっとドン」または「きいあけドン」と呼び「トッコドン」とは呼ばない

\*「時講」の銘があつても「トッコドン」と呼ぶ例はナシ→調査継続

\*墓地近く(楠元・他)、高台(中津川・他)など、場所が限定される力

\*上記「とっこ石」「とっこどん」と「D」「E」との差が大きい

\*『鶴田町郷土史研究会々報・71or72号』『千台・16号』『南九州の石塔・7号』

\*一向宗は得仏公文治2鎌倉より宣阿上人を同伴で下向、坂本に淨光名寺建立、清淨光寺末

\*『佛教語大辞典』の「徳光」

\*一向宗禁制は永禄1560頃から『里村郷土誌395P』

\*「どん」の呼称は神か領主などに限定される力

\*「徳光」は屋号のようなものか。徳光仏に注意

\*通称・俗称地名のピックアップ

\*徳満(トクミ)等に転訛の可能性は?

\*トッコ石は供養塔か?

\*トッコウの呼称は宮崎には無い力

\*岡、山、段などが付くのはナゼ?

\*防火習俗「斎講トキウ」は無関係?

## 地名 現王

(不完全=現在も調査中)

鹿児島地名研究会

63・6/5 江之口汎生

63・2/14サクセイ A-1: じんのう1 A 1/45/68

### 【1】『現王』

□小字：川内市楠元下の「現王壇」／出水市武元の「現王川原」「現王後」

□神社：宮之城町宮田の現王山神社

□身近なモノへの関心

### 【2】『分布A』(県内=角川地名・鹿児島より)

\*現王：東郷町斧渕・藤川・山田／溝辺町有川／薩摩町求名／樋脇町塔之原・市比野

\*現王原：川内市田海／宮之城泊野／東郷町鳥丸 \*現王川原：出水市武元

\*現王迫：宮之城泊野／東郷町山田 \*現王免：薩摩町永野 \*現王壇：川内市楠元

\*現王下：樋脇町塔之原 \*ゲンノ山(俗)：鶴田町神子・新田公民館下／大口市

「南九州の石塔 7号」

### 【3】『分布B』(県外=各種資料)

\*現王：宮・佐土原町上田島 \*源王(シノノミヤ)：宮・国富町八代北俣／宮崎市下北方

\*現王島：宮・西都市黒生野 \*源王(シノノミヤ)：宮・国富町伊左生 \*玄王：宮・木城町高城

\*源野：宮・都城市

### 【4】『現王』・『現王神社』縦年

- A 弘長元 1261 現王田三反：『奈古八幡文書=鹿児島中世史会々報・8号』
- B 墓応2 1339 現王城：『角川・宮崎 333右』下記の現王島に比定
- C 応永13 1406 ミや田くち：『泊野所当取帳=清色亀鑑No44』この地名は現王社にかかる力
- D 長享元 1487 けん王田：『羽島見知日記=入来院家文書No 239』
- E 亨徳3 1491 現王山神社：川内市城上吉川11月建立 神体石『高城郷由来記』
- F 天文17 1548 現王社：東郷町宍野上 11月建立木像三体=現王親子『三国名勝図会』
- G 天正3 1575 源王神社：宮・国富町八代北俣=同年建立 現王大明神とも
- H 寛永3 1626 現王山神社：川内市城上長野8月建立 神体石『高城郷由来記』
- I 寛文年間 1661 現王島村：『角川・宮崎 333左』現西都市黒生野
- J 元禄以前 1689 現王山神：宮之城白尾川 元禄2年の棟札『文政10年山崎村再撰帳』
- K 享保3 1718 現王堂：東郷町山田下 12月再興木像四体『東郷町郷土史』
- L 元文元 1736 現王堂：東郷町藤川鞘段11月再興『東郷町郷土史』
- M 延享元 1744 現王下：東郷町宍野『東郷宍野竿次帳=市史・続古文書編150P』
- N 延享頃 1744 現王屋敷：田海諏訪神社の棟札に出ル(庄屋で推定)『川内の棟札』
- O 嘉永頃 1848 下現王屋敷：田海天心無塔神社の棟札(庄屋で推定)『川内の棟札』
- P 不明 現王：樋脇町塔之原(橋ノロ)『神社帳・下34P 右』
- Q 明和5 1768 現王：阿久根市大川(川上)『薩隅神社誌・野田54P』
- R 不明 ゲンノ山：鶴田町新田公民館下 以前は岡で小祠があったと云う
- S 不明 山ノ神：薩摩町佐志狩宿(現王)下境田家(当主は惣八氏)の山の神

### 【5】『現王神社』祭神・備考

1現王山之神=宮之城泊野 木像三体

2現王山神社：川内市吉川 神体石

3 " " : 川内市長野 " "

4現王妙見：祁答院町上手・大居神大明神末社の一『祁答院町誌810P上三行目』

5現王宮神社：祁答院町上手開元 住吉神社と合祀『祁答院町誌728P』

6現王神社：東郷町斧渕五社 山津見神『東郷町郷土史』

7 " " : " " 石堂 真石三コ『東郷町郷土史』

8現王社：" " 宍野上 平重治建立の棟札『三国名勝図会』

9現王堂：" " 山田下 再興

10現王神社：東郷町藤川鞘段 再興 藤川の三社は現在は菅原天神社に合祀

11 " " : " " 原 伊弉册尊・事解男・速玉男(一説山積神)『東郷町郷土史』

12 " " : " " 本俣 不詳・山の神力『東郷町郷土史』

13現王大明神：宮之城白尾川 『神社明細帳』山崎郷飯富神社の末社 現王園家の氏神

14現王神社：鹿児島市 不詳 『南日本新聞・移動社会部』日付不明 5年くらい前

15現王：根占町 不詳 諏訪神社の三末社の一。古くは駿王『三国名勝図会』

16源王神社：鹿屋市上祓川町 大正2年瀬戸山神社に合祀 池畠門の氏神『神社誌下693P』

17源王神社：宮・国富町八代北俣 大己貴・少彦名・猿田彦・事代主

18二之宮現王：えびの市栗下 加久藤神社の古称『角川・宮崎 221左』

### 【6】『現王伝説』(参考文献『鹿児島県大百科事典』『狩獵=岩崎美術』『狩獵伝承=法大出版』)

□1 現王山之神ハ往古現王ト云ル仁神当國ヘ下向有此泊野村ヘ居住シテ朝夕宍ヲ狩食トス其近臣ニヨソウヨサグリトテ二人之者有山幸常人ナラス故ニ時ノ村民現王ヲ敬崇シテ山之神ト号シ近臣兩人ヲ同社地ニ崇テ祭祀於干……『神社誌・上852P』

□2 矢放嶽、高峯、三腰、現王原等の地名について現王宮と関連した口碑が残っており、俵藤太秀郷や斑目氏とも関連し又現王園家、市野家の祖とも関係ありと伝えられ、其他三国史に記載があると云い、嘗て当社の神官であった岩川町中山氏が現王宮の記録を保存されていると云うが詳細は不明。尚津田万入、笠野道筋、折小野五郎七の三人の口碑が折小野にある。昔は祭例前に泊野鹿倉山で狩を行ひ神社に獲物を供えた。『山崎村郷土教育資料200P』

□3 口碑として往古津田万右衛門、笠野道筋、泊野現王と云う兄弟三人が何処から来たか道清は南瀬に、現王は泊野に、万右衛門は藤川の津田に棲居し終り、其の子孫之を神として祭った。其後 たる津田家に今猶太刀、弓、鏑矢等が残っている。『東郷史』

□4 ……津田には万右衛門様田(俗称)や松若神社がある。南瀬向江園に花立どんがあり昔人間に殺されて猿の墓という。その墓参をかねて泊野から津田・笠野に猿が使者として年に一度派遣される習慣であった。また本俣の山津見之神由緒によれば下向したのは三俣容良を加えた四人であるといい、一方主人は藤原久心で他は從人ともいう。『東郷町郷土誌705P』

\* 『神社誌』では市野々門が代宮司であるが、現今では宮田家も毎年出水から参詣している。

### 【7】『今後の研究課題・問題点』

\*「山の神」と「現王」の違い

\*この地名は宮崎県に一部あるがそれ以外には無い

\*紫尾周辺より宮崎県が古い

\*万次万三郎と狩場明神→\*高野山修験(又は熊野修験)によって伝えられた可能性

## 地名研究会

本県における研究の現状・問題点

1-1 鹿児島地名研究会

F-A3 63-6/5江之口沢生

M=A-1 46/35 63-6-1サケイ

### 【1】《研究過程での実感したこと、注意事項》

#### ① 地名研究の方法と方向性

：地名の基本単位→大字から小字へ 俗称・通称・屋号なども

：手段・方法 →地名の伝承・由来主導から、現場確認や分布の把握、文献

#### ② 研究上の問題点

：「基礎資料」 →地元の伝承はアテにならない（主きわめて観的な創作）

→文献資料も一定の目安でしかない（記録されることの偶然性）

：地名の転訛 →永年の間の複雑な変化・転訛（規則的転訛と非規則的転訛）

→行政上の作為（二字化・嘉字使用など） ↗自然：記録時の誤記

### 【2】《角川地名》の問題

：『熊本地名研究会会報19号』の記事

a 卷末資料・『小字一覧』 →

\*ルビの問題 ⇒ルビ無し、あっても不正確

\*総数 ⇒野田町の場合、小字総数は242掲載分34

\*基準が不定 ⇒消失した小字を掲載（何時の字図が基準か、マチマチ）

b 「小字収録」のもたらす成果（個人で収集は不可能）

\*分布の把握に不可欠（柳田国男・『地名の研究』）

\*表記の差異から手掛かり（郷鴨・河鴨・五敷・五色・舞鴨・合志・合志保・合子木）

\*地域的な「分布傾向」が分る（原・別府・水流など）

c 本文について

☆記事の問題 ⇒大隅国・桑原建郡の年代は

菱刈建郡の勝宝7155以後、延暦23804以前=「桑原郡」の項

桑原郡、次いで勝宝7菱刈建郡 =「大隅国」の項

[730年頃とされる律書残簡に大隅建国時+1郷で定説化]

☆立項基準 ⇒垂水市の新田社のみで川内・新田神社は出づ

=1度のみで立項……どうぞの門・やまみこ・徳光名など

数回でも非立項……勧童村・石神村・正籠村・ひられいし・台明寺

⇒建久図田帳1197の火同・火同丸～寛正31462の火同まで七度

⇒文永元1264いしかみのむら～建武41337石上城まで五度

⇒嘉暦31228城籠村～建長21250中村しやうこもりまで四度

#### ☆出自年

：和名抄・薩摩国避石郷：建仁31203平礼石～元徳21330

：旧記・前編I No199 建仁31203以降幾度も重出

(角川記載)：(実際) ↗隼人文化or中世史会報37号

⇒油須木 正慶21333→承安21172=旧雜・前編I No47

\*島廻 嘉元2年1304→徳治31303根占南保 //288P

鳥丸 暦応41341→嘉暦31328=旧雜・前編I 555P

久住 建徳21372→貞和51349=入来院家文書

冷水町・明治初1870→正平71352=名勝図会・鹿児島之一の項

栗栖平 応永51398→元徳21371=旧記・拾遺-363P

館原 延文51360……が唯一の史料である……

→建久9年1198千葉御館御願成就 =新田文書・②No13

↗「奉免八幡新田宮新燈油攻段参拾代事」

→承久3年1221道造自御館御門至干原中=新田文書・②No20

↗「令勤仕八幡新田宮御放生雜事」

#### ☆地名の由来

⇒從来通りの俗説(民間説話) 中心

：田海→(「たうみ」で文字通り川内川の氾濫原)

：柴尾→(「柴の紐」説や「柴の雲」説)

：川内→(ニニギノミコトの「千の台」説)

### 【3】《地名と行政》

@無神經の例 潮井川⇒銀杏木川 太川・忍穂井川・江川・宮内川・塩井川・身洗川・暮川・  
(土木事務所) 用水溝などの地域呼称があった=『千台・15号』参照

★明治16年『鹿児島県地誌』当時「銀杏木川」は無く、銀杏木橋のみ

：潮井川→銀杏木川の変化を不審に思わぬ

：住民の要望があれば変更もあり得る

<平田川→平佐川の例もあり、明治中期以降の改変例>

<六反田橋→三堂橋も。地名の重要性の認識が甘い>

\* 私はやはり河川というものはお役所で管理するものではなく、沿岸の流域の住民がそれを守り、利用していくものだと基本的に考えています。管理されることによって人々が川から引き離され、それによって川の名前も忘れられて行くということになるのではないか……。

玉城哲=農業経済学=『地名と風土236P』

：從来は地域社会全体の責任で維持・管理されたが、今はチャットした畔の崩壊も行政の仕事

@不勉強の例 瀬越 ⇒瀬越 / 野空 ⇒ノゾラ [川内市城上の小字]  
(電算期導入) 上村カンムラ⇒ウエムラ [川内市中村の姓]

◆元和4年『伊集院山境協定次第』に「大工・神村善左衛門」  
宝暦11年『清敷衆帳』に「神村越後守」「上村越後守」「神村二左衛門」(共に権威の証・前編)で上村は「カムラ」→概念に差異  
★データ入力時のまちがい → 「勝手訓」の例

∴歴史的背景等に疎い住民に選択をさせたり、職員が机の上で勝手にルビを打つべきでない

@合成地名 天大橋 = 川内市天辰町と大小路町に架設  
開戸橋 = 川内市開聞町と小字戸切に架設

∴後世に不用な誤解を当てる可能性アリ

\* 市町村には規模の大小の差はあるが似たような博物館・資料館が多い。開発工事等で考古資料が発見されると一応ストップがかかる体制になっている。しかし地名に対する関心は行政側はもちろん専門職の間でさえもきわめて低い……。

#### 【4】《地名変更の問題》

@区画整理等による地名変更 ⇒ 昭和町・大牟礼 (指宿市)

[新地名] 花立東・花立西 → 西出水 (出水市)

[復活] 小大路町 → 原田町 (川内市)

∴住居表示法 (できるだけ旧来の地名を)

∴地名変更も文化発展に必要では?

@悪印象の地名を嫌う ⇒ 悪谷 (アクトイ=肥土 [アクト] = 低地で肥沃)

★日常で縁起を担ぐ様に「いい地名」を求めるのは道理

@新らしく命名する場合 ∴時代にマッチした命名法があっても良いのでは?

∴現時の「希望」や「願い」も一種の情報 (旧と現の比重差)

#### 【5】《地名研究の展望》

@相互啓発・啓蒙 ⇒ 「民間説話」が主流。

「ゴロ合せ、ことは遊び的

∴「由来」ではなく字義の解釈である (針原・湯田)

∴一地域 (単独) の地名として扱う為誤解が生じやすい

∴各市町村の『郷土誌』もこの例に漏れず

\* 普通名詞の語源には、賢明にも多くの人々はめってに口を開かないのに、地名の語源となると、多くの人が軽々しく口を出す。これが日本の地名が負う、大きな不幸の一つである……。  
工藤力男=国語学=『地名の世界138P』

\* 現在の言語学者たちは、口がすっぱくなるほど、日本語と諸言語とをくらべる場合には、単語の偶然的な類似出ではなく、音韻が法則的に対応すること、すなはち、「音韻法則」を明らかにしなければならないと説く。しかし一般の人は、言語学者たちの

この意見に、それほど耳をかたむけないようである。

……口承でつたえられた地名を、漢字で表記しようとするばあいに、とうぜん問題になるのは、「その地名はどういう意味か」ということである。意味によって、あるべき漢字が、ちがってくるからである。これは一種の誘導尋問である。……

安本美典=数理文献学=『神武東遷82P ~』

∴地元伝承は結局「漢字の解説」(質問時に由来発生)

★方法さえまちがわねば「素人考察」も可能

@地名索引A ⇒ 『角川地名鹿児島・小字一覧』の索引化 (並び替え)

∴①誤植の訂正

②データ整理

③ルビを打つ

[標準語か方言か、の問題]

@離島の言語は難解

@物理的に個人では限界

@地名索引B ⇒ 『日記雑録』全地名の索引化

∴①編年

②地域別 (校区単位=見本参照)

牟木次郎 治承元 1177 前編 I No59 or 95

牟木浦 貞応2 1224 // 薩摩忠友領

牟木浦 寛喜3 1232 // 成枝名内・薩摩忠富領

牟木三郎 嘉禎4 1238 //

// 寛元元 1243 //

牟木太郎 建長8 1256 //

麦下之門 文禄 1596 (西手に「麦」の小字アリ)

平くるす門 ? ? 清色龜鑑No38 [もちみそ/餅田・餅ヶ丸] [なかつまち/中津町] [てら田/寺田] [わかまつみやう/若松町]

③並び替え

★索引は「地名の出自」「本県の分布傾向」が容易に理解可能で研究に役立つ→一般の人の関心UPへ

\*微小地名収集 ⇒ 小字以外の地名の収集・記録化

∴高齢化と共に忘却の運命で早急な対応を

∴重要性は小字と変らず

∴「生活史」としては微小地名が利用価値が高い

\*小字表示運動 ⇒ 画一的な地番ではなく、可能な限り小字で表示する。

∴小字図の現地確認に便利 (バス停の地名)

# 地名研究会報

第22号

昭和63年11月23日

鹿児島地名研究会

I. 第22回例会 昭和63年9月4日(日) 教職員互助組合会館小会議室

(出席者) 青柳俊二・江之口汎生・江平 望・唐鍊祐祥・郡山政雄・西園一俊・浜崎盛雄・肥後芳尚・

平田信芳・本田親虎・松田 誠・松浪由安・山崎盛隆(計13名)

讐藩名勝考説会: P.65~P.73

(問題となった地名および事項)

## 九玉(くたま)

平田 神社の名前の中で「九玉」が問題になると  
思うのですが、松田先生、「九玉」は扱われますか

松田 72ページの下の方に「九玉はすなわち奇魂  
の称なり」と。

平田 「クシタマ」の称なり?

松田 「クシタマ」ですか「オキタマ」ですか、  
興玉大明神・興玉神社というのが沢山あります。こ  
れに「オキタマ」と仮名が振ってあったり、「サキ  
タマ」と振り仮名が付いてったり、「クダマ」と  
振り仮名がったりします。興玉尊(おきたまのみ  
こと)というのであるので、これと関係があるのか  
と思つたりしていたんですけど。

平田 私はね、「あかがね」「しろがね」「くろ  
がね」「くがね」「こがね」「まがね」「はがね」  
「からかね」など、まあそう言った金属の呼び方  
がありますね。それと同じようなことをやって、これ  
に「玉」をつけてみたら、「しらたま」という言い  
方もある、これは真珠のこと。「くたま」となつた  
ら「金色の玉」のことかな、そんな表現と違うのか  
なと感じたんですけどね。

江之口 この神社の分布を見ると、薩摩半島に  
多い。水俣の辺まである。

平田 岖佐にもありますね。九玉神社は。

江之口 九玉神社の類はいろいろある。さっきも

云われたように「興」という字を書いたり、同じ  
じゃないかと思うのですけど。それと祭神が猿田彦  
ですけれども。塩土翁も猿田彦ですよね。まあ別名  
ですから、それがいろいろ名前が変っているとい  
うのは、おかしい。それから今日の資料の中に大隅國  
の神名帳が入っていますが、天喜二年ですよね、こ  
の中に「国魂」とあります。「郡魂」もあり、「郡  
(明神)」もありますから、いわゆる「クニ」を  
祀ったというか、あるいは「郡(グン)」とか「郡  
(コホリ)」ですね、郷社みたいな感じのもの。  
「九玉」と「奇玉」と「国魂」、みな「クタマ」と  
読めないことはない。それとの関係はどうかな、と  
思つたりしとるんですが。

平田 国魂(クニタマ)はいいな。まあ、何でも  
勝手なことをしゃべるのが突破口になるでしょう  
から、遠慮なく発言してください。

青柳 博多に櫛田神社とあるでしょう、あのドン  
タクでない、山笠をするーーー

平田 クシダ?

青柳 クスダと読むーーー

平田 クスダですか。

青柳 クシダかクスダか、どちらかと思うのす  
が。九玉(クタマ)と近いような気がします。

江之口 少なくとも白山社の言う「奇魂(クシ  
タマ)ですか、こんなことはないと思います。

甲木野たって木が倒れとったから伏木野、木が伏していた。そういう俗説みたいなことがあります。

硯川（すずりかわ）

平田 ああ、そうだ。南日本新聞が「石」というテーマで月に一度、特集を載せております。先日が坊津の井川でしたが、「硯川」を特集していたようです。

戸柱（とばしら）

江之口 数字の十柱もありますよね。これは雨戸の戸柱ですが。これなんかも、まあ、十体の祭神を祀ったから、十柱という、と。肥後系の十五社神社というのが、長島とか、あの辺に沢山ありますよね。それに対する十柱か？薩摩は「十」で、肥後は「十五」の神。何か意味があるのか。ただ並べただけなのかなあ、という気がします。何かご存知でしたら教えてください。

平田 数詞のつく神社は、普通は六所権現というのが熊野信仰で有名です。鹿児島県で出て来るのは今日の資料でも出ている四十九所。肝属郡は四十九所神社というのが高山町に残っているわけです。佐多町に十三所神社というのがあります。結局その郡の神社を一箇所で祀るということから出て来た。肝属郡は神社が四十九あった、もう一つは大隅郡になるのか、それとも馴謨郡になるのか、神社が十三あったということになる。十柱（戸柱）はそういう性格のものだろうか。

江之口 それは、誰かね、文献がありました。

平田 私のうちの側に戸柱橋というのがあるけど

江之口 『鹿児島民俗』か何かに、誰か書いておられます。

山崎 小川先生です。

平田 小川先生？

山崎 小川先生が戸柱は十柱だと説明されている

松田 「戸柱大明神」、中には「十柱」と書いたものもある。戸柱というのが鹿児島にもあるんです

が、その項を見に行ったら、十体ということ、すなわち「十柱」です。十社の十の神様を集めて、一つの「十柱大明神」というふうに統合したんじゃないかな、という――

平田 ははあ、神仏混淆みたいなものだな。九体阿弥陀仏とか六体仏とか、そういう言い方。十体仏というのもありますね。

本田 漁村の人は、皆、戸柱明神を祀るんです。船に乗る人たちの戸柱信仰は、非常に盛ん。

平田 戸柱信仰は船に乗る人たちの？

唐鍊 神社というのは、なんで合祀されるのですか？

平田 なに？あれは明治になってからの宗教政策によるものが大きい。昔は、門毎に神社があった。古い門神は何を祀ってあるのかわからないことから一つの村は一つの神社にまとめろということで、強制的に強引にまとめさしたわけです。それを南方熊楠が、猛烈に反対した。恐らく明治年間かかって神社の合併をやっている。

唐鍊 明治以降のこと？

青柳 それで十柱？それは結果であって、十ヶ所の神社が――

平田 いや、それは別だ。昔から戸柱神社がある

青柳 そういう神社というのは？

江之口 明治年間に、村を合併させる村の統合運動が起こりますよね。その時、村社が二つも三つも出て来るから、神社も合祀という命ぜられる。

唐鍊 合祀ということは昔からあるんですよ。

平田 それは、あるね。

江之口 一つは、維持関係。信仰と言うても同じ状態で守るということは出来ないから、どうしても合祀ということになったんじゃないでしょうか。

唐鍊 それはそうでしょうけどね。神社は簡単に合祀される。鶴江崎神社は、結局は多賀神社に合祀されている。

平田 鶴江崎の神社は、若宮神社の所じゃないの

唐鍊 鶴江崎はですね、今の营林署の所じゃなくて、神明宮。それから若宮神社の前になって、それから多賀山の方にやって来る。今の营林署の敷地に島津の別邸があり、そして、若宮神社の前にも島津の屋敷があった、と。そんなふうに聞いたんですが

平田 ああ、そうですか。

江之口 今、旧記録の前編から地名を全部拾い

あげて縦年をやっているんですが、それで見ますと九玉は天授三年(1377)が一番古いようです。九玉はすでにその時点であったということです。

平田 すごいものをインプットしたね。そのうち資料として出て来るでしょう。他にありませんか。じゃー、松田先生の話が神社ということですから、そちらの方に時間をかけましょう。ちょっと、休憩にします。

## 神社と地名

肥後 じゃー、松田さんの「神社と地名」についての発表をお願いします。

松田 加治木の松田です。今日頂いたレジュメの一番最後のところに、江之口さんの「地名索引A」というのがあります。鹿児島県地名大辞典（角川）の小字一覧の索引化・並び替え、これがどうしても必要であることを提唱されております。それに呼応して、加治木町の小字をアイウエオ順に並び変えてみたものを作りました。ご活用頂きたいと思います。以前、「姶良町の地名」というのを平田先生が作って配布されておられますので、第2号にあたります。これを読む時に気が付いたんですが、これもすでに江之口さんが経験済みのことで、江之口さんのレジュメに、データ入力時の間違い・勝手読みをするなどを注意されておられます。私もそういうことを経験せざるを得ませんでした。データを入れる段階で、適当に読んで、勝手に読んで、整理したものです。加治木町の小字は全部で630ぐらいあります。姶良町は1300ぐらい、約半分。加治木町は小字が少ない方。ちょっと気が付いたんですが、加治木町の場合は同じ小字がちょっと多すぎるような気がします。荒平(あらひ)が三つとか、岸之元(きのもと)が三つとか、宮田(みやた)が四つとか、何か気になっております。いずれ現地に

行って、調べてみようかなと思っております。

今日は「神社と地名」という題ですが、今まで既にいろいろな神社について話されて来ております。例えば新田神社、会報第12号に書いてありました。今もちょっと気になっているのは、加紫久利神社。藤井先生は大分説で、大分のなんとかを。中村先生は熊本説で、熊本のどこかを。○○先生は全然別なのを。非常に難しい神社なんだなあと思っております。そういうことで、神社の名前というのは何か意味があるのかな、と思ったりしております。

今、ちょっと神社に興味をもって調べているわけですが、神社を地名研究的な立場から見て行ったら何かわからんかなあ、と思ったのがそのスタートであります。例えば、今お帰りになったのですが、江平先生が昨年「ヒラキキ」というのを考えておられました。それは、開聞岳の昔の火口の意味である、と。昔は、火口の形が霧島の御鉢のあの状態だったそうです。御鉢の状態のへっこんだ所を、ヒラキキの「キキ」と言うんだそうです。そして、「ヒラ」という言葉は、傾斜という意味。そういうような所を連想されて「ヒラキキ」という神社名が付いた、と。

神社というのは、地名に非常に関わっていると思います。もともとは氏神様を祀る神社、それが本地の

姿。それが、いつの頃かわかりませんが、ウブスナノカミ（産土神）というような神社に、あり方が変って来る。神社の名前というのは、地名をとった神社はどちらかというと新しい方で、祭神をとったのや人名をとった神社の方がむしろ古いのではなかろうか、と考えるわけですが、必ずしもそうとは言えないようです。

レジュメの6ページ・7ページ、地名を冠した神社。これは郷社で99。郷社だけのつもりです。とりあえず神社名を見まして、地名を取っているなあと思われるものと、そうでないものとに分けてみました。7ページの方はその他の郷社。この中に諏訪神社とか八幡神社、熊野神社あるいは菅原天神。いわゆる他国から勧請された神社がここに入ります。それから数は少なくなりますが、天御中主神社・稻荷神社とか住吉神社とか、そういうのがここに入ります。これらのいわゆる外からの他國者を除いたものを6ページの方に集めたつもりであります。6ページの神社名について、ご検討頂きたいと思っています。

この中にもいろいろな神社が混っております。例えば、太玉(みたま)神社とか、宮崎神社、新田神社とか、入ってあります。地名を冠した神社と思われる神社のつもりなんですが、そうでないものも入っているようです。これらの中から、私が今日ご検討頂きたいなあと思っているのを、更にピックアップしたもののが1~4ページになります。

まず最初、阿字賀神社というのがあります。このアシカ神社というのは、何か気になる名前です。古風な名前だったもんですから、何となく。この神社は宮之城町佐志字豆漬にあります。三国名勝図会には「阿字院殿天月照雲大居士」という法名がある石塔があると書いてありましたので、どこにあるかなと探してみましたが、前目に俗に「キリアケドン」という三重の石塔がありまして、紀年銘は貞享二年

とありました。1685年です。阿字賀神社の「阿字」まではこの法名と同じなんですが、何か神社の方が新しいような気がします。角川の地名大辞典には、「阿字賀山」「阿字賀前」という小字が書いてあります。祭神は玉依姫・品陀和氣命・息長足姫命。熊野系の神社のようです。一つだけ注目したいのは、宮之城町湯田に湯田八幡というのがあります。この湯田八幡で行われる祭祀が民俗学上何か大切な所だそうで、小野重朗先生が詳しく書いておられます。湯田八幡で祭礼が始まると、まず第一にこの阿字賀神社に奉納するのだそうです。どっちかというと、民俗学の方から攻めて行った方が早いんじゃないかと思ったりしております。これは開拓者との関係があるのでないかと書いてあるようであう。登ってみたんですが、やはり山のちょっとんです。階段をかなり高くあがりまして、佐志という集落を大きな範囲で見渡す景色のよい所でした。

次は赤城神社。「入来郷土史」には、古代入来院の中央に位置する神社と書いてあります。何か意味がありそうな神社です。入来麓赤木とあって、月読命・稻荷八大竜王と書いてあります。この赤木というのが地名に由来するのか。「入来郷土史」には「猿」と関係がある云々とありました。なぜ「猿」なのか、本田先生に教えて頂きたいと思ってやって参りました。

猿が出て来たんですが、動物名の神社はないかと探したら、鹿屋に田貫神社というのがある。タヌキというのは動物じゃないかなと思ったら、何か字が違うようです。

植物はないかなと思っておったら、今日の新聞にピロウ神社というのが出ていました。志布志の桜島に何かあったそうで、ちょっと新聞を読んだら、和銅元年とかいうのがありますから、やはり、そんなに新しい神社ではないなあ、と思ったりしたんですが。まぁ、植物とか動物を採った神社名という

のは少ないと思っております。

次に、多羅神社というのがあります。これが引っかかるんですが、これは指宿市東方田良にあり、小字が「大明神」。その上に高祖神社。タカソというのでしょうか、コウソでしょうか。これは指宿市西方中川字高祖免にあります。その下の方に、今まで「クダマ」と読んでいたんですが、興玉神社。コウタマ? サキタマ? —— 指宿市十町興玉。こういう神社があります。ご検討頂きたいと思います。

今日もらった地名研究会報(20号・21号)の中に現王山神社・徳光神社・紫尾神社があります。江之口さんの苦労されているものです。神社名は、どういうようなのを採って名付けるのか、よくわかりません。

神貫(かんき)神社、これも何となく引っかかります。田貫神社とのかかわりで、「貫」というのが何か意味がありそうな気がしてます。「貫」というのは、トンネルの意味があるんだそうです。垂水の神貫大明神社というのは、いろいろ本を見てみると、説明がばらばらで、私もまとめられません。上木大明神、これを神貫大明神に改めるという文句があります。新城に「今上水」とあり、これを「神貫」に改めるという説明もあります。神木大明神という神社もあります。神木神社というのは、福山、それから高隈にもあるようです。同じ系統の神社ではないかなあ、と思っています。「貫」にトンネルの意味があるというのは、「入来町郷土史」に書いてありました。

次は、七狩長田貫大明神。最初はこれ何だろうかと思いました。俗称、田崎神社と云っております。所在地は鹿屋市田崎町本村。『薩闊日地理纂考』は田貫神社です。『三国名勝図会』では狩長神社。「七」は判りませんが、「狩長神社」というのが、大根占・田代・鹿屋にあるようです。「狩長」というのは、やはり、大隅半島の山神地域を連想する

わけです。読んで字の如く「狩の長」を祀る神社であるというのを、小野重朗先生が書いておられました。したがって、七狩長田貫大明神というのは神社資料に書いてあって、『三国名勝図会』はこの神社名は書いてありません。

それから、川上神社。調べていたら二つあったんだそうで、大根占と高山町に。和名抄には肝属郡川上明神という。平田先生は高山町の方をとっておられるようです。どっちも川があるようです。『三国名勝図会』には「川上にあるを以て川上大明神と称す」とあります。『三国名勝図会』には川上洗大明神と書いてあり、川上神社ではないようです。やはり、地名を採ったのが古いのかなあと、疑問を持っています。

止上神社というのは、国分にあります。重久に。この止上(とがみ)は、祭神は彦火火出見尊。これは『宇佐八幡託宣集』という史料があり、この中に義老四年の隼人七城のことが書いてあり、隼人七城の地名を当てるのがはやっている。例の「志加牟」という地名があります。『肥藩名勝考』の121ページを開いてみてください。下の方に、幸原・神野・志加牟などとありますが、これは城の名前なんです。これをどこに比定するか、まだ判っていないというふうに中村先生は書いておられます。「志加牟」というのが、今の止上神社のある所ではないかなあ、城の名前を採った神社か、あるいはそれに対応しないのかなあ、と思ったりしております。

それから、伊佐知佐神社。谷山にあります。和田に。これも、イザナミ・速玉男命・泉津事解男命(ヨモツサオノミコト)、熊野系の神社だそうです。『三国名勝図会』によると、この神社は転々としているそうで、最初は伊佐郡蘭牟田とあります。どうして蘭牟田が伊佐郡なんかに、そしてその後、志布志→月野→佐多→谷山と移動したのです。私は、伊佐知佐の「伊佐」は伊佐郡蘭牟田の伊佐を採った

のだろうと思っておったのですが、今まで頂いた地名研究会報に眼を通じて、次のことを知りました。伊佐郡というのは、中世に突然出て来る郡名だそうです。「伊佐知佐」は「建久団帳」にも出て来るんだそうです。まぁ古いわけです。伊佐郡の伊佐じゃないなあと思ったわけです。たんたんと変るわけですが（笑い）、伊作（イサ）のイサが、吹上町の伊作は違うのかな。谷山というのは向うの勢力圏内に入った時期があるんだそうです。加世田市に佐岐比佐（サヒツ）神社というのがあります。似たような神社で、これらと合わせながら考えて行きたいと思っております。

最後に鷹屋神社ですが、鷹屋神社は前回頂いた会報にあります。鷹屋は竹に関係があるのだろうか。鷹屋ならば、鷹に関わるものと理解できる。また、高家（タカヤ）は高い屋根・高い家の表現とも考えられる。ただし、高い家の場合が高江（タガ）の表現があることを考慮しなければならない。これだけが、鷹屋神社について前回検討されたことです。

それで、鷹屋神社は四つあります。内之浦・笠沙・川辺・溝辺。高屋山陵については、中村先生が整理されておられます。また論文という形でまとめてはおられませんが。その「高屋」を四つとも参拝して来ましたが、やはり山と関係がありそうです。内之浦の鷹屋神社は天子岳（テンシタケ）・国見山（クニミヤ）という山があります。加世田の方は竹屋ヶ尾、溝辺の方は高屋山陵。どれが本家なのかはよく判りませんが、こじつけると、高屋については、高いという字は、やはり、そのまま地形の高い低いを表現し、鷹は、強いて考えると、やはり高い所を飛ぶんだ、と。やはり高い所は見晴らしがいいんだなあ、と。そう云ったところで、やはり共通点はあるわけです。高屋の「屋」は、社（ヤシ）の「ヤ」。神社は大宮・宮という地名がほとんど。「屋」は「ヤシロ」とか「宮」を表わす言葉ではないか。そんな

ことを思ったりしています。

もう一つありました。日光神社というのが2ページの真ん中ぐらいに、財部町日光神村。これは『三国名勝団会』には、日光神村です。現在は財部町北俣宮原と書いてあります。この北俣宮原というのも、神社に関係があるとあります。祭神は伊勢内宮・天照大神で、日光信仰と関わっているとあります。似たような例を探しますと、大崎町に照日（テルヒ）神社というのがありました。聞いてみると、有明町の照日神社というのと、大崎町の伊勢神宮というのが合わさって照日となつたんだそうです。で、これも天照大神。鹿児島には鶴江崎神社（神明宮）がありました。3ページの上方に、たくさんの祭神が書いてあります。本社は江戸芝神明宮とあります。これから神明宮という名前を出したわけです。

次に、伊勢神社が気になりまして、伊勢神社を見てみたら、高山町の伊勢神社は、住所が高山町野崎字天道とありました。日光神社からこの天道。やはり、天照大神です。

この天道が気になり出しまして、調べてみたら、七~八つぐらい、角川にありました。蒲生町に三つ。溝辺町に天道越（てんどうごく）、菱刈町に天道ヶ尾（てんどうがお）、大口市に天道ヶ尾とあります。すべて、姶良郡内です。他は見付けられませんでした。それから、浜田先生から電話があったのですが、東町の獅子島に天堂山（てんどうやま）というのと、天道小学校が昔あったんだそうです。

天道信仰と関わっているとまでは思うのです。以前、天道信仰が城の天守閣に関係があるというようなことを聞いたこともありますので、興味深く思っているんですが、ご存知の方はご指導頂きたいと思います。まぁ天道坂などは地名研究的な立場から、日光信仰・天道信仰などは民俗的な立場から、伊勢神社については神社史という歴史的な方面から、これらの三つの方面から攻めて行くといいなあと思つ

たりします。格好の研究材料が「天道」ではないかと思います。

以上、まとめませんが、ご指導頂くたいなあと思うことを、1ページから4ページまでの間にあげておきました。それから、5ページの神社名は『旧記雑録』前編にあります。この神社名は変な名前ばかりで、ほとんど読めないような神社です。真ん中ぐらいの所に「阿賀志明神」というのがあるもんですから、阿志賀じゃないかな、阿宇賀がひっくりかえったんじゃないかなと、ミスプリントじゃないかと、思ったんですが。以上です。

#### （質疑応答）

肥後 どうもありがとうございました。今、松田先生から非常に興味のあるお話を頂きました。地名研究に興味を持っている者は誰しも「神社と地名」というのは、いつも頭から離れない問題だと思います。私も以前、植物地名と取り組んだ時、白木神社・赤木神社、それから青木神社ですね、いろいろ出てきました。その時、まぁ先ず白木神社・赤木神社のことを、いろいろ参考書を見ました。本田先生あたりにも、いろいろ教えて頂きましたけど。神社の方から勉強しなければ、ちょっと入れないとあって後回しにしておったのですが。今日はいろんな視点から我々にとって非常に身近なところにある地元の神社について、問題提起をして頂きました。余すところ、そんなに時間もないんですけど、今提起された問題の神社名について、皆さんの忌憚のないご意見をうかがいたいと思います。よろしく、お願ひします。

山崎 浩みません、いいですか。この出典について不案内なんですが、ちょっと説明して下さいませんか。どんな資料ですか。

松田 え？これ。

平田 川内市立図書館のもの？

松田 川内市立図書館の資料で、江之口さんの口添えで見ることが出来ました。「明治神社誌料」

山崎 どこが出た、どういう資料？

松田 これですか。進○会？郷社と県社だけをまとめてあります。県社と郷社だけ。これは郷社だけ。

山崎 すると、一社ごとの明細帳みたいなものになつてます。どの程度のことを載せているのですか。

江之口 あまり詳しくはないです。大概、1ページぐらいですね。例えば『三国名勝団会』に何が書いてある、名勝考に何が書いてある、どんなことを書いてあると、まとめたものです。上・中・下で三冊。昭和37年に出了1500円ぐらいの詳しい本です。県立図書館にあるかも知れません。

山崎 その上の5ページの資料は？

平田 『旧記雑録』の調所文書というものです。これはね、肝属郡には四十九の神社があったということを示すものです。それを統括したのが、高山町の四十九所神社。これらの所在地が全部確かめられたら、肝属郡の範囲と、それから馴謨郡の範囲と、熊毛郡の範囲が判るという貴重な資料なんだけども、仲々、手掛りがつかめないです。

江之口 まぁ、それは、要するに、大隅国の神名帳です。全国では大体平安時代に神名帳が作られておって、九州では筑前と筑後の二冊が残っています。それで、旧記雑録をずっとチェックして行ったら、薩摩国にもあったことが、はっきりと書いてあったようです。大隅国も、これは完全じゃないそれから島（種子島・屋久）が入っておりますので全体は判らんのですけど、まぁ、一つの手掛りにはなるようです。例えば、國玉とか郡玉とかいう地名が、全国的に見ると、他の神名帳にも見えてますので、そう言った共通性というか、村にはどういうものがあったとか、ある程度の傾向というものが

大体判るようです。それから、4ページの垂水に新田(あいだ)とルビが振ってありますが、角川の地名辞典では「にった」と出ていたと思うんですが。

松田 垂水のは「アラタ」と書いてありました。

江之口 角川の項目では「ニッタ」で出ていて、新田神社が出ていないんですね。項目として。それで、おかしかね、と思うて、気になっていたんですが。これには「アラタ」と書いてあるもんだから。

松田 角川は気付かんかったけど、垂水郷土史を見て「アラタ」としたんだな。（編集者：角川書店『鹿児島県地名大辞典』には「にったじんしゃ：新田神社：垂水市市木所在とある）

本田 「ニッタ」と言えば、川内の新田神社な、先代の宮司の種子田さんから、我々はもう六十数年前、教えてもらったんだが、その時に「この神社の名前はニイダ神社ですよ」と、「ニッタ神社じゃありませんよ」と、くれぐれも云われたんですよ。現在は孫さんが宮司になられたから、この前会った時に、「おまんさあの祖父さんから我々はニイダ神社だと、ニッタじゃないと、はっきり教えられた。なんで、今、ニッタになったのか、いつからなりましたか」と聞いたわけです。そしたら、「いや、正しくは今でもやっぱり“ニイダ”です、と。だから祝詞(のど)の中で読む時は、必ず“ニイダ”と読みます、と。“ニッタ”というのは俗称だから、どうも仕様がないから、まあ、まあ、そう言ってるわけで、正しくはやっぱり“ニイダ”です。」と。

平田 以前、「ニッタ」というのは関東のよび名だから、新田(にった)神社が一つ飛び離れているのはおかしい、と言ったことがあります。（会報12号）整理をすると、ニイダ→ニウタ→ニッタ→アラタ→シンデンになります。

本田 現在の宮司の祖父さんから習いました。若い時、四～五十人が二晩ぐらい泊って修業するのが

よくあるでしょう。私どもがそれを受けたんですよ。その時、くれぐれも間違わないようにしてくれと、云われたんですよ。

平田 結局、あれでしょうね。新田義貞とか楠木正成が、さかんに崇拜されていた時代に——

本田 そこを、皆に合わせた関東式でしょうね。

平田 だから、新田義貞との関係で、宣伝したのでしょうね。「ニッタ」と。

江之口 和名抄はさっき平田先生がおっしゃったけど、「ニイダ」か「ニウタ」です。「新」の読み方は。

本田 昔のものは「ニイダ」でしょう。そうですね。われわれが六十何年もですよ、「ニッタ神社」と言っておった。どしこ、そう言いやつたって、皆「ニッタ」という。「ニイダ神社」とは云わないわけですよ。

江之口 それとですね、ちょっと、今、データがないのですが、中世の文書を見てますと、「にだ」と書いてあります。平仮名で書いてありますから、「にだ」ですから。中世も変っているのですよ。

本田 「にだ」？

江之口 「にたのみや」

本田 「にた」。牟田と同じやなあ。

江之口 ですから、同じ読み方でも、これは時代的な搖れがあるんじゃないでしょうか。

郡山 それとですね、鹿児島市の宇治瀬神社のところに「神月川のことを宇治瀬という」との説明があるようですが、神月川は甲突川のことですね。宇治瀬神社の周辺を流れているから神月川というとの説明になって来る。上月・江月が神月になり、それが後になって、なぜ甲突になったのかですね。その辺が、まあ、説明が欲しいのですけど。

本田 早よ、何か、島津どんの誰とかが名付けたというようなことが判ればね。そういうような事だと思いますがね。

江之口 それとですね、阿字賀神社ですが、『祐答院史』の中に、もっと古いのが出たと思ひます。「阿字院領」とか、「阿字院殿なんとか云々」と書いてあるのを、ちょっとはっきりしないのですが。それと、湯田八幡との関係ですけれども、最初に訪問するという、話を聞きました。倉野の稻穂神社が、新田神社の「奴踊り」で、最初に踊りを奉納するのと同じで、何か兄弟関係か姻戚関係があるのでしょうか。熊本にも此処が一番最初にしてからという似たような類例があるようです。兄弟か姻戚か何かそんな関係でしょう。

それと、まあ、一人ばかりしゃべるといかんのですけど、古い神社の所在というのは、結局、田園ですね、莊園。莊園のあった所に、まず神社が置かれたということが考えられる。建久図帳の中に、いくつか莊園が見えますが、例えば出水の山門院の老松莊には老松天神がある。出水莊には、加紫久利神社もありますが、そこは宮崎八幡宮があります。島津久経が、元寇の時に博多の宮崎宮を拝んで難を逃れたので勧請したという伝説があります。それから、溝家院には値賀尾神社があります。益山莊には、益山八幡という古い神社があります。莊園と神社の関係というのは、否定出来ないと思ひます。もう一つ同じような形で、川内では新田神社が問題になりましたが、新田神社も。そこは、いわゆる和名抄の新多郷ですか？ 川内川をはさんで、反対側に宮里郷がありますが、宮里郷には三代実録に記事がある「位」をもらった志奈尾神社があります。また川内には同格の白羽雷神社がありますが、そこは天辰とか平佐の田園があります。その対岸は中郷。中郷は、まあ、国府の膝元ですけど、国分天満宮があります。田園があれば、古い神社があると考えていらんじゃないでしょうか。

それと、まあ、当然ですけども、神宮寺とか別当寺。お寺と神社というのは、神仏混淆で、同じよう

な扱いを受けます。何と云いますか神も仏もごちゃごちゃです。新田神社には五代院が付いています。それから、宮里の志奈尾神社には、これはあんまり注目されていませんが、経筒が出た清水寺という古いお寺があります。白羽雷神社に対しては天辰庵寺というような古いお寺があります。天辰庵寺は旧記にある「リョウガンジ」かなと思うのですが。まあ田園があれば、お寺があると云ふうに考えていいような気もします。

本田 私も神社について調べていますが、まあ、入来とか川内とかですね。それから奈良の神社も。神社の配置を見た時に、田園と関係があるばかりでなく、古代のその地域の王様が作れ作れと命じたんだと思う。そうでなければ、神社がきちんと正三角形に並ぶはずがない。（黒板に図示して説明）大体これが30度。これが夏至の太陽の出る所。これが冬至の太陽の昇る所。これが春分の。夏至の太陽は巻縫山から出て来るのです。人麻呂が歌を作った。「メルキが岳に雲立ちわたる」。それから、ここは何と読むのか知りません。龍割山というのあるんです。そして、ここ距離とここ距離がちょうど同じで、二等辺三角形になります。そして、ここに忌部山という、お祭りをする所があって、どこでしたかね、藤原鎌足を祀る、あの、多武峰の。

平田 談山神社？

本田 談山神社とここが直角になります。九十度になります。こういうのを見ますと、談山神社を祀る以前から、ここは聖なる所だったと思う。川内の八幡様でも、これは夏至の、これは冬至の太陽の出る所。ここは杉山天神。ここは昔の国衙・国分寺の跡です。ここが大小路の伊勢神社。此処と此処とは二等辺三角形です。それから、大島の天神がある。ここは中郷との境目の所。ここは立春の所。ここは大体10度ある。ここは立夏のアラヒモ田。此処に白羽雷神社がある。この白羽雷神社と中郷の此

處は、二等辺三角形。これは地図の上で当ればきっと同じ長さになる。川内川はここをこう流れている。こういう配置になる。

入来の場合も、そのようになっている。入来の役場のある所の方の城山の所に、昔、赤木という神社があった。そこから見ますと、やっぱりこれと同じ。夏至の太陽の出る山と、冬至の太陽の出る山と。この途中に、此處と此處に、神社があるんですね。冬至の太陽がこっちの山から出ますから。その神社とこれが二等辺三角形になる。そして、この冬至の太陽の出る神社から樋脇の方に移動して行って川内川沿いに眺めると、ずっと神社が一直線に並んでいる。そこは、吉田の「山之神」から二十数キメトル、一直線。地図の上で。

こういう配置はね、入来もこうなっている、川内もこうなっている、奈良もこうなっている。調べたら、どこでもこうなっていると思う。これが昔の人が日の出を見て暦を作った証拠だと思うのです。暦がなければ、人間は生活が出来ませんので。とくに農業というのは、種蒔きの時期が違ったら駄目なんです。太陽暦を知つたら駄目なんです。だから昔の人が太陽暦を知っておった証拠ですよ。一年は三百六十五日四分之一ある。昔の人たちはよく知つておった。きちんと、こうなっておる。あの山から出る時に種子を、何の種子を蒔けばよいということを経験上知つたはずですから。そんなことを考えてね、これは地名と関係ありませんが。

平田 昔は土地の区分、町割りとか地割りをする場合、春分とか冬至の日の朝日のあがる方向を基準として方位を決めるということなどはあり得ることでしょうからね。それから、四神相応の土地を選ぶとか、どの方向にはどういうものを配置するとか。今言われた太陽の方向ばかりでなく、条里制もそうでしょうし、町割りとか、神社の配置とか、寺院の配置とか、方位を重視するのは相当古くから続いた

たろうと思います。

江之口 それが、どういう形でどの辺まで残っているかというのが気になるんですがね。

平田 うん、まあ、ね。

江之口 確かに古代はそうだったかも知れんが、そんなのは極端に言えば、中世にはそんなことまで考えたような筋は全然ないですよね。

平田 いや、あるよ。

江之口 ありますか？

平田 例えば、国分の舞鶴城。舞鶴城を築く時、城の占地について、やっぱり四神相応の土地ということを考えている。発掘してみて、初めて気が付いた。

本田 「隼人文化」に、藤井さんが書いていますよ。

平田 ああ、そうですか。

本田 川内の八幡様と入来の梅薬師と、それが高千穂の、何か、あの神社、韓國か？

平田 いや、主な神社をそのようにつなげば、あまりにもスケールが大きくなりすぎるんですがね。

本田 それが奈良の神社にもあるんで、鹿児島の神社だけじゃない。

青柳 ある程度判ります。あり得るんです。霧島の場合、あっちこっちにある。その四神ですね、赤木の他の色、白とか黒とか青ですか——

本田 赤木については、また別の考えなんですが

青柳 ああ、そうですか。

本田 何故、赤木と言ったかというと、赤木神を祀るのは舟瀬尻なんですよ。その舟瀬(ぬせ)が話せばまた話が長くなるから。舟瀬というのは奈良時代に作った港の名前です。川内川は舟瀬がたくさん出来たはずです。どこの川も、万之瀬川みたいな川も舟瀬：港の名前があったはずです。現在、地名として定着しているのは、樋脇と入来だけです。鹿児島県で二ヶ所しかありません、舟瀬は。入来の役場の

側にある川は、舟瀬川というし、その辺を舟瀬と言っています。役場の側にある橋は、舟瀬橋。だから、舟瀬橋の下(しも)の方から、川内行きの舟が出たわけです。そして、舟瀬氏が祀る神の木があったはずです。えー、50年ぐらい前に伐られた木がありました。昭和11年でしたか、超古代木で、屋久島の縄文杉みたいな大きな木でしたが、まあ二千年ぐらいだったんじゃないかなあ、と。私は、まあ、想像しております。

江之口 郡衙関係には、赤木神社じゃなくて、高木神社もありますよね。ああ言うのとは関係はないのですか。

本田 その木が赤木だとは思わないのですけど。

郡山 神社と地名の関係を考えた時に、神社が先か地名が先か、その辺のことはどんなものですか。

平田 両方あるでしょう。土地の産土神として作る場合は、後に神社の名前が付くでしょうし、それから、神社の門前町として発達すれば、神社の名前が土地に付く。両方あるんじゃないですか。

郡山 両方の例が揃っている所は、大概、熊野神社があるようですな。

平田 これは大事な作業だと思います。神社の地名を整理して、全部インプットすれば、いろいろな角度から推理出来る。現在、鹿児島県の寺院名や山の地名を入れたり、川の名前を入れたり、岬とかをインプットしているのですが、そう言った作業をすると、インプットしながら一つの方向性を見出すことが出来るようです。神社もまだいろいろなやり方でソートして行けば、もっと整理が出来るのじゃないでしょうか。最近、コンピューターとかワープロとか、有力な機械が出来たから、地名の整理にはだいぶ役立つと思います。

唐鑑 神社の名前が変化した神社ですね。例えば諏訪神社が南方神社になったとか、いろいろするわけですが。

本田 これにある天御中主神社なんてのは、これは明治10年に変えたわけです。

平田 妙見が全部そうですね。

本田 どこでも妙見神社と言っておったのを、これは仏教の名前だから日本の名前に直せと言って、無理に直させられたわけです。まあ、妙見菩薩という北極星を祀る——

唐鑑 八代に本社があります。

本田 それでまあ、北極星を天御中主神という。

平田 うん、その発想は面白いですよ。北極星を中心にして星がくるくる回るでしょう。だから、天御中主と思ったのでしょうか。面白い名前の付け方だと思います。それから、天御中主神が出て来ましたけど、延喜式の神名帳には天御中主神が出て来ないです。神產日神(かんみれのかみ)・高御產日神(たかみれのかみ)の次はイザナギノカミ、それから天照大神ですね。そう言った神名が出て来るのに、延喜式には天御中主神という名前は出て来ない。だから天御中主神という神名が出て来るのは、延喜式よりも後だという見当が付くのです。ところで問題が一つあります。古事記・日本書紀には天御中主神の名が出て来ます。記紀にその神名があって、延喜式の神名がないことを、どのように理解してよいのか。残された大きな問題だと思います。

唐鑑 諏訪神社は、なんで南方神社？

江之口 あれは神名でしょう。健御名方主命。

平田 うまく考えて付けています。

唐鑑 長田神社は？

平田 それは地名をとったのでしょう。長田町の

唐鑑 地名が先？それ以前ですよ。

平田 ああ、そうか。結果か。長田神社から、長田町と付いたのだろうから。

青柳 長田神社の入口の所に、看板が。何か説明が書いてるけど、何のことかよく判りませんが。

本田 それは古代のことによく知らんから。藤井

さんに云わすれば、諏訪の南方(みなみ) かもともと  
坊津近辺の南方(みなみ) だと言うのです。

平田 ああ、西南方(いしみなみ) 村とか言ってた  
ですね。あっちは。

本田 もともとこっちの神が本当の南方(みなみ)  
なんだと。それが伊勢に行って、伊勢を今の天皇家  
の祖先がおっとてしもうたから、その前のミナカタ  
神をもった人たちが、信州の諏訪に移って、御名方  
神を祀った、と。そうかも知れんな、と。

平田 これは、もっと整理をすれば、面白いかも  
ね。この研究は。

松田 調所氏文書を見ていると、読めない字が  
あるんですけど、面白いのがありますね。宇浪明  
神。国玉大明神から下に、屎世があるん  
ですね。

平田 うーん、これなんかね。

松田 その下の方は、読み方は?

平田 子奈義比之瀬大明神(こなひのせだいめうじん)

松田 何か、上品というよりは、そうでない神社  
が多い。良字を選ぶということは聞きますが、これ  
を見る限り、何か反対の方が気になります。

江之口 神社はいくつありますか。肝属は四十九  
ですか。

平田 肝属は四十九。

江之口 大概、これくらいあったはずですよね。  
どこもね、当時は。

松田 これは五十じゃないですか。数えたんす  
けど。

江之口 一番最初に四十九前と書いてある。出雲  
風土記なんかを見ても、百幾つあるんですよ、郡の  
中に。そう言ったのはたくさんあったのでしょうか  
現在それをどれだけ復元出来るかと言えば、あんま  
り出来ないわけです。ですから、例えばある神社が  
あると、十世紀頃の神社から同じ場所で名前が変っ  
てもつながって来るとか、それとも全然別の場所に

つながりはないのか、それらがうまく行けば面白い  
ですかね。

平田 これが分析出来たら、一つの突破口が開け  
ると思うのだけどね。それから、阿字賀(あしか) が出て  
来ましたが、鹿児島県には「シカ」とか「シキ」  
とか、そんな地名が多い。例えば、ケシカリとか  
ケジュクリとかね。だから「アシカ」という地名は  
相当古くからの地名だと理解していいんじゃない  
ですか。

青柳 全然違うことで、「ヌッ」と言やってしま  
う、用水路のことを。

平田 アシカ用水って、ある?

江之口 いや、違う。「ヌキ」、トンネル。

平田 ああ、「ヌキ」。ヌキはトンネルを掘って  
そこから水が出て来るのでしょう。

松田 「田貫」はやっぱりタヌキじゃないですか  
江之口 ははは。動物起源説か。

平田 さあ? そげんタヌキが多かったとかい。鹿  
児島は。

江之口 証々寺はタヌキやっどん、神社にタヌキ  
があっどかい。

松田 植物をとったのもない?

青柳 アオキは樟(あき)でしょう。

江之口 樟の木。

松田 植物ですかね。

江之口 樟(あき) という植物はあるよ。これに関  
係があるかどうかは別にして。

肥後 清少納言も言っている。

江之口 桂木もあるし、葛(かずら) もある。葛城神  
社も「カヅラ」。探せばどこでんあるのじゃ。

松田 動物の付いた神社を、どうしてん探して  
みましょうか。

江之口 それで、『群書類従』の中に、神名帳が  
入っている。その索引を見れば判ります。筑前とか  
筑後の神名帳はそういうのを見ると、どういう神社

があったのかという傾向が判ります。それとですね  
国史大系だったか、何か真っ黒い本ですね、一万  
円ぐらいの本が30冊ぐらい県立図書館に並んでい  
る。『日本神道史大系』ですか、その中にも神名帳  
が納っているのです。この大隅国のが入っている。  
そういうのを見て行くと面白いと思う。

松田 外に出してある?

江之口 出してあります。『群書類従』は。

平田 そんなのを持って来て、コンピューターに  
どんどん叩きこんで整理をすれば、反って早いね。  
全国同じものを把えた方が早いかもね。

青柳 7~8万あるのじゃ。

平田 それだけ打ち込むのも大変だけどな。

江之口 それとですね、けちをつけて申しわけ  
ないんですが、ソートしたものがありますけど。こ  
れは自分の経験ですが、例えば、西別府。これは大  
字ですけども、西別府ということがありますね。○○

別府というのを引く場合に、別府と西別府を全く別  
のところに出て来るわけですね。だから二重索引に  
してですね、別府はまた別個にやって、西をカッコ  
でくるかしてですね、読みを別に「ニシベップ」  
にするとかしないと、折角作るんですから、そこ  
までしないと。

平田 整理が出来ない?

江之口 はあ、出来ないです。

青柳 分かり書きが必要?

松田 そう思ったのは、上(うえ)です。なんとかに  
上が付いたり、下が付いたり。これは全然出て来な  
いですよ。

江之口 折角作いやったとこいに、けちをつけて  
申しわけないのだけど。

肥後 話は尽きないようですが時間もオーバー  
しましたので。どうも有難うございました。

ヒミ 63.9.4  
ヒミ 互助組合会社

## 第22回地名研究会例会の資料

加治木町

松田誠

### 『神社と地名について』

七〇〇

\* 鷹屋神社外 —— - 1

\* 手貫神社外 —— - 3

\* 諸所氏文書(天喜2年) —— - - 5

\* 地名を冠する神社(郷社) — - - 6

\* その他 の神社(郷社) — - - 7

\* 加治木町の小字をソートする --- 8~19

神社名	住所	祭神	考案	祭日
御社 鷹屋神社 (鷹太明神社)	清田町禁橋口 (往々阿須利尾)	火神不明 又2 ニアリトアル。	※高屋山陵(清田町禁答口) 后神 初西 心永8年 御社	2/1 11 11
18県社 竹田神社	加世田市武田	日新公		
旧県社 竹屋神社 (鷹屋三社太明神)	加世田市官原	(火闘降命) 火酸芥命 彦火出見命 火日命 豊玉姫命	※初火内山田村竹屋御竹屋塙 ニアリシテ官原村へ移ストナ (子孫代代) 11/9	9/9
御社 竹屋神社	川辺町中山田宮前	彦火出見尊 火闘降命 火明神 豊玉姫命 (明治34年移至川辺町 知曉の跡説)	※初火宮三池畔ニ建テラタガ 明治34年中山田小移ル。 ※王子代代(合祀され)	9/9
高屋神社	内三瀬町大字	彦火出見尊 ニニキミコト 吾不食者		9/9
千屋神社(加世田市高尾)1200	M44年10月加世田村内山田字竹屋尾 鎮座八景社 火出見尊神社か 東加世田村(現在の才世町)官原の御社 竹屋神社に合祀され、往々竹屋神社(主祭社)に昇格した。			
神社名	住所	祭神	考案	祭日
伊佐知佐神社	鹿児島市下福元町	・イサナミ・速玉命 ・泉津事解奥命 (正一位伊佐知佐六所權現社)	熊野本宮→伊佐郡蘭毘社 志布志社見附→佐多→谷山 ヒ裏御子3。 ・伊佐智佐神社(延喜式神社) 神替院町蘭宇田いより ※分山郡内に伊佐知佐六所權現社 (建久四年帳) ※佐岐上佐佐神社(加世田市大迫崎)	9月 9日 9月 11/11 9月 11/11 9月 11/11
御社 河上神社	大根占町城元	・神武天皇 ・五瀬命 ・稻飯命 ・三毛人耳命 ・豊玉命 ・大己貴命	※川上にアレタメテ川上太明神 ト并ス(三口88年4月会)	9月 9日
御社: 川上洗井太明神廟	高山町後田	・猪田彦命	※行付郡河上明神(神25年)	9月 9/9
阿字賀神社	官城町佐志字豆漬	・玉依姫 ・品伯和氣命(応神天皇) ・息長足姫命(神功皇后) ・阿字院殿天月照靈大君士 東享2(1685)	※阿字望山、阿字資前山 ・阿字院殿天月照靈大君士 東享2(1685) ※佐間聖者トアリ。(キヤケドン) ※湯田八幡ノ関係アリ	9/9 天正11 再興
日光神社	財部町日光神村 (ニヒモ日光神社11月会)	・伊勢内宮 財部町北俣官原 (ニヒモ日光神社11月会)	・天照大神 ※日奉信仰ヒノ関カツ 2/13 和暦3 和暦3 和暦3	未定
七狩長田貫太明神社	鹿屋市田崎本村	・別雷命 (通称田崎神社)	※狩野神社 (大根占町城元四 田代町蒲 鹿屋市田崎)	未定
・田貫神社(舊院日地理要考)			※狩野三兄弟神社(いの(小野)) タメ3 ※手賀神社(生市田上)	
・將長神社(三口87年会)				
神貫太明神社	鹿屋市新城		※上木大湖神(二木木大湖ト云フ) ※新代寺ノトム(木足久 木足久今上木テアヨト云ム 行脚地 ※神木大湖神ト云フ ※神吉神社(福山町上高隈村) ※手賀神社(生市田上)	9/9 享禄3 行脚地 9/9 享禄3 行脚地

神社名	住所	祭神	考察	祭日
手貫神社 (上三官トニ称ス)	垂柳本城上宮	・仁德天皇 ・応神天皇 ・神功皇后 ・玉依姫	(石清水八幡) 往古、城州八幡社ヲ御清	9/9 永正4年
鶴江岬神社 (神明宮)	鹿児島市坂本町向早地	・伊勢内宮外宮 ・天照大神 ・手力媛命 ・豊受大神 ・萬幡豊秋津姫 ・天津彦火ニニヤノミコト ・天照屋根命 ・太玉命	※本社は江戸芝神明宮トウ ※神明宮(伊集院)を伊勢神社ヒ・う。伊神 天照大神。 ※伊勢神社(神明宮)-志布志町新町 琴神 天照大神。 ※日本の神の大本の神モアリ伊勢の 神モ祭。及神社モ神明神社ヒヨシ。	寛永3月 遷宮 1日国分郷 旭社
止上神社 (止上六所大權院)	(国分市重久)	・彦火火出見尊 ・豊玉姫 ・ニニヤノミコト ・木花咲耶姫 ・葦不合尊 ・玉依姫	※宇佐八幡記宣集(善光4)中。 「奴ヌ良・幸原・神野・志加原・曾於B石城・比焼城 のう。志加原ニ止上への変化ヲ考証シテ」	7/20
太玉神社	輝北町市成	・太玉命	※肝付兼続傳記付竹。 ※國王神社(大市精上大國守) 方福王	9/9 天文23年

神社名	住所	祭神	考察	祭日
大限神社	国分市重久止上社内	火闇降命	※大限ヘ地主神トウ	
橿神社	丰吉町南郷	1サナキ		
現王山神社	川内市城上吉川		※地名「現王」考(63.6.5江之吹生)	享保3年 (1491)
徳光神社	山川町			
久満崎神社	(国分市上1-11)		※文政6年通帳比地名(本日満)	
			(地名研究会報19.20号)	
高祖神社	指宿市西方中川字	高祖元 祭神不明		康正2年 (1456)
夕羅神社	指宿東方田高字	大明神		康正5年 (1460)
興玉神社	指宿市十町興玉	猿田彦命		
風穴神社	指宿市東方			
伊勢神社	高山町野崎字天道	天照大神、月夜見命	※野崎村ハ古キ神社アリ天道山トウ	
早鳳神社	大市本城荒田字早鳳	早鳳神社(川内市新田神社の事也) 板長戸辺尊	太早鳳御社(川内市新田神社の事也) はシナヒヒヒメニタニ?	
宇治瀬神社	鹿嶋市		※神月リのニヒモ宇治瀬ヒシ。	
楠田神社	薄生町北楠田			10/18
赤城神社	入来町著赤木	月読命、稻荷大鹿王	※古代入来院の中央に位置す	
青潮大明神祠	下翁村青潮		※青潮岳ホリ	
			※敷塙大明神祠(長18) 小川氏廟跡トウ	
新田大明神社	垂水市末	海童命(神体石)		
浦田大明神社				
今嶽神社	指宿鹿瀬・吉山門	宣化天皇	※初々川近郡坊津今嶽今嶽アラ 逐化ナタヒメウ説アリ。	
間水神社	指宿市東方木下	奉盡鳴命、柏田姫命	※付近=間歌泉ヶアツ 1丁・間水モコレヨリトウ	
笠祇神社	志布志市笠祇	宇気田知神		



資料館図書立市内へ：川西市立図書館へ

## 神社

## ヨミ

## 住所

## 祭神

## 祭神

松原神社  
松山神社  
御崎神社  
宮坂神社  
安良神社  
良宮神社  
湯尾神社  
吉利神社  
(正一位安良大明神)

マツハラシニシヤ  
マツヤマシニシヤ  
ミサキニシヤ  
ミヤサカシニシヤ  
ヤスラノシニシヤ  
ヤマミヤシニシヤ  
ユオノシニシヤ  
ヨシトシシニシヤ

鹿児島市松原町新橋篠中名  
曾於郡松山村上ノ村  
肝属郡佐多村上之安樂  
揖始郡喜入川村北  
良曾於郡横志村利  
日置伊郡布志村川湯田  
日置伊郡菱刈村吉利

功后童命  
津少御命  
詳姫?  
安良天皇  
天智天皇  
鎌倉五郎景政  
鎌倉五郎景政

応神天皇  
中津少御命  
天照大御神  
持統天皇

資料ハ < 明治神社誌料 > : 川内市立図書館蔵。

63-08-0.

1 頁

## 神社

## ヨミ

## 住所

## 祭神

## 祭神

天御中主神社

アメノミナカヌシシニシヤ

始良郡清水村弟子丸

草命

伊弉諾尊

天御中主神社

アメノミナカヌシノシニシヤ

薩高郡城村堂

主神

伊邪那伎神

饭富神社

イトミシニシヤ

始良郡牧村三山宮

命

鹿葦津姫命

饭富神社

イトミシニシヤ

薩良郡園村上

命

千千姫命

伊勢神社

イクラタマノシニシヤ

始良郡高村表

命

豊受姫神

伊勢神社

イセシニシヤ

薩良郡園村川

命

猿田彦命

稻荷神社

イセシニシヤ

始良郡園村之

命

猿田彦神

稻荷神社

イチノミヤシニシヤ

薩良郡毛村原

命

仲哀天皇

稻荷神社

イナリシニシヤ

始良郡毛村表

命

哀津主神

稻荷神社

イナリシニシヤ

薩良郡毛村原

命

天主神

稻荷神社

オオナムチシニシヤ

始良郡毛村重

命

天兒屋根命

大汝神社

カスカシニシヤ

始良郡毛村中原

命

安徳天皇

春日神社

カスカシニシヤ

始良郡毛村中原

命

伊邪那美神

春日神社

クマノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

事解男命

熊野神社

クマノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

猿田王神

熊野神社

クマノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

仲哀天皇

熊野神社

サタミコノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

天安德天皇

菅原神社

スカワラシニシヤ

始良郡毛村中原

命

伊邪那美神

菅原神社

スカワラシニシヤ

始良郡毛村中原

命

事解男命

住吉神社

スミノエノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

仲哀天皇

諏訪神社

スワシニシヤ

始良郡毛村中原

命

天照大御神

月讀神社

ツキヨミノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

見尊

豐受神社

トヨウケシニシヤ

始良郡毛村中原

命

日出火

玉姬神社

トヨタマヒメシニシヤ

始良郡毛村中原

命

仲立火

媛神社

トヨタマヒメシニシヤ

始良郡毛村中原

命

照天火

日媛神社

トヨヒルメノシニシヤ

始良郡毛村中原

命

日火

幡神社

ハチマンシニシヤ

始良郡毛村中原

命

阪刀

幡神社

ハチマンシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ハチマンシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ハチマンシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ヒエシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ミナミカタシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ミナミカタシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ミナミカタシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

幡神社

ヤサカシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

若宮神社

ワカミヤシニシヤ

始良郡毛村中原

命

坂刀

大字 木田	小字	読み	資料 1	資料 2
西別府	赤岩	あかいわ	○	○
西別府	赤尾	あかお	○	○
木田	赤坂	あかさか	○	○
西別府	亀定	あきじょう?	○	○
西別府	揚膝	あげひざ	○	○
日木山	朝日原	あさひばる	○	シラス
西別府	穴尾	あなお	○	○
西別府	穴ヶ倉	あながくら	○	田
西別府	荒田	あらた	○	○
小山田	荒平	あらひら	○	シラス
西別府	荒平	あらひら	○	シラス
辺川	荒平	あらひら	○	シラス
木田	飯地	いいち	○	○
西別府	飯森	いいもり	○	○
木田	依ヶ倉	いがくら	○	○
日木山	池宇都	いけうと	○	○
西別府	池田	いけだ	○	田
反土	池袋	いけのひら	○	シラス
日木山	池袋	いけぶくろ	○	シラス
西別府	石ヶ迫	いけぶくろ	○	シラス
小山田	石野	いしがさこ	○	○
小山田	石ノ丸	いしの	○	○
西別府	石ノ元	いしのまる	○	○
日木山	石ノ元	いしのもと	○	○
辺川	石ノ元	いしのもと	○	○
木田	石ノ脇	いしのもと	○	○
木田	石原田	いしのはらだ	○	田
小山田	井尻	いじり	○	○
小山田	井尻	いじり	○	○
西別府	板木	いたき	○	○
西別府	板口	いたのくち	○	○
木田	市頭	いちがしら	○	○
辺川	市来田	いちきだ	○	田
日木山	一胡迫	いちごさこ	○	シラス
西別府	飯地坂	いちざか	○	○
辺川	市野	いちの	○	○
西別府	飯ノ迫	いちのざこ	○	シラス
辺川	市野野	いちのの	○	○
木田	一町田	いっちょうでん	田	○
反土	壹丁畠	いっちょうばた	○	○
西別府	井手ヶ尻	いでがしり	○	シラス
西別府	井手ヶ谷	いでがたに	○	○
小山田	井手口	いでぐち	○	○
小山田	井手下	いでしも	○	○
小山田	井手向	いでむこ	○	○
日木山	伊藤ヶ岡	いとうがおか	○	○
木田	稻葉崎	いなばさき	○	○
小山田	猪目	いのめ	○	○
小山田	猪ノ目田	いのめだ	○	田
小山田	猪目原	いのめばる	○	○
小山田	伊部野	いぶの	○	シラス
木田	今市	いまいち	○	○
西別府	今別府	いまべつぶ	○	○

大字	小字	読み	資料1	資料2
西別府	今別府迫	いまべっぷさこ		宇大 田木
反土	今町	いままち		
港町	今町	いままち	シラス	柳原西 田木
西別府	伊良ヶ迫	いらかさこ	シラス	柳原西 田木
辺川	岩坂	いわさか	シラス	柳原西 田木
木田	岩下	いわした	シラス	柳原西 田木
辺川	岩塚	いわつか	シラス	柳原西 田木
西別府	岩穴口	いわなぐち	シラス	柳原西 田木
西別府	岩穴谷	いわなたに	シラス	柳原西 田木
木田	岩原	いわばる	シラス	柳原西 田木
木田	岩原	いわばる	シラス	柳原西 田木
反土	岩元	いわもと	シラス	柳原西 田木
辺川	岩元	いわもと	シラス	柳原西 田木
木田	岩屋寺	いわやじ	シラス	柳原西 田木
西別府	上岳	うえたけ	シラス	柳原西 田木
小山田	上ノ原	うえのはら	シラス	柳原西 田木
木田	上ノ丸	うえのまる	シラス	柳原西 田木
小山田	上村	うえむら	シラス	柳原西 田木
西別府	宇河内	うかわうち	シラス	柳原西 田木
西別府	牛牧	うしまき	シラス	柳原西 田木
西別府	後原	うしろざこ	シラス	柳原西 田木
西別府	後迫	うしろざこ	シラス	柳原西 田木
日本山	後迫	うしろざこ	シラス	柳原西 田木
辺川	後牟田	うしろむた	田	柳原西 田木
西別府	薄ヶ迫	うすがさこ	シラス	柳原西 田木
西別府	ウソノ木	うそのき	シラス	柳原西 田木
西別府	内子	うちこ	シラス	柳原西 田木
木田	内祝儀	うちしゅうぎ	シラス	柳原西 田木
辺川	内城	うちしろ	シラス	柳原西 田木
小山田	内無	うちなし	シラス	柳原西 田木
西別府	内ノ丸	うちのまる	シラス	柳原西 田木
日本山	内畠	うちはた	田	柳原西 田木
反土	内原田	うちらだ	シラス	柳原西 田木
木田	内古川	うちふるかわ	シラス	柳原西 田木
西別府	宇都	うと	シラス	柳原西 田木
日本山	宇都	うと	シラス	柳原西 田木
西別府	宇都山	うとやま	シラス	柳原西 田木
西別府	梅ヶ谷	うめがたに	シラス	柳原西 田木
辺川	上床	うわとこ	シラス	柳原西 田木
木田	江口	えぐち	シラス	柳原西 田木
木田	江湖	えご	シラス	柳原西 田木
本町	江湖	えご	シラス	柳原西 田木
木田	大川添	おおかわぞえ	シラス	柳原西 田木
木田	大坂元	おおさかもと	シラス	柳原西 田木
小山田	大迫	おおさこ	シラス	柳原西 田木
西別府	大迫	おおさこ	シラス	柳原西 田木
辺川	大蘭	おおぞん	シラス	柳原西 田木
木田	大谷	おおたに	シラス	柳原西 田木
小山田	大谷	おおたに	シラス	柳原西 田木
辺川	大手口	おおてぐち	シラス	柳原西 田木
反土	大戸	おおと	シラス	柳原西 田木
西別府	大平	おおひら	シラス	柳原西 田木
西別府	大丸	おおまる	シラス	柳原西 田木
西別府	岡	おか	シラス	柳原西 田木
辺川	小倉	おぐら	シラス	柳原西 田木

大字	小字	読み	資料1	資料2
坂屋町	於里	おさと	シラス	柳原西 田木
西別府	榜木原	おてきはら	シラス	柳原西 田木
小山田	踊	おどり	シラス	柳原西 田木
西別府	小野	おの	シラス	柳原西 田木
西別府	表迫	おもてざこ	シラス	柳原西 田木
西別府	ヲロノ元	おろのもと	シラス	柳原西 田木
小山田	柿ヶ迫	かきがさこ	シラス	柳原西 田木
木田	柿木田	かききた	シラス	柳原西 田木
西別府	火口田	かこうでん	シラス	柳原西 田木
木田	加敷場	かしきば	シラス	柳原西 田木
西別府	鍛治屋ヶ迫	かじやがさこ	シラス	柳原西 田木
木田	鍛治屋田	かじやでん	シラス	柳原西 田木
辺川	門田	かどた	シラス	柳原西 田木
西別府	要川	かなめがわ	シラス	柳原西 田木
小山田	上赤谷	かみあかんたい	シラス	柳原西 田木
小山田	上市来原	かみいちきばる	シラス	柳原西 田木
辺川	上後牟田	かみうしろむた	田	柳原西 田木
木田	上尾立	かみおたて	シラス	柳原西 田木
小山田	上学力	かみがくりき	シラス	柳原西 田木
西別府	上窪山	かみくぼやま	シラス	柳原西 田木
小山田	上新聞	かみしんかい	シラス	柳原西 田木
西別府	上菅草	かみすがくさ	シラス	柳原西 田木
木田	上水流	かみする	シラス	柳原西 田木
辺川	上瀬味	かみせみ	シラス	柳原西 田木
小山田	神園	かみぞん	シラス	柳原西 田木
辺川	上高峰	かみたかとうげ	田	柳原西 田木
小山田	上寺田	かみてらだ	シラス	柳原西 田木
小山田	上中原	かみなかはら	田	柳原西 田木
辺川	上なら田	かみならた	田	柳原西 田木
小山田	上野中	かみのなか	田	柳原西 田木
港町	上浜	かみはま	田	柳原西 田木
反土	上古川	かみふるかわ	田	柳原西 田木
小山田	上見帰	かみみかえり	田	柳原西 田木
西別府	神山	かみやま	田	柳原西 田木
辺川	上吉栗	かみよしくり	シラス	柳原西 田木
反土	上吉原	かみよしばる	田	柳原西 田木
辺川	蒲生堀町	かもうほりまち	田	柳原西 田木
本町	蒲生田	かもだ	田	柳原西 田木
西別府	狩川	かりかわ	田	柳原西 田木
小山田	狩俣	かりまた	田	柳原西 田木
日木山	河内ノ上	かわうちのうえ	田	柳原西 田木
西別府	鞍ヶ尾	かわがお	田	柳原西 田木
木田	川添	かわぞえ	田	柳原西 田木
西別府	川床	かわとこ	田	柳原西 田木
反土	川原	かわはら	田	柳原西 田木
木田	川原田	かわはらた	田	柳原西 田木
辺川	川原田	かわはらだ	田	柳原西 田木
日木山	川畑	かわばた	田	柳原西 田木
西別府	観音宇都	かんのんうと	田	柳原西 田木
木田	観音ケ迫	かんのんがさこ	田	柳原西 田木
小山田	上別府川	かんピュガワ	田	柳原西 田木
日木山	黄牟田	きいむた	田	柳原西 田木
日木山	北平	きたひら	田	柳原西 田木
西別府	狐原	きつねばる	田	柳原西 田木
木田	九反畑	きゅうたんばた	田	柳原西 田木
日木山	京ノ峰	きょうのみね	田	柳原西 田木

大字	小字	読み
西別府	金王地	きんおうち
西別府	久木丸	くきまる
木田	草水	くさみす
西別府	草山	くさやま
木田	串木	くしなか
西別府	楠ノ木	くすのき
辺川	楠木畑	くすのきばた
木田	楠丸	くすまる
日木山	下り	くだり
小山田	下り野	くだりの
西別府	下り野	くだりの
西別府	口ノ尾	くちのお
反土	口ノ町	くちのまち
小山田	クノ石	くのいし
小山田	久保田	くぼた
小山田	久保野	くぼの
西別府	熊ヶ迫田	くまさこ
木田	供養塚	くまのた
辺川	鞍掛	くようづか
小山田	倉山	くらかけ
西別府	操穴	くらやま
木田	栗脇	くりあな
辺川	黒川	くりわき
反土	黒木山	くろかわ
日木山	黒川	くろがわ
西別府	黒葛	くろきやま
西別府	毛上	くろつづらざこ
辺川	源五郎	くわがまる
小山田	荒神免	けあげ
西別府	河内山	けんごろう
西別府	蠟小鳥	こうじんめん
木田	小坂元	こううちやま
西別府	小陣	こううり
西別府	小園	こがらす
小山田	小西	こさかちと
西別府	小西場	こぞの
西別府	木場	ここにし
辺川	木場	こば
辺川	木場田	こばだ
西別府	木場	こもむたり
小山田	小山尻	こやまじり
木田	後反田	ごあん
西別府	五反田	ごたんだ
小山田	五本松	ごほんまつ
木田	坂上	さかのうえ
西別府	坂上	さかのうえ
小山田	坂ノ上	さかのうえ
木田	坂ノ下	さかのした
西別府	坂ノ下	さかもと
日木山	坂元	さかもと
辺川	坂元	さかもと
小山田	坂元	さかもと
日木山	坂元	さかもと
辺川	坂内	さかもとうち

資料1	資料2
読み	字
さこた	木田
ささはら	迫田
さるくい	小山田
さんしょううだに	猿喰
さんしょうはた	西別府
さんたいじ	三升谷
さんにつか	三升畠
しおいがわ	小山田
しおきやま	日本山
しもあかんたい	三代寺
しもいちきばる	小山田
しもがくりき	西別府
しもさけ	三ノ塚
しもしんかい	日本山
しもすぐさ	小山田
しもする	西別府
しもだ	下赤谷
しもつきでん	下市来原
しもなかはら	下学力
しものなか	下提
しもはま	下新開
しもはら	下菅草
しもはら	木田
しもだ	下水流
しもつきでん	下田
しもなかはら	霜月田
しものなか	下中原
しもはま	下野中
しもはら	下浜
しもふるかわ	下原
しもみかえり	下古川
しもみやた	下見帰
しもみやた	下宮田
しもやま	下宮田
しもよしばる	下山
しらびわ	下吉原
しゃかだ	下別府川
しゃくしの	積迦田
しらいし	杓子野
しらさか	白石
しろきだ	白坂
しろきやま	白木田
しろしんでん	白木山
しろやま	白新田
しんかい	城山
しんかい	新開
しんかい	新開
しんかい	新開
しんがたけ	新開
しんでん	新ケ岳
しんまち	新田
しんみち	新町
しんみち	新道
しんみち	新道
じしゅうでん	時宗田
じしゅうでん	時宗田
じょうがひら	城ヶ平
じょうとぐち	城戸口
じんがひら	陣ヶ平
すがた	菅田
すがむた	菅牟田
すさき	須崎
すすはら	薄原

大字	小字	読み
木田	迫田	さこた
小山田	笹原	ささはら
木田	猿喰	さるくい
西別府	三升谷	さんしょううだに
小山田	三升畠	さんしょうはた
日本山	三代寺	さんたいじ
小山田	三ノ塚	さんにつか
西別府	汐井川	しおいがわ
日本山	塩木山	しおきやま
小山田	下赤谷	しもあかんたい
小山田	下市来原	しもいちきばる
小山田	下学力	しもがくりき
西別府	下提	しもさけ
小山田	下新開	しもしんかい
木田	下菅草	しもすぐさ
小山田	下水流	しもする
木田	下田	しもだ
木田	霜月田	しもつきでん
小山田	下中原	しもなかはら
小山田	下野中	しものなか
港町	下浜	しもはま
西別府	下原	しもはら
反土	下古川	しもふるかわ
小山田	下見帰	しもみかえり
小山田	下宮田	しもみやた
西別府	下宮田	しもみやた
反土	下山	しもやま
木田	下吉原	しもよしばる
辺川	下別府川	しらびわ
西別府	積迦田	しゃかだ
西別府	杓子野	しゃくしの
西別府	白石	しらいし
西別府	白坂	しらさか
西別府	白木田	しろきだ
西別府	白木山	しろきやま
西別府	白新田	しろしんでん
小山田	城山	しろやま
西別府	新開	しんかい
西別府	新ケ岳	しんがたけ
西別府	新田	しんでん
西別府	新町	しんまち
西別府	新道	しんみち
西別府	新道	しんみち
西別府	新道	しんみち
西別府	新ケ岳	じしゅうでん
西別府	新田	じしゅうでん
西別府	新町	じょうがひら
西別府	新道	じょうとぐち
西別府	新道	じんがひら
木田	時宗田	すがた
木田	時宗田	すがむた
木田	城ヶ平	すさき
木田	城戸口	すすはら
木田	陣ヶ平	すすはら
木田	菅田	すすはら
木田	菅牟田	すすはら
木田	須崎	すすはら

大字	小字	読み	資料1	資料2
木田	鈴玉	すずたま	ラス	木田
西別府	須田ヶ峯	すたかみね	ラス	木田山
西別府	須ノ元	すのもと	ラス	西別府
西別府	炭床	すみとこ	ラス	西別府
反土	諏訪牟田	すわむた	田	小山田
日本山	瀬シ狩	せしかり	ラス	西別府
小山田	瀬戸口	せとくち	ラス	木田
木田	瀬戸口	せとぐち	ラス	小山田
反土	瀬戸口	せとぐち	ラス	小山田
西別府	瀬戸口	せとぐち	ラス	小山田
西別府	瀬戸口	せとぐち	ラス	辺川
辺川	瀬戸ノ上	せとのうえ	ラス	日本山
反土	瀬味	ぜみ	ラス	鶴原
反土	惣門	そうもん	ラス	寺後
小山田	早田尻	そたじい	田	辺川
辺川	外宮田	そとみやた	ラス	寺田
木田	外弥ろく	そとみろく	ラス	朝日町
日本山	園田	そのだ	田	西別府
西別府	高倉	たかくら	ラス	反土
木田	高倉山	たかくらやま	ラス	出井
小山田	高崎	たかさき	ラス	辺川
西別府	高付	たかつき	ラス	西別府
小山田	高峰	たかとうげ	ラス	小山田
西別府	岳	たけ	ラス	西別府
反土	竹下	たけした	ラス	西別府
日本山	竹下	たけした	ラス	西別府
小山田	竹島	たけしま	ラス	西別府
小山田	竹原	たけはら	ラス	西別府
小山田	竹脇	たけわき	ラス	西別府
日本山	橋迫	たちはなざこ	ラス	西別府
日本山	竜口	たっくつ	ラス	西別府
小山田	立石	たていし	ラス	西別府
反土	タテ原	たてはら	ラス	西別府
西別府	建馬場	たてばば	ラス	西別府
日本山	立平	たてひら	ラス	西別府
小山田	立堀	たてぼり	ラス	西別府
反土	立山	たてやま	ラス	西別府
反土	田中	たなか	ラス	西別府
西別府	棚目	たなめ	ラス	西別府
木田	谷ノ口	たにのくち	ラス	木田
日本山	谷ノ口	たにのくち	ラス	木田
小山田	狸ヶ平	たぬきがひら	ラス	木田
小山田	田ノ上	たのうえ	ラス	木田
西別府	玉巣野	たますの	ラス	木田
仮屋町	垂ノ口	たれのくち	ラス	木田
木田	反土川添	たんどかわぞえ	ラス	木田
辺川	大王	だいおう	ラス	木田
小山田	大丸	だいまる	ラス	木田
木田	大明神原	だいみょうじんがはら	ラス	木田
辺川	段	だん	ラス	木田
西別府	段開	だんかい	ラス	木田
辺川	段下	だんのした	ラス	木田
日本山	力石	ちからいし	ラス	木田
小山田	地久里原	ちくりばる	ラス	木田

大字	小字	読み	資料1	資料2
木田	千シャノ木	ちしゃのき	ラス	辛中
日本山	茶園ヶ追	ぢゃえんかさこ	ラス	田中
西別府	鎮ノ下	ちんのした	ラス	山中
西別府	土橋	つちはし	ラス	山中
小山田	提	つつみ	ラス	山中
西別府	鼓ヶ迫	つつみがさこ	ラス	山中
木田	津トリ	つとり	ラス	乳水
小山田	釣掛	つりかけ	ラス	見水
小山田	釣掛	つりかけ	ラス	谷見
小山田	水流田	つるた	ラス	田
辺川	鶴原	つるばる	ラス	見ケ尾
日本山	寺後	つるみがお	ラス	田
木田	寺田	てらご	ラス	田
辺川	寺田	てらた	ラス	田
反土	寺ノ上	てらのうえ	ラス	天神
朝日町	天神	てんじん	ラス	出井
西別府	出井	でい	ラス	出ノ上
反土	出口	でぐち	ラス	峰岡
辺川	出ノ上	でのうえ	ラス	峰ノ下
西別府	峰岡	とうげおか	ラス	藤四郎木場
西別府	峰ノ下	とうげのした	ラス	西別府
小山田	藤四郎木場	とうしろうこば	ラス	西別府
西別府	藤次郎迫	とうじろうさこ	ラス	頭無
西別府	頭無	とうなし	ラス	西別府
辺川	頭成	とうなり	ラス	西別府
小山田	東木	とうのき	ラス	西別府
小山田	東木	とうのき	ラス	西別府
西別府	遠瀬	とおせ	ラス	通山
日本山	通山	とおりやま	ラス	鳥取
西別府	鳥取	とっとり	ラス	木
小山田	轟木	とどろき	ラス	鳥越
木田	轟木	とりごえ	ラス	鳥屋ヶ尾
日本山	轟木	とりやがお	ラス	堂後
西別府	轟木	どうこ	ラス	道下
西別府	轟木	どうした	ラス	堂田
西別府	轟木	どうだ	ラス	堂地
西別府	轟木	どうのうえ	ラス	堂ノ上
西別府	轟木	どうのした	ラス	堂ノ下
西別府	轟木	どうのまえ	ラス	堂ノ前
西別府	轟木	どうふう	ラス	道風
木田	轟木	なかお	ラス	中尾立
木田	轟木	なかかわはら	ラス	中尾入
木田	轟木	なかしおいり	ラス	中須
木田	轟木	なかす	ラス	中須
木田	轟木	なかす	ラス	中須
木田	轟木	なかた	ラス	中野
木田	轟木	なかだ	ラス	中野
木田	轟木	なかの	ラス	中浜
木田	轟木	なかはま	ラス	中原
木田	轟木	なかはら	ラス	中原

大字	小字	読み	資料1	資料2	等小
小山田	中原	なかはら	シラス	シラス	田木
反土	中古川	なかふるかわ			山木日
西別府	中道	なかみち			山木日
西別府	中山	なかやま			田山
辺川	中山	なかやま			田山
西別府	永尾	ながお			田山
西別府	長崎	ながさき			田山
小山田	永迫	ながさこ	シラス	シラス	田山
日木山	長迫	ながさこ	シラス	シラス	田山
西別府	長谷	ながたに	シラス	シラス	田山
西別府	永原田	ながはいだ	田	田	田山
小山田	永山	ながやま			田山
小山田	流松	ながれまつ			田山
小山田	梨子木田	なしきだ	田	田	田山
小山田	夏木	なつき			田山
西別府	七迫	ななさこ	シラス	シラス	田山
木田	七反田	ななたんだ	田	田	田山
西別府	七曲	ななまがり			田山
小山田	鍋	なべ			田山
西別府	鍋	なべ			田山
西別府	鍋	なべ			田山
日木山	名部	なべがさこ	シラス	シラス	田山
西別府	鍋ヶ迫	なべた	田	田	田山
小山田	鍋田	なべのうえ			田山
西別府	鍋ノ上	なべわたり			田山
西別府	鍋渡	なめり			田山
西別府	滑り	なら田	田	田	田山
木田	奈良脇	ならた			田山
日木山	二月田	ならわき			田山
木田	西尾立	にかつでん	田	田	田山
西別府	西河内	にしおたて			田山
西別府	西迫	にしかわうち	シラス	シラス	田山
日木山	西迫	にしさこ			田山
木田	西汐入	にしおいり	シラス	シラス	田山
諏訪町	西中道	にしなかみち	シラス	シラス	田山
木田	西ノ原	にしのはら	シラス	シラス	田山
木田	西ノ原	にしのはる	シラス	シラス	田山
西別府	西ノ平	にしのひら	シラス	シラス	田山
西別府	西日雇木場	にしひおこば			田山
港町	西町	にしまち			田山
木田	西三本松	にしゅんぼンマツ			田山
西別府	仁田ヶ尾	にたがお	シラス	シラス	田山
小山田	似タケ迫	にたけざこ	シラス	シラス	田山
西別府	二度内	にどうち			田山
西別府	盗人ヶ迫	ぬすとがさこ	シラス	シラス	田山
木田	猫岳	ねこだけ			田山
小山田	野迫	のざこ	シラス	シラス	田山
西別府	野中	のなか			田山
日木山	野中	のなか			田山
小山田	野老迫	のろざこ	シラス	シラス	田山
小山田	袴田	はかまだ	田	田	田山
反土	萩原馬場	はぎわらばば			田山
反土	萩原屋敷	はぎわらやしき			田山
反土	橋口	はしごち			田山

大字	小字	読み	資料1	資料2	等小
反土	はせ木	はせき	シラス	シラス	山木
小山田	鉢ヶ窪	はちがくぼ			山木
木田	八幡領	はちまんりょう	田	田	山木
反土	八幡領	はちまんりょう	田	田	山木
木田	花立	はったんだ			山木
反土	羽木場	はなたて			山木
木田	浜村	はねこば			山木
本町	端山	はまむら			山木
小山田	小山田	はやま	田	田	山木
辺川	原田	はらだ	田	田	山木
小山田	原ノ丸	はらのまる			山木
木田	原ノ門	はらのもん			山木
小山田	春田	はるた	田	田	山木
西別府	東川内	ひがしかわうち			山木
小山田	東木場	ひがしこば			山木
日木山	東迫	ひがしざこ			山木
反土	東塩入	ひがしおいり			山木
諏訪町	東諏訪	ひがしすわ			山木
木田	東中道	ひがしなかみち			山木
西別府	東日雇木場	ひがしひおこば			山木
西別府	東平	ひがしひら	シラス	シラス	山木
小山田	東紫原	ひがしむらさき			山木
木田	東三本松	ひがしゅんぼンマツ			山木
西別府	引割尾	ひきわりお			山木
日木山	千迫	ひさこ	シラス	シラス	山木
小山田	聖ヶ宇都	ひじりがうと			山木
西別府	干地ヶ原	ひちがはら			山木
西別府	次米田	ひとつでん	田	田	山木
木田	樋ノ口	ひのくち			山木
小山田	樋ノ口	ひのくち			山木
辺川	樋ノ口	ひのくち			山木
木田	木田	ひのさこ			山木
西別府	平尾	ひらお			山木
西別府	平木	ひらき			山木
木田	平城	ひらじょう			山木
木田	平田	ひらた	田	田	山木
小山田	平田	ひらた	田	田	山木
小山田	平田	ひらた	田	田	山木
西別府	平谷	ひらたに			山木
西別府	飛渡	ひわたし			山木
朝日町	毘沙門	ひしゃもん			山木
日木山	福ヶ迫	ふくがさこ			山木
小山田	藤ヶ尾	ふじがお			山木
西別府	藤川	ふじがわ			山木
木田	藤竹	ふじたけ			山木
小山田	藤野	ふじの			山木
小山田	藤野山添	ふじのやまぞえ			山木
日木山	二瀬戸	ふたせど			山木
反土	札立	ふだたて			山木
西別府	福ヶ迫	ふっがさこ			山木
木田	船石	ふないし			山木
西別府	船ヶ迫	ふながさこ			山木
木田	船木	ふなき			山木
木田	古川	ふるかわ			山木

大字	小字	資料1	読み	資料2	小字
辺川	古滝		ふるたき		木せが 木せが
小山田	古屋敷		ふるやしき		田山小 田山小
西別府	古屋敷		ふるやしき		土河八 土河八
辺川	古屋敷		ふるやしき		田水河 田水河
西別府	風呂ヶ宇都		ふろがうと	シラス	立井八 立井八
西別府	仏供田	田	ぶつきょうでん		田馬場 田馬場
日本山	別府ノ上		べっぷのうえ		田木馬 田木馬
木田	奉社田		ほうしゃでん	田	田木本 田木本
辺川	外園		ほかぞの		山野 山野
西別府	外村		ほかむら		田原 田原
辺川	保木ノ下		ほきのした	シラス	大入原 大入原
小山田	ホキ原		ほきはら	シラス	門入原 門入原
西別府	ホキ山		ほきやま	シラス	田寺 田寺
木田	星原		ほしはら	シラス	田寺 田寺
小山田	仮石		ほとけいし		田寺 田寺
木田	堀田	田	ほりた		内川東 内川東
小山田	木道ヶ原		ほんどうがはい	シラス	社木東 社木東
反土	木丸		ほんまる	シラス	人出東 人出東
西別府	前迫		まえざこ	シラス	社西 社西
西別府	前迫上		まえざこかみ	シラス	中東 中東
小山田	前田		まえだ	シラス	木原日 木原日
小山田	前田		まえだ	シラス	柳原西 柳原西
小山田	前田		まえだ	シラス	柳原西 柳原西
西別府	前田		まえだ	シラス	柳原西 柳原西
日本山	前畠		まえはた	シラス	柳原西 柳原西
西別府	前原		まえはら	シラス	柳原西 柳原西
西別府	前原百畠町		まえはら	シラス	柳原西 柳原西
日本山	前原		まえはら	シラス	柳原西 柳原西
木田	前平		まえひら	シラス	柳原西 柳原西
西別府	前平		まえひら	シラス	柳原西 柳原西
西別府	前牟田	田	まえむた		柳原西 柳原西
西別府	牧内		まきうち	シラス	柳原西 柳原西
辺川	牧内谷		まきうちだに	シラス	柳原西 柳原西
小山田	牧口		まきぐち		柳原西 柳原西
反土	松尾		まつお		柳原西 柳原西
小山田	松尾坂		まつおさか		柳原西 柳原西
西別府	松ヶ迫		まつがさこ		柳原西 柳原西
西別府	松木田		まつきだ	シラス	柳原西 柳原西
辺川	松木田		まつきだ	シラス	柳原西 柳原西
西別府	松原		まつばら	シラス	柳原西 柳原西
木田	松原添		まつばらぞえ	シラス	柳原西 柳原西
日本山	真虫迫		まむしがさこ	シラス	柳原西 柳原西
西別府	丸岡		まるおか	シラス	柳原西 柳原西
小山田	丸ノ内		まるのうち	シラス	柳原西 柳原西
日本山	見帰		みかえり		柳原西 柳原西
小山田	水ノ手		みずのて		柳原西 柳原西
辺川	店打		みせうち		柳原西 柳原西
小山田	溝口		みぞくち		柳原西 柳原西
西別府	美津ヶ迫		みつがさこ	シラス	柳原西 柳原西
西別府	南		みなみ	シラス	柳原西 柳原西
錦江町	南塩入		みなみしおいり		柳原西 柳原西
西別府	蓑ヶ迫		みのがさこ	シラス	柳原西 柳原西
辺川	蓑ヶ瀬戸		みのがせと	シラス	柳原西 柳原西
西別府	蓑ノ口		みののくち		柳原西 柳原西
西別府	耳取		みみとり		柳原西 柳原西
辺川	宮ヶ尾		みやがお		柳原西 柳原西

大字	小字	資料1	読み	資料2
西別府	宮ヶ迫		みやがさこ	田
木田	宮田		みやた	田
小山田	宮田		みやた	田
小山田	宮田		みやた	田
小山田	宮田		みやた	田
西別府	宮田		みやた	田
辺川	宮田		みやた	田
小山田	宮田平		みやたひら	シラス
辺川	宮ノ脇		みやのわき	シラス
西別府	妙見水流		みようけんする	シラス
木田	弥ろく		みろく	シラス
西別府	向平		むかいひら	シラス
小山田	向江		むかえ	シラス
西別府	向江		むかえ	シラス
日本山	向江城		むかえじょう	シラス
反土	向江原		むかえばかり	シラス
日本山	向江町		むかえまち	シラス
錦江町	空ノ瀬		むくのせ	シラス
西別府	椋実山		むくみやま	シラス
西別府	牟田平		むたひら	シラス
木田	牟礼前		むれまえ	シラス
西別府	餅ケ倉		もちがくら	シラス
小山田	本仮屋		ちとかりや	シラス
小山田	桃木迫		ちもきざこ	シラス
小山田	桃木原		ちもきばる	シラス
西別府	屋形ヶ迫		やかたがさこ	シラス
小山田	焼蒔		やきまさ	シラス
日本山	矢倉石		やぐらいし	シラス
西別府	屋瀬		やせ	シラス
小山田	屋所		やどころ	シラス
西別府	柳ヶ迫		やなぎがさこ	シラス
西別府	柳迫		やなぎさこ	シラス
反土	柳田		やなぎた	シラス
西別府	柳田		やなぎた	シラス
小山田	柳田		やなぎた	シラス
西別府	柳田		やのうえ	シラス
木田	屋ノ上		やはす	シラス
小山田	矢筈		やまがはら	シラス
西別府	山ヶ原		やまがみ	シラス
西別府	山神		やまぐち	シラス
小山田	山口		やました	シラス
日本山	山下		やました	シラス
辺川	山鍋		やまなべ	シラス
西別府	山根		やまね	シラス
西別府	山ノ口		やまのくち	シラス
西別府	山ノ口		やまのくち	シラス
木田	山守		やまもり	シラス
西別府	山伏塚		やんぶしづか	シラス
日本山	遊田		ゆうでん	田
木田	弓削		ゆげ	シラス
西別府	湯ノ谷		ゆのたに	シラス
日本山	湯ノ谷		ゆのたに	シラス
木田	汰木		ゆるき	シラス
西別府	卯木堂		ゆるきどう	シラス
木田	ヨケ下		よけした	シラス

		読み	資料 1	資料 2
大字 日本山	小字 横尾	よこお		
反土 辺川	横手 吉栗	よこて よしくり		
反土 木田	吉原牟田	よしばるむた	田	田
反土 辺川	四反田	よんたんだ		
日木山 西別府	四ノ坪	よんのつぼ		
日木山 西別府	陸道	りくどう		
辺川	立夏	りっか		
日木山 西別府	老ヶ迫	ろうがさこ	田	シラス
日木山 西別府	六反田	ろくたんだ	田	シラス
辺川	六反田	ろくたんだ	田	シラス
日木山 西別府	論ヶ迫	ろんがさこ		
日木山 西別府	論ノ石	ろんのいし		
若竹迫	わかたけざこ			
脇 脇田	わき			
脇 脇田	わたき			
小山田 小山田	渡り	わたり		

「不図の発言」訂正

		誤	正
9ページ 右欄	上から 19行	メルキが岳	ムツガ岳
" "	20行	龍割山	龍在山
10ページ 右	下から 7行	舟瀬虎	船瀬氏
11ページ 左	上から 13行	赤木だとは思わない	赤木だと思ふ

以上 お知らせします。(あ、もうひとつありました)

9ページ 右 下から 2行 「こは立夏のアラヒモ田」 全部削除のこと。  
人麻呂の歌

足引の山河の源頭の鳴き声べに 3月が嶽に雲立ちわたる  
3月が嶽は今、巻向山(マタケ山)と呼んでいます。  
—敢傍山—三輪山—巻向山—一直線上にあります。  
敢傍山より見て 夏至の太陽は巻向山頂上より出ます。

(先便の続) 地名研究会報第22号の正誤

9ページ 右欄 上から 18行 巷縫山 —— 巷向山(正)

9ページ 右 下から 1行 白羽宮神社 —— 白羽火雷神社(正)

10ページ 右 上から 16行 入来の極樂師 —— 入来の八重山(正)  
ハエヤマ

# 地名研究会報

第23号

平成元年3月5日

鹿児島地名研究会

## I. 第23回例会

昭和63年11月23日

「郡山町巡見：郡山政雄氏の案内」

(参加者) 大田照夫・霧島一浩・郡山政雄・中村明蔵・西園一俊・浜崎盛雄・肥後芳尚・平田信芳  
船追孝二・本田碩孝・松田 誠・松浪由安(計12名)

11月23日10時 畿合(つもりあい)公民館に集合、下記の箇所を巡見

## II. 訪れた場所

### 柴立(しばたて)

郡山 ここは蒲生との境界になるところです。旅の安全を祈るために、ここで柴を立てたんじゃなかろうかということで「柴立」と理解しているんですが、そんなことでいいもんでしょうか。

平田 柴を立ててお祭りをした所でしょうね。

郡山 もう少し向こうに行くと「ラク」という所があります。もう楽になったどねえという所。もっと下に行けば面抜(めんぬき)。面を取った所じゃなかろうかと、下ん衆(したんし)・蒲生ん衆は言うんですけども。

浜崎 柴立と花立は関係がありますか?

平田 あると思いますよ、地域によっては。

浜崎 所によって、花と云ったり、柴と云ったりするようですが。

平田 あれは誰だったかな、江平先生がずっと前、柴立と狩集という話をされたんですよ。花立・柴立は地名研究会で論議をしたことがあります。

郡山 向うの方に松尾城跡という所があり、そこに上花立(うえはなたて)という地名がある。一般の人々が城に入ることが出来ずに、そこで殺されてしまった。そんなことで花を立ててあげたのではというわけですけれども。

平田 まぁ、狩とか旅とかに関係があるのでしょ

うね。「柴立」という地名は。

大田 「立」と「引」はどうなんですか。

平田 同じでしょう。

大田 やっぱり、意味は同じですか。

浜崎 柴神(しばかみ)はどうですか。頴娃町には柴神というのも御領町にあるんです。

平田 同じでしょうね。

浜崎 柴の神様。

平田 彼らは何処に行ったのかなあ。順番が判っているから、尋ねて来るだろうな。日の丸というのは何処ですか。

郡山 日の丸は今度降りますから。そこに行ったら、車を停めます。停めた向うが風呂ノ神(ふろのかみ)という所です。

平田 ははあ。

### ナメリ

郡山 その下が「ナメリ」です。「ナメリ」というのは-----

浜崎 川の縁ですか。

郡山 いや、田んぼなどがあります。するする滑った、ナメったと云いますけど。ナメったから、ナメリだと。そんなもんですか。

平田 でしょうね。

大田 ナメリは、片仮名? 風呂ノ神?

郡山 「ナメリ」と書いてある。

大田 郡山あたりは片仮名の地名が少ないようですが、鶴田町あたりは片仮名の地名がよく出て来るのですが。

平田 それは関係ないでしょう。役場で、勝手に「ナメリ」と書いたわけですから。漢字を知っちゃいやっ所は、漢字を書いただけですから。

大田 やっぱり、字を知らなかった人が書いたかも知れませんね。

浜崎 明治24年頃、役場が出来た時、届け出たのが、今もずっと続いている――――

#### 再び柴立

本田 柴立までは遠いのですか。

郡山 柴立部落はすぐそこです。何軒ですかね。ほんの五~六軒。

平田 今でも柴を立てやっとですか。そんなことはしやらんどですか。

郡山 いや、ただ名前だけ。

平田 ただ名前だけ。

肥後 蒲生へ越す旧道は、これですか？

郡山 そうですが。

肥後 昔から？

郡山 ここから2kmぐらい行けば蒲生です。

平田 峠で柴を立てたわけですね。

郡山 そうです。

本田 なるほど。

郡山 郡山の場合、柴立は、神様があるのが一つと、道路の分れ道にあるのと、頂上のこれと、まあ三種類を云うわけですが。

浜崎 地図の上では、今どこに居るわけですか。

郡山 この道路の一番上方にいるわけです。蒲生との境ですけど。この辺です。

浜崎 ああ、ここに。

平田 じゃー、移動しましょうか、次に。

郡山 「風呂の神」はどうしますか？

平田 降りましょう。

#### 風呂（ふろ）

浜崎 五右衛門風呂に入ったような感じがする。

ハハハハ――――。

平田 そんな所ですか、「風呂」というのは。

郡山 「神」というのが付いている。

平田 「神」というのは付け足しでしょうから、「風呂」が一体何者かが問題なんですがね。

浜崎 「神」は上・下の「上」かも知れませんね

郡山 ははあ、ここのおばさんが、だいぶ前に、神様がどっかおって、そいが風呂に入いやったで、「風呂ん神」と云うと。

平田 風呂に入いやった？

本田 近くに須田木ですか、須田木のそばに宮田とか宮内とかがあるみたいですね。

郡山 下の方にですか。

本田 宮田ですか。

郡山 それは花尾神社に関係があります。向うの高い山を權現山と云います。

本田 三反ヶ丸というのですか。ここは長畑（ながばた）？

郡山 長畑（ながはた）

平田 風呂みたいな感じがすっかなあ。そう、見える？

大田 郡山は地名から見ると、郡役所があったと見ていいんですか。

平田 何かの役所でしょうね、郡か郷か。

大田 川内はそんな所じゃないですか。

平田 郡だけじゃなくて、郷の役所もありますからね。

松田 深いなあ。

肥後 五右衛門風呂の底が見えますか。

平田 風呂のように、ぐーっと深い。崩れたような所ですね。風呂のような感じの所ですね。

肥後 出口がこう迫って、ここが出口。

平田 風呂桶みたいな地形だなあ。五右衛門風呂みたいな感じだよ。

浜崎 五右衛門風呂のような所ですな。全く、この辺は。

平田 ここで仕事をすれば暑かったろう。

浜崎 風呂に入ったごと、あったんでしょうよ。風呂の上とか下とかの区別があったのでしょうか。

郡山 小字を見れば、岩風呂とか岩穴というが多いですね。

浜崎 シラス地帯だから、地形的にこのような所が、いくらでも出て来ると思うんですがね。

松田 岩風呂とは結び付かないんですか。

肥後 岩風呂があれば、そういう場所がありそうなもんですが、あの、いわゆる岩風呂。その痕跡がないとすれば、地形でしょうね。

平田 風呂のような感じだと云うて、付けたんでしょう。

浜崎 地形名じゃろう。

肥後 岩風呂があれば、そういう跡がありそうなもんんですけど、岩場はないようだ。そういう場所があれば、地元の人もちゃんと知ってるでしょうからね。

浜崎 温泉が出たとか鉱泉が出たという話はないのですか。

郡山 郡山は温泉は出らん所じゃと云いよった所ですけど、川田に温泉が出たら、どこもかしこも出だした。

浜崎 温泉はなくとも、ガネクソ水という――

郡山 ここはない、東俣という所にある。

浜崎 鉄分を含んだような赤い水が出たり、赤い所が。そういう所じゃないですね。これは地形から来ているかもなあ。

平田 まあ、そうでしょうね。百聞は一見にしかず。そういう結論です。

#### 再びナメリ

平田 ここがナメリという所ですか？

浜崎 ああ、ここがナメリ。

平田 渡る時、滑るんでしょう。

郡山 これをくたって来たような――――

大田 鶴田町の例から見ると、川の跡じゃないですか？

平田 ああ、あそこに石の橋があるよ。

雷除けのお守り――ナメリのある家にあった。

平田 こういうのも面白いかもよ。雷除けのお守りなんてのは。

中村 雷電ヘキレキというから。ちょっとひろげてみて下さい。(数人写真をとる)

#### 日の丸

浜崎 ここが日の丸ですか？

中村 どの辺までですか、日の丸という所は。

郡山 日の丸はずーっと上方まで続きます。あの部落まで。

平田 ああ、ここは日の丸さんが所有した土地だな。

郡山 名前ですか。

平田 そういうことしか考へられない。

大田 日当りがいいからですかね。

平田 いや、日の丸さんが開墾したり、自分のものとした。そういう日之丸名ということでしょうね。

本田 この下の方に、三反ヶ丸というのあります。三反ヶ丸。

浜崎 長い畑？それから見れば。

平田 えっ？

船迫 三反ヶ丸は反対の方ですか？

平田 どう見たって、人の名に由来する。

郡山 田んぼとしては、これは。

平田 この部落としては、上等の田？

本田 日の丸一帯、これは川田川の上流になるな岩戸橋(いわとばし)

平田 もったいないね、この石橋は。ああ、旧道

の橋だな。

大田 鶴田には、こういうのがあったんですが、アーチだけ残っているんですよ。洪水にやられて、残っているのは下の円だけ。他は全部。両脇も取つてしまつたですね。

平田 えー?

大田 頑丈なもんですよ。

平田 アーチは、やっぱし、丈夫ですね。

浜崎 先生、丸田ちうとがありますね、田園に。

平田 丸い田園?

浜崎 丸田とは関連はないですか?

平田 丸田どんというのが昔からありましたね。そう云えば。

浜崎 丸田姓も丸田という田園も多いです。

本田 旧道の石橋だそうです。今、通つて来た道が旧道。

平田 ああ、あれが旧道。

船迫 旧道じゃ、きつかったな。

平田 あんな急な坂はね、ちょっと珍しい。石橋など、郡山町はどんどん文化財にしやらん。

船迫 今のうちに、しつかなければ。

浜崎 これは、やっぱい、三五郎とゆかりのものなんでしょうな。

平田 そうでしょうね。彼があっちこっち集めて回らにやいかんはずやなあ、霧島さんが。岩戸橋?

花尾神社

平田 この色はきれいだな。最近塗り直したのですか?きれいだな。

船迫 南日本新聞に載つてましたよ。

郡山 花尾権現がもともとの祭神でしたでしょうけど。もう花尾神社の山なんかは少ないようです。この上に島津採石の山で、とても大きいのがあるんです。

平田 鹿児島県は、もう島津どんの山ばっかいですね。

郡山 これを修繕した時に、四・五百万かかったとか云うが島津採石は寄付をしなかつたそうです。木を何本か切ればよかったのだけれども。氏子が持つている百万かどしこかを当てたそうですが。

平田 今からは大事にされるでしょうからね。数少ないものだから。

船迫 あの、仏像じゃなくて、右と左の神像は、だれとだれですか。

郡山 なんですか?

船迫 右と左の神像。

郡山 あそこにある面ですか?

船迫 いや、あそこにある、中にある---

郡山 中にある神様?

平田 中にある神官の像、神官像ですよ。きれいに残つていますね。

郡山 秋の彼岸に大祭がある。昔は、この通りは店が立つてですね、盛んなもんでしたよ。鹿児島から夜詣りで、眠らないで詣るもんでしたが、今はもう。

平田 ほう、犬が来て番をひいてるよ。

浜崎 これは、いつ頃ですか?

郡山 これは、古い。年代は古い。何百年。

平田 これは島津吉貴の時代に修復しているうんですよ。だから、18世紀の前半ですが。250年ぐらい前に修理して建て直したんじゃないかな。

郡山 先生に聞きたいと思っていたことが。

平田 あのですね。昨日のよろん欄に、そこのうしろの上の方に大黒寺という近頃出来たお寺さんが出来た---

平田 お寺の坊さんが40歳で、橋をこっちへ移せと云うのでしょう。

郡山 はい、そんな話があるわけですか。

平田 いや、あるらしいですよ。鹿児島市の方にさっさと申し出て、そして鹿児島市は蹴った、と。

郡山 こけ、橋を架けたら、どうなるんですか。

平田 どこに持つて来るんですかね。花尾の前の方ですか。あの人だけの考えなのですか。

郡山 そうです。

平田 わあー、ものすごい話だ。

郡山 昨日のよろん欄。ここに石橋を作つて、そんなものを作つて何になるんですか。

平田 ここじゃない。どこか、あそこの前の川でしようよ。

郡山 川ですけどなあ。

平田 川でしょうね。川に架けるというのでしょうか。大乗院橋を持って来て。

浜崎 地元には何も連絡はないですか。

郡山 鹿児島の大乗院ですか。大乗院とこのつながりというのは、いけなつながり?もともと、永金という坊さんがここを建てた。島津忠久公が源頼朝からもらったなんとかという像があったことは知つたのですが。わりとつながりがあったのでしょうか。いけなつながりがあった一ろかいと思ってですね。

平田 さあ、こちらは島津家ゆかりということだけじゃないですか。

郡山 はあ、真言宗の---

平田 向うは真言宗の本山ですよ。

郡山 真言宗とはももつながりはない。真言宗を言うならば、むしろ伊集院の曹源寺ですね。あそこならわかる。どんなもんですか。

中村 地名辞典には、つながりがありそうなことが書いてありますね。大乗院とことは。

郡山 ここは、昔、平等院があって、その場合、島津さんの保護があったから、三十六坊もあったという盛んなお寺だったわけですが。その時のものは廃仏毀釈の時に、あそこにあるものは、大乗院に持つて行ったことは行ったわけですが。

平田 それじゃ、つながりがあったのでしょう。

郡山 つながりがないとは言わんのです。

船迫 昨日のあれ、よろん欄のあれは、ただ自分だけの思い付き?

平田 思い付きでしょう。

船迫 うん、あれは多分。

平田 鹿児島市の市会議員か何か有力者を通じてほんと言つたんじゃないですか。

郡山 それで、郡山が陳情したようなことを。

平田 その話は聞きましたよ。

郡山 ああ、そうですか。

平田 はい、だいぶ前に。でも、あの辺の衆は、ないごて郡山にやらにゃならんか、と言うてますよ

郡山 向うに隠れ念佛があるんですよ。

平田 ほう。

郡山 かくれ念佛の穴が。それを大黒寺がおっ盗つたちうわけですね。そいは、自分がいろいろ宣伝するためには、いいわけですけど。そこで、ここん衆は機嫌が悪いわけです。

平田 ははあ、大黒寺というお寺があるんですか新しく作った。

郡山 新しく作ったのがあるんですよ。その坊さんが、昨日の「よろん」に出したわけです。

平田 郡山の人たちが言ってるわけじゃないんですね。

丹後局の墓

郡山 これと、入来院宗重の墓と県下には二つしかなかと。それで、出来方は非常によく出来ているわけです。これは後で作ったのじゃなかろうか。なんとか綾宮姫ち書いてありますけど。廃仏毀釈の頃、来たとじゃなかろうかい。あれが奥天守で、あれの苔をとると、産が軽いと言うことで、苔を貢つたわけです。あれが、ほんのこつゝ丹後局の墓じゃらせんどかいと、思うのですけども。

平田 古いもんね、これは。

郡山 これから、お苔を取る人がおるんです。あいから貢つた方がいいちうわけです。(笑)。

そん向うに五輪塔があるわけですが、それはもう、一石五輪塔というのは珍しいちうわけです。こけ、あったのを、あん、だれか、け死んみやった、あい  
船迫 黒田先生？

郡山 あん人が、こけ、直したわけです。

船迫 黒田先生は、ここで倒れたのですね。

郡山 黒田先生は、ここで。こけ、倒れておられたのです。こいが一石五輪塔だから、田之神の起りだと。田之神さあは、田圃が見ゆつとこいじゃなけりやいかんちうて、ここへ直されたわけです。上にあったのを、ここに直して。これが最後の記念です

平田 ああ、ここで亡くなられたのですか。

郡山 そん朝は、日曜日でですな。息子さんが、送って来られたんです。

船迫 早目に来られたんですね。

郡山 はあー、自然としたもんでしたなあ。郡山の衆には、朝から来ているからということだったのです。

大田 ここですか。向うの方じゃないですか。

平田 研究者としては本望ですね。

大田 向うの丹後局のあっちの方じゃないですか

郡山 やっぱい、ここじゃった。ここです。この位置です。ここで、ここに、こう。花があがっているでしょう。

平田 なるほど、それは知りませんでした。

#### 花尾石（はなおいし）

平田 ちょっと、石の説明をしましょう。この石は、この辺の石で、こちらでは花尾石と呼んでいます。加治木の桃木野石、蒲生石・吉田石それに花尾石は同系統で、きめのこまかい凝灰岩です。地面の中にある時は真っ黒いのですが、乾くと、ねずみ色になります。鹿児島県の凝灰岩の中では、一番質が良いものです。昔の墓石・石仏は、ほとんど桃木野石を用いています。現在、花尾では花尾石は採らずに、山を越えた吉田の石を買って来て使っていると

のことです。

郡山 花尾石は、墓石を作る時はやわらかくて、年数が経てば経つほど硬くなるということで、墓石には重宝がられていたわけですけど。

平田 桃木野系統の石をもっと宣伝すればいいと思うのだけど。

#### 黒田先生と月輪塔

平田 ここで黒田先生が倒れたというのを知っていた？

中村 いいえ、知らなかった。今、聞いて始めて知った。

平田 うん。

中村 かなり歴史の好きな方じゃないですか。研究会の会員に入れたら。（笑い）

平田 ついで来るよ。

浜崎 だれが亡くなったのですか。

平田 黒田先生。古石塔を研究された。

浜崎 ああ。

平田 この辺の五輪塔は古いなあ。どう見たって室町時代でしょう。江戸時代じゃない。

船迫 そうですね。

郡山 これが永金の墓です。この中には相良氏であるとか川田氏であるとか、いろいろな墓あるらしいです。念を入れて見たところが、骨があったのはこれだけは骨が入っていた。他のはまあ念を入れて見なかつたのですけど。

浜崎 ああ、ここが骨壺になっていますか。そうですか。へえー。

郡山 ここで一番きれいなのは、あの宝筐印塔。あれが、まあ、とにかく綺麗で。

浜崎 ほう。

郡山 それから、鹿大の五味先生がおっしゃるには、あれを「ガチリントウ」という。あいが古いというわけ。昨日、ここで黒田先生の供養と共に、古石塔研究会があったんですよ。河野先生たちが。

平田 河野治雄さん？

郡山 あれを、大事がっておられます。

平田 これ？

船迫 「ガチリン」

平田 「ガチリン」て、どんな字を書くの？

郡山・船迫 「ツキのワ（月輪）」

平田 ツキのワ。ああ、月輪（ゲツリン）。ガチリンね、なるほど。

郡山 これは、この前、こわれたのですよ。組み立て方が悪いですね。

平田 これは郡山町の指定史跡ですか？

郡山 そうです。近頃は、手入れがなかなかで、手入れがしないようですね。

船迫 なんか、手入れが悪いようですね。何年前、来たんですよ。以前は、こんなもんじゃなかつたですね。

浜崎 鰐（まん）という字みたいですね、鎧（こて）とか鰐（うなぎ）という字に似てるんじゃないですか。

郡山 瓢（に）という字じゃないですか。瓊々杵（ににぎ）の瓊（けい）という字。

浜崎 瓢々杵の瓊（けい）という字。ああ、瓊。

船迫 ああ、ですよ。瓊々杵尊のあの瓊（けい）

郡山 指定史跡がこんなふうじゃおかしいですね

浜崎 黒田先生が調べになつたじゃろうから、やっぱい、大事にしてもらいたいですな。

平田 あの先生は、全部、ひとつひとつスケッチされたんですから、大変な努力でしたよ。

郡山 郡山にはですが、力を入れて頂いて。川田もよかふうに、苔を落としたりして。もう一つ常磐も復元せにゃいかんちうことでしたけれども、あいが、まあいっと、生きておいやれば。

平田 しかし、調べに来て、ここではたつと倒れるというのは、うらやましい死に方だな。さあ十二時半だ。後はフリーにしましょう。

#### 川田供養塔群

平田 これは大きい。

郡山 これが川田氏の墓です。

平田 これは立派だ。

郡山 比志島家の永尊という人から分かれた川田盛助という人物があり、永尊を供養するためにこれを建てたということです。とにかく珍しいということで、県文化財に指定されております。

平田 これは、すごい。

郡山 まあ、郡山をいうなら、この川田家と郡山氏をせにゃいかんちうことで、郡山の歴史をするには、やっぱい、これが大事というわけですな。それから、向うの方に逆修があるわけで、そういうような句碑が書いてあるそうです。これは大事にせにゃいかんということで、啓蒙することにしとるんです

平田 これは、すごいよ。こんなに大きいもんとは、思わなかった。

浜崎 綺麗だなあ。

郡山 苔も生えるので、どちらにゃいかんと先生達も云うんですが、手がとどかんのですな。もっと県の衆がきちんとしてくれればよかどんという気持ちがします。こげなふうじゃ、このまま荒れるばかりです。ちゃんとせにゃ、いかんわけですが。

平田 これは綺麗だ。

船迫 うしろに名前が彫ってありますね。

郡山 これは、名前が書いてありますな。

平田 綺麗だ。こんなのは、もっと宣伝せにゃ。

郡山 黒田先生に言わすれば、あとから書いたとやがと云うことですが。

浜崎 喜入にも、こげな形のとがあるようです。

郡山 川田氏の墓と云えば、向うになるわけです

平田 これは室町初期だろうね。

郡山 川田氏の墓の直径を測ってですな、向うにあるものと比べれば、ひとつもんじゃつとおっしゃるわけです。（寸法が同じ。だから川田氏の墓）

船迫 これは町の指定文化財なんですね。

郡山 四・五日前の新聞にも載っていたんですが

平田 こんな大きいものとは思わなかった。

浜崎 石塔なんかでは、字が読めないのが、一番歴がゆいのですが、何か拓本をとるか、これを読む手っ取り早い方法はありませんか。

平田 これをですか。写真をといやってですね、一つ一つ梵字を見比べるしかないでしょうね。

浜崎 写真をとって、普通の根性で良いですか。

平田 私も読めません。

浜崎 読めないちうのは、はっきりしないので、水をかけたり、こすって拓本にしてみたり、何か方法は、ないもんかと思って。

平田 あー。

浜崎 字をはっきり。

平田 写真と拓本が一番はっきりしますね。

浜崎 そうですか。

平田 よか眼の保養をさせて貰いました。立派な

もんです。

川田 沢田氏は高岡の地頭に行ったわけですから川田氏にゆかりのある人はむしろいないということでしたが、やっぱり比志島という身内の人気が残っていたのでしょうか。

平田 川田さんという苗字は、いやしませんか。

鹿児島県に。

郡山 はー。

松浪 比志島さんち云えば、昭和30年頃、原良に船迫 今もあそこにおられますよ。

松浪 今もおられますか。稲荷神社の上に。

船迫 はい。

松浪 尾畔病院の裏から行ったところ。

平田 どうも、ありがとうございました。ここで現地解散をいたしましょう。

郡山 どうも、いろいろ。

全員 お世話になりました。(笑)

### III. 平田信芳『海の地名と山の地名』

第3回南九州の地域文化を考える研究発表会  
昭和63年12月4日 志布志町文化会館

山の文化と海の文化というテーマになっておりますので、そういう題名にしましたが、海の地名という表現はおかしいので、海辺の地名というふうに理解してください。それから、山の地名は山の名・岡の名ということになろうかと思います。最初の挨拶で申しましたが、2週間ぐらい前にワープロが故障しまして、フロッピーに打ち込んであるデータが引き出せなくなり、研究発表どころではなくってしまいました。幸いなことに、ドライバが上と下二つあり、下の方が生きておったので、それを使ってようやく昨夜1枚のレジュメを作った次第です。完全に直るのは来週以降で、ドライバが二つ付いていたために片肺飛行で、なんとか間にあったわけで

す。従来、データを整理する場合は紙と鉛筆でしたのですが、I.C.機器の登場でいろんなデータを整理・保存するのに非常に便利になってきました。しかし、機械もやっぱり人間と同じで、こき使えばくたばって来るわけで、能力も落ちて来るということに気付きました。ですから、ああいう機械も絶対視出来ないということです。早い機会に印刷して、文字のデータも保存しておく必要があるということを感じました。いくらフロッピーに打ち込んであってもですね、引っ張り出せなくなれば、お手あげです。

会社の連中も、どこがどうなっているのか判らないので、中身をそっくり換えるというやり方がある手の機械の修理のようです。そのような状況でしたので、山の地名を打ち込んだ一覧や海辺の地名の一

覧表というのは、印刷する暇がありませんでした。それでプリント1枚のレジュメにまとめて参りました。どの地名をインプットしたかと言いますと、以前、南日本新聞社が出しました『鹿児島万能地図』に記載されている地名をインプットしました。今後5万分1および2万5千分1に出てくる地名と対比して行けば、鹿児島県の海辺の地名それから山・岡の地名などのデータが大体揃うと思います。

以下、プリントにもとづいて話をします。まず、海辺の地名で○○港・○○漁港と付く地名ですが、港とか小湊というのが一・二あるだけで、他は「地名+港」という形のものです。これは海岸の集落は港と密接不可分の関係にあることを示すもので、「集落地名+港」の形になっているのが、港の地名のようです。

島の名は、みな、それぞれ個性がありまして、共通なものとしては阿久根大島・奄美大島、中之島が三つ、小島が三つ。枇榔島が志布志湾のものと羽島の沖にあるもの。それから家島が二つ、というふうに同一地名の例が少なく、ほとんどが個性的な名前ですので、一つ一つ考えて行かねばなりません。

(3) 湾・浜・浦。本土の方は、これを薩隅としました。これが147。それと奄美大島。これは徳之島・与論島まで全部含みますが、奄美に54。右端の方に、浜・浦・湾・泊などの数をあげ、カッコをつけたものと付けてないものとがありますが、カッコは奄美的地名ということで、奄美には浜の付く地名が24あることを示します。それを見ますと浜という地名は本土にも奄美にも多く見られる。

浦という地名は、本土に48、全体の1%ぐらい。それに対して、浦という言い方は奄美では非常に少ない。

湾というのは、新しい呼び名であって、どちらにも同じように見られますが、これはもう明治以降になって作られた呼び名であって、古くは、まぁ、浜

とか浦とか言っていたということが、数を数えただけでもわかります。以下、泊・津・江・潟の数は非常に少ない。

共通の地名としては、まず白浜。結局、白砂で浜が綺麗な所に白浜という単純な名前が付くのですがこれが薩摩・大隅で5例、奄美の方で2例。桜島・始良・獅子島などと書いてありますが、そこにそういう地名があるということです。

前之浜は5例。前之浜というのは、ある大きな集落なり、またはある屋形があって、その前之浜という意味を示すものと思います。これは「前田」の場合も同じで、ある屋形・屋敷があって、その前の田圃が一番利用し易い活用し易い田圃で、「前」と付く地名は重視しなければなりません。

長浜というのは長い浜ということで単純な地名の付け方になります。その次、小浜。「こはま」と呼ぶのか「おばま」と呼ぶのか、現地で聞かなければ判りません。「おばま」の方が歴史的には古くて、「こはま」は新しい。隼人町のものは「おばま」。それから大浜というのは佐多・瀬戸内などに4例。その次、深浦というのは深い浦という意味ですね。大浦は大きい浦。それから宮之浦は、神社によって付いた地名。馬込浜は、馬を追い始めた「マゴメ」という民俗的習慣。それから鯨浜というのは竜郷と笠利にあります。その昔鯨があがったのでしょう。本土の方にもあるのでしょうか、この万能地図には出ています。そういうことで、湾とか浜とか浦というのは、単純な名前の付け方が多い。もちろん一つ一つの地名には、それぞれ特色があります。

(4) 岬。岬は非常に多い。右の方に、崎：145(84)、鼻：91(8)、岬：13(2)というものを比べますと、岬という表現は鹿児島県にとっては新しい呼び名で、これはやっぱり、明治以降の呼び名ですね。長崎鼻というのも5例ほどあるようですが、この鼻という呼び名は奄美の方では8例しかありません。

んので、「鼻」という言い方は、やっぱりこちらの方の呼び名だということが、数の上からだけでも判ります。それから一見赤い色に見える赤崎。東市来の赤崎という地名をとつて苗字としたのが、鹿児島市の赤崎市長の先祖でしょう。松が生えておれば松崎、色が黒っぽく見えれば黒崎、流れが早いところに早崎が付きます。海が荒れれば荒崎となります。竹が生えておれば竹崎。戸崎というのは、どういう意味でしょうか。番所鼻というのは、船を取締った番所のあった所。

○ その次の市来崎。「イチゴザキ」と呼ぶ場合と、「イチキザキ」と呼ぶ場合では、解釈が違って来ます。イチゴザキと読めば、野苺がよくとれた所。イチキザキであれば、「イチノキ」が生えていた岬ということになります。

ダグリ崎。これは、ご当地、志布志にあります。獅子島にタグイ崎という地名がありますので、それとの比較で考えて行ったらとも思ったりしますが、どう解釈してよいのか、まだ判りません。タグリ・タグイが一番合いそうな気がしますが、地元の方々は「ダグリ岬」をどのようにお考えでしょうか。後で、お話し頂きたいと思います。

観音崎・立石鼻・天狗鼻・宮崎・堂崎。こう言ったものは、みんな宗教に関連する地名です。その次の馬乗崎（ばじょうざき）。これは甑島にある地名ですが、次のように考えます。芭蕉の木と関連のなさそうな山の中に「芭蕉」という地名がよく出て来ます。これは山姥（やまうば）とか、蓑婆尉（みのばじょう）と呼ぶ山深いところに住んでいる恐しい婆さんに由来する地名だと考えます。まあ、天狗とか鬼とか、そういう類のもの。婆尉が居る岬ということなんでしょう。岩だらけの、人が行けそうにもない所に馬乗崎という地名があり、そこで馬に乗るというようなことは考えられないわけです。霧島町に「場集田（ばしゅうだ）」という地名があります

が、婆尉から変化した同じような類の地名だと思います。

（5）瀬・岩礁。平瀬とか立神という名が多い。立神という地名は、割合からすると奄美の方に多く見られる。それから、赤瀬・黒瀬・白瀬。青瀬というのは1例しかありません。鶴がたかっている所が鶴瀬（うのせ）。鳥帽子の形に見えるのが鳥帽子瀬、横瀬というのは横っちょの瀬ということでしょうか。山ノ瀬というのは、山の延長？二子瀬は瀬が二つに見える。ビサゴ瀬というのはビシャゴという鳥が集まっている瀬ということでしょう。

（6）黒神という地名をあげておきましたが、二ヶ月ほど前、筑波大の女子学生から電話を受けました。鹿児島に「黒神」という地名があり、それを卒業論文のテーマにしようと思ってやって来ました、と。電話で失礼ですが、どのようにお考えでしょうか、という軽い電話が来るのでびっくりしたのですが、熊本にも「黒髪町」という町の名前もあるので、あちらこちらにあるのじゃないかと返事をしました。海辺の地名を整理しているうちに、「黒神」というのは「黒い立神」という意味で、黒岩と立神が結び付いてそのように変化した、と解釈するのが一番良いんじゃないかなと思うようになりました。黒岩という地名は、角川の小字一覧から引いた限りでは、鹿児島県で47例あります。但し、岩とか石という地名は、奄美の方にはほとんどありません。やっぱり、サンゴ礁だからでしょう。岩とか石に関する地名は、ほとんど本土にかたまっております。奄美の方には黒い岩・黒い石がありませんので。黒神は「黒岩+立神」だろうと思います。そこで、立神というのは何かを示す地名が1例だけ、甑島にありました。「芝立神」という地名です。県下に、「芝立」という地名は多いのですが、「芝立神」という地名が出て来ると、本来の形は「芝立神」だったろうと想像されます。「芝立神」が縮まって「立

神」になったと解釈すれば、信仰の対象になり得るわけです。それに黒岩というものが付いたりして黒神という地名になったと考えるのがいいんじゃないかなということです。いつか筑波の女子学生と連絡がとれたら、そういうことを知らせたいと思っております。

● 次に、山・岳・丘の地名について。あと5分ですので、簡単に申します。

整理の方法としては、ワープロでもパソコンでもアイウエオ順にさーっと並べ換えてくれます。それぞれの機械の能力によって個数は限定されますが、アイウエオ順に並べ換えることは、容易です。並べ換えてみると、同じような地名が出て来ますので、地名の由来を考える場合、考え易くなるわけです。

● 山を標高で並べますと、ランク付けが容易に出来ます。鹿児島県下に、1500m以上の山が、15。そんなにあるのかなと思われるかも知れませんが、標高1500m以上の山は15あります。1000m以上の山は、ワープロに入れたものを見ますと、35。我々が知っているのは、宮之浦岳。その次が韓国岳それから紫尾山、桜島。それくらいのことしか知りません。実際は相当な数が数えあげられますので、こういう地図をご覧になるのも楽しいんじゃないでしょうか。

最初は市町村別に拾って行きますので、市町村別そのままのデータで見ても、山が多いとか、宗教に関する地名が多いとかの見当が付くだろうと思いまます。『鹿児島万能地図』から拾いあげた山の名前を（2）から（9）まで分けてみました。

（2）形状地名。これは形によって付けた名前。鳥帽子の形、矢筈の形。矢筈というと、弓の矢にあるくぼみのある形。丸山が、まるい山。上床山、床の間のような平たい台地。日笠山は、日笠の形でしょうか。冠岳。高鉢山は、鉢を伏せて高く見えるというのでしょうか。

（3）大きさ・山深さを示す地名。大山・小岳・雄岳・三重岳・八重岳。郡山の八重岳は、本来は「ハエヤマ」と読むのを、最近は「ヤエヤマ」と呼ぶと古の方々は嘆いておられました。

（4）占地地名。場所によって付けられる地名。中岳・横岳・前岳・向岳、それに東西南北。

（5）国見・遠見・番屋。これもわりと多い。

（6）城・陣屋、陣が岡に城山。志布志には陣岳があり、それをとつて閑取モシコナを名乗っているようです。

（7）噴火の新旧にもとづく山の地名。古岳・新岳

（8）信仰にもとづく山の名。これは多い。御岳、これは御岳信仰にもとづくもの。愛宕・権現・仏山根上岳。「ネガミ」というのは、意味がわかりませんが、十島村の方に「根神」という言い方がありますから、その島本来の神様の呼び名だという見当がつきます。それから御拝山（おがみやま）、尾立岳（おだてだけ）、行人岳（ぎょうにんだけ）。黒尊岳（くるそんだけ）、なにか意味があるんでしょうか。山王は日吉山王。蔵王権現、住吉神社。千貫岳は値い千貫じゃなくて、銭瓶（ぜにがめ）から変化したものだろうと思います。

多賀神社・手向山・乘腰。乗腰（のりこし）という年占神事が消えてしまっている。それから、鳥神。止上（とがみ）神社というのもあります。

花立山・牧神、それから矢立。これは狩人が山に入った時に、矢立の神事をやるものです。

山の名前は海に比べて信仰に因む地名が多く、しかもその信仰というものも、ほとんど民俗の中でも絶えてしまったものもある。そう言った観点で山の地名を全国的に洗い直して行くと、新しい一つの原始信仰とというのが追求出来るのではないか。まあそう言ったことを感じます。

（9）その次、意味がわからないもの。佐賀利山・高隈山、それから湯湾岳というのが、加治木に1ヶ

所、奄美に1ヶ所。それから辻岳というのは、交通路になるのでしょうか。意味がわかりません。

(10)『三国名勝図会』に出て来る寺院の名も全部インプットしてありますが、これも山号・山の名という面で見て行くと、一つの特色が出て来ます。国分周辺に、わりと山の名前を取り入れた寺院名が多く見られます。富隈山・獅子尾山・笑隈山など。霧島山錫杖院華林寺(きりしまざんしゃくじょういんけりんじ)というのでしょうか。吉水山。キッスイザンかヨシミズサンでしょうね、吉水(よしみず)という苗字があるようです。日木山は加治木に日木山(ひきやま)という地名があります。その次瀧水山(りゅうすいざん)、かれから龍ヶ水という地名が出ています。「瀧」が「龍」に変っていますが。岩剣山。岩剣城ということがあります。それから日当山。「ヒナタヤマ」を「ニットウザン」と読ませているのでしょうか。日当山西光寺、西光寺も隼人町の地名として残っています。安良山来福寺・太良山曹源寺など、山号と地名を比較するのも面白いと思います。

「海の地名・山の地名」と題しましたが、『鹿児島県万能地図』に出て来る地名の中で検討・整理してみました。

#### 〔補足説明〕

プリントの中に薩隅と奄美としましたが、薩隅日とすべきだったなと思います。志布志をうっかり抜かしました。私の持論から言いますと、ここはクニ郷・クニ院(救仁郷・救仁院; 国郷・国院)ですから、本来は大隅国を中心だったろうと思います。まあ、その意味で薩隅と先走ったのですが、薩隅日とすべきだったかも知れません。

それから奄美的地名をカッコ書きにして数値を示しましたが、地名を検討する場合、奄美のものと一緒にすると地名の特徴というものが把握しにくく

なりますから、奄美はやはり琉球方言群ということで、奄美は奄美というふうに独立させた方が地名を検討する場合には、やり易いと思います。1枚のプリントで、カッコにしただけでも、一つの特徴が出て来ます。

それから結論的なことを言いますと、海辺の地名では、岬に信仰地名が多く見られる。山の地名には信仰地名が多い。そういう余り人が行けないような所が信仰の地になった、と言えます。

#### 〔質疑応答〕

片岡 海辺の地名として、伊座敷とか板敷とか。板敷は枕崎の近くにあります。「シキ」と付く地名が海辺の特色ある地名の中に入るもののなか、でないのか。それから米之津あたりに、大瀧・小瀧(オオスキ・コスキ)という地名がありますが、あれも魚を捕るために石をずっと積んで、魚を追い込んで潮が干いてから捕る漁法です。これも海辺の特徴の地名だと思うのですが、その辺が入るのか、入らないのか。

原口 ジャー、伊座敷・板敷について。

平田 大瀧・小瀧の方から答えます。この『川内川流域の文化』のうしろの方の、総合討論の8ページをちょっとお開き下さい。その右側の上からあたりに「スクイ：須杭」という地名が出て参ります。川内川流域にも「スクイ：スキ」という地名があり、これは「スクイ漁・スキ漁」に由来するものと考えました。内陸部でも見られる漁法で、地名にも見られますので、あえて海岸地名にあげませんでした。

それから今あけている8ページの下の方に、一昨年、板石積石室のことが問題になり、そこに上村先生のコメントがありますが、川内川以北に板石積石室があり、単なる隼人の墓制とみなすわけにはいかないと、論議が進んでおります。そのことも補足しておきます。

伊座敷・敷根など、お説の通り、確かに鹿児島県には「シキ」という地名は多い。「シキ」というのは、17種類ぐらいの意味があり、地名を解釈するのに、どれを探したら良いのかとまどいます。「シキ」という地名が内陸部にあるからと言って、縄文時代はそこまでが海岸であったとするような難しいものは省きました。確かに伊座敷・敷根という地名は敷浪(しきなみ)という行ったり来たりして綺麗にならされる浪によって出来た地名だろうとは思います。

国分市に名波(なば)という地名がありますが、魚を捕る場所という意味あいのもの。日向方言で葺(のぶ)ることを「なば」といますが、葺を採ったような場所でないので、あの辺は縄文時代の終り頃は魚を捕える場所だったろうと考えられます。そういう類の地名は省きました。ご諒承下さい。

大田 鶴田町の大田という者です。海でないのに「島」という地名があります。「島巡」とか、いろんなのがあるんですが、どういうふうに解釈すればよいのですか。それと「ハシケ」という地名があります。これは片仮名で書いてあります。「向ハシケ」とか「前ハシケ」、ただ「ハシケ」ですね。これはどういうところから来た地名でしょうか。教えて頂きたいのですが。

平田 「島巡(しまめぐり)」という地名は全国的に見られます。とくに、鹿児島県に多く見られます。これがどう言ったことをやった民俗行事なのか痕跡が残っておりません。重要視すべき地名の一つだろうとは思います。島」というのは、霧島も島と申します、霧の中に浮かんで島のように見えたということでしょう。平野部であっても、島のように海に浮かんだと同じような地域に「島」という表現を使いますから、内陸部に「島」という地名があってもおかしくないわけです。

「ハシケ」は現地を見てないので判りませんけど

川を往来するのにハシケがあってもよい。(後記: 流合・ハッケをハシケと読み違えたか?)

大田 川内川から余り遠くはないのですが、谷があるんですよ。入り込んだ所にあるもんですから。

平田 それから、鹿児島県で「け」という言葉は気付けなければならぬのですが、例えば鹿児島で地名に疑問を持ちますと、すぐ花倉(けくら)・花棚(けだな)・花野(けの)という一列に並んでいる「け」に気付きます。これらは何らかの意味の接頭語だとは思います。「ハシケ」の「け」も、接尾語の場合もあり得るわけですね。ですから「け」というのは非常に難しいということです。まだ実体がわかりません。そういうものの一つであるかも知れないと、とらえていいんじゃないでしょうか。

野神 小字の地籍図があって、段々消えかかっているんですが、旧字名ですね。それらの採取の仕方について、字名を入れても音韻が変化しているわけですから、その追求の仕方がどの辺で安心してよいのか。

平田 現在、地籍調査を各市町村で進めているようですが、一番大事なことは1万分1図に小字を確実に落とすことです。そういう作業が必要だらうと思います。それから一つ一つの地名を解釈して行く場合、音が大事で文字はまあ二の次にすべきです。このように変化したと、いろいろ地名研究をする人たちが、しがちなことなんんですけども、判らないものは判らないと置いとけばいいんだろうと思うんです。確実に判ったものを一つずつ積みあげて行けば、その地名に隠されている歴史を扱って行けるんじゃないかなと思います。

私が考古学よりも地名を重視しはじめたのは、考古学者は土器とか石器に古代の歴史を語らせているわけですが、地名は昔の「音」を文字に残してくれているわけです。それに隠されている歴史をつかまえない方が歴史家の怠慢だと思います。むしろ地名

をもとに遺跡を見付けて行く。これは考古学者として大事なことだと思います。

今の質問に対する的確な答えにはならないとは思いますけれども、判らないものは判らない、それでよろしいだろうと思います。

中村 ジャー、時間が迫って参りましたので、今二人だけ手があがっておりますので、そのお二人の方だけ済ましいと思います。

永山（又）あの簡単に。平田先生に二つだけ。先程、薩隅日、日が入っているから薩隅ではいけなかつたのじゃないだろうかという話があったのですが、これは薩隅で結構だと思います。明治16年に宮崎県が分県運動を起こしまして、分県に成功します。その時諸県が二つに分かれまして、南諸県が鹿児島県側に付いております。これが志布志・大崎・有明・松山・現在の大隅町月野でございます。ところが南諸県郡が明治29年に東轄郡と合併いたしまして、現在の曾於郡（轄郡）となります。その時点で、日向国から大隅国へ編入されておりましたので、日向を考えなくとも間違いないということになります。

それから、もう一つ。先程、ダグリ岬の語源が判らないということでしたが、地元では「ダグリ」と言います。ダグイ岬（ダグイミサッ）と言います。これは、この地方だけの方言かどうかは知りませんけど、荷駄の積み換えのことを「ダグイ」と言うのです。子供の頃、荷駄だけで生活しているお爺さんが二人、近所に居て、しおっちゅうダグイ・ダグイと聞きよったんです。どこの坂はきついから、あすこじゃダグイせんと駄目やっど、ち。あすこはダグイせにゃいかんど、と。ダグイというのはこの地方の方言でございますので、決してこれはこじつけではありません。夏井の関所をおりて来ますと、あとは浜辺の道路になるわけです。岬のふもとを通って行く現在の国道は昔はなかったわけです。ダグリ岬

を越しますと井手ヶ浜に出まして、あすこは山手の道路に変って行くわけです。ですから普通の荷駄では、あすこから先は行けなかったはずです。恐らく荷駄の積み換えをしたのだろうというふうに推測しております。恐らく荷駄縁りからの「ダグリ」で、これは間違いないんじゃないかと思っております。

平田 ありがとうございます。その場合、獅子島だろうと思うのですが、タゲイ崎ですね。それともう一ヶ所——。

永山（又）他所では「タゲイ」なんですよね、ほとんど。他所にもありますけど、「タグリ」。タグリ寄せるのタグリ。

平田 網をたぐり寄せるの「タグリ」ですか。

永山（又）網をタグル。それから来たのじゃないかと云われておるんですが。志布志だけが「ダ」なんですよ、ね。ダの濁音が付くのはダグチ前とか駄賃というように、荷駄の「駄」だけだと聞いておりますので、志布志の場合は荷駄縁りのことが始まりじゃないかと思います。

平田 ありがとうございます。やっぱり、地元の人が一番よく知っておられます。

中村 さっき、一人でしめくくろうと思ったのですが、女性の方が手をあげられたもんですから、貴重な方（笑い）と思って。

会場の一女性 別に難しいことじゃなくて、地名のことです、平田先生にちょっと申しあげてみたいと思います。3番目の浜のところで、小浜（おばま）というのがございますが、こういう地名は志布志にもございます。前川をはさみまして東の方が小浜、そして今埋め立てられておりますけれどもアリビの浜を大浜と言っておりました。今もやはり私たちは小浜・大浜という言葉を使うのですけれども。志布志の分が洩れているのではないかと思います。もしよろしかったら、大浜・小浜に端っこの方に加えて頂ければと思いまして。（笑い）

平田 はい、ありがとうございます。おことわり申しあげますが、これ（鹿児島県万能地図）に基づいております。もっとこまかい地名は、角川の小字一覧に出ているか、出でないか。もし出でていなければ、今云われた地名は、俗称地名としてもっと大事な地名だと思うのです。公簿に記録されていない地名というのも研究対象にしなければいけないと思います。そちらの方がむしろ大事です。

X X X

## 鹿児島地名研究会会員名簿

青柳俊二	花園正志
池田信夫	花田 潔
江之口沢生	浜崎盛雄
江平 望	原口 泉
大田照夫	肥後芳尚
小川亥三郎	平田信芳
片岡八郎	二見剛史
唐鏡祐祥	本田親虎
芳 即正	本田碩孝
霧島一浩	藤浪三千尋
桐野利彦	松田 誠
郡山政雄	松浪由安
木場武則	三木 靖
佐野武則	南 清孝
下野敏見	山口静也
富永清志	山崎盛隆
中村明藏	山田慶晴
永山修一	四本健光
永山徹弥	脇元東明
西園一俊	

## 沿海の地名

(1) 港・漁港 薩隅: 255, 奄美: 68

(地名+港・漁港) の形がほとんどである。海岸の集落は港(漁港)と密接不可分の関係にあることを示す。

(2) 島名

大島: 1 (1), 中之島: 3, 小島: 3, 桜島: 2, 硫黄島: 2

他の島は、県内に同じ名の島はない。

(3) 湾・浜・浦 薩隅: 147, 奄美: 54

白浜: 5 (2) -- 桜島・姶良・獅子島・串木野・枕崎  
瀬戸内・知名

前之浜: 5 ---- 鹿児島・南種子・喜入・加世田・東  
長浜: 3 (2) -- 中種子・下甑・隼人・名瀬・和泊

小浜: 4 ----- 長島・垂水・根占・隼人

大浜: 3 (1) -- 佐多・垂水・根占・瀬戸内

深浦: 1 (2), 大浦: 2, 宮之浦: 2, 馬込浜: 2, 鯨浜: (2), 塩浜: (2)

(4) 岬・崎 薩隅: 271, 奄美: 96

大崎: 7 ----- 鹿児島・枕崎・長島・西之表  
阿久根・佐多・東

長崎鼻: 5 ----- 東桜島・山川・長島・阿久根・串木野

長崎: 1 (2) -- 竹島・瀬戸内・宇検

赤崎: 5 (4) -- 阿久根・鹿島・東・東市来・坊津,  
名瀬・宇検・加計呂麻・与論

松崎: 5 (1) -- 垂水・黒島・長島・内之浦・大根占, 宇検

黒崎: 5 ----- 獅子島・諸浦島・内之浦・悪石島・屋久島

早崎: 5 ----- 下甑・佐多・獅子島・垂水・上屋久

荒崎: 5 ----- 佐多・出水・垂水・臥蛇島・中種子

竹崎: 4, 戸崎: 4, 番所鼻: 4, 市来崎: 2, タグリ崎・タグイ崎: 各1

観音崎: 4, 立石鼻: 3, 天狗鼻: 2, 宮崎: 2, 堂崎: 2, 恵比須崎: 2

馬乗崎: 1

(5) 瀬・岩礁 薩隅: 157, 奄美: 41

平瀬: 18 (2), 立神: 12 (7), 大瀬: 7 (1), 長瀬: 6

赤瀬: 5 (1), 黒瀬: 4 (1), 白瀬: 2, 青瀬: 1

鵜瀬: 4, 烏帽子瀬: 3, 横瀬: 2, 山ノ瀬: 2, ビサゴ瀬: 2

(6) 黒神・黒髪 ----- 上甑島里村黒神・東桜島町黒神

黒い立神: 黒岩+立神 ⇒ 黒神・黒髪

## 山・岳・丘の名

(1) 整理の方法

1. アイウエオ順-----地名の由来を考えるのに便利。

2. 標高順-----県内におけるランク・標高を知るために好都合。

3. 市町村別に整理---地図と対比し、市町村のイメージをとらえ易い。

(2) 形状地名

鳥帽子岳: 6 (3), 矢筈岳: 5, 丸山: 3 (1), 上床山: 2, 日笠山: 2

笠山: 3, 冠岳・冠山: 各1, 高鉢山: (2)

(3) 大きさ・山深さを示す山名

大山: (2), 小岳: 2, 雄岳: 2, 三重岳: 1, 八重岳・八重山: 各1

(4) 占地地名

中岳: 7, 横岳: 4, 前岳: 2, 向岳: 2, 東岳: 3, 西岳: 2, 南岳: 1,  
北岳: 2,

(5) 国見・遠見・番屋にもとづく山名

国見岳: 5, 遠見山: 3, 番屋峰: 3

(6) 城・陣屋にもとづく山名

城山: 6, 陣が岡・陣之尾: 各1

(7) 噴火の新旧にもとづく山名

新岳: 2, 古岳: 2

(8) 信仰にもとづく山名

御岳: 7, 愛宕山: 2, 権現山: 2, 仏山: 2, 根上岳: 2, 御拝山: (1)  
尾立岳: 1, 行人岳: 1, 黒尊岳: 2, 山王岳: 1, 蔵王岳: 1, 住吉山: 1,  
千貫岳: 1, 多賀山: 1, 手向山: 1, 乘勝岡: 1, 鳥神岡: 1, 花立山: 1,  
牧神岳: 1, 矢岳: 2

(9) 意味不明

佐賀利山: 2, 高隈山・高熊山・各1, 湯湾岳: 1 (1), 辻岳: 2

(10) 地名を山号とした寺院

富隈山心王院童蓮寺(隼人)

獅子尾山正福院(隼人)

笑隈山正行寺(隼人)

霧島山錫杖院華林寺(霧島)

吉水山光明院念佛寺(国分)

小牧山法嚴寺仏性院(財部)

日木山東禪寺(加治木)

龍水山心岳寺(姶良)

岩劍山神宮寺円光院(姶良)

日当山淨土院西光寺(隼人)

安良山来福寺(横川)

太良山曹源寺(菱刈)

現地研修資料（都心）

一  
祁山之池名

滿象院

賦  
令

說他所作地名

二現地所管地名

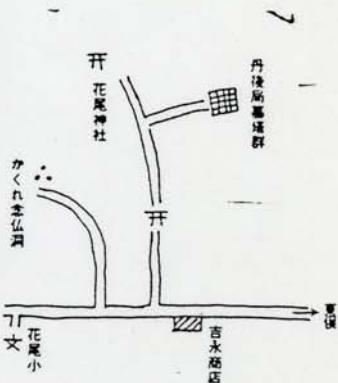
			柴立	
都山	大閥	霧島	蒲主	指音
柴江	柴引	柴建	柴立山	
根任 占	菱刈	東所	大口	廣布
都山		日丸		柴周
都山	大口	都山	入東	日吉
"	"	"	"	風呂、元
嘉吉	追谷	"	段	上串木野
因	黑木	百引	輝北	茅刈
"	上岩風	上百引	岩風前	風呂、元
平	下岩風	若風呂後	岩風前	國呂、村頭
"	"	"	桔吉	上百引
			桔田所	

知覽	類姓
佐多	伊集院
都元	鹿市
都本	大板占
加治木	

日の丸—風呂神—ナメリ—柴立—彦ヤ—花尾



### 花尾神社（さつま日光）



花尾神社

参道を行くと朱塗りの鳥居があります。うつそうとしげつた老大杉の奥に別名「さつま日光」とよばれる社殿があります。

源 賴朝  
丹後局  
主神 僧永金  
従祀神

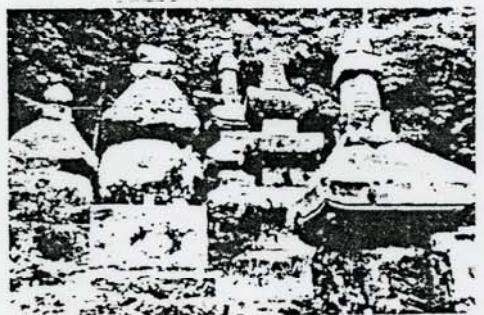
伝えによりますと島津忠久公は薩摩守護として当地にたつた時、母の丹後局と養父の八文字民部大輔惟宗広言を迎へ、広言を市来の地頭に任じ母丹後局

には満家院厚地村と東俣村を与え、後忠久公は源頼朝尊像を花尾山の麓に安置し御堂を建てました。その後丹後局は安貞元年（一一二七）十二月十二日に亡くなりましたので、遺言によって花尾山の麓に葬むつた。それが現在の神社の始りで歴代藩公は厚くこれを尊宗し、寛文九年（一六六九）光弘公は大修理、二十一代綱貴公は元禄十七年（一七〇四）神鏡を奉納して厚く尊宗しました。大祭は旧二月十二日、八月十二日

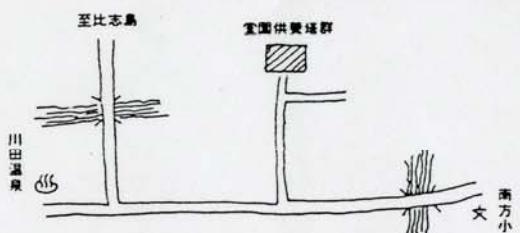
丹後局宝剣一振  
花尾大權現廟記（造士館教授、山本正誼著）

稻荷神社

大阪住吉神社に於てお産の切り御神助を賜り、由緒により島津家代々大切  
に尊宗されました。



川田堂園の供養塔群



川田堂園の供養塔群  
県文化財指定（昭和三十八年六月七日）

中世の頃郡山町は満家院といつていました。川田は島津家家臣団の重鎮鎌倉御家人比志島氏の庶家川田氏が領していました。

堂園の供養塔群は壮大な二基の層塔と数基の大きな五輪塔（比志島川田氏の先祖賴重栄尊盛資と刻むものと含む）角石塔婆、笠塔婆その他数十基の小五輪塔からなっています。

この供養塔群の中にある永仁五年（一二九七）の刻文のある縦一二〇センチ、横三三センチの角石の供養塔は向って左側のほぼ中央にあって、上部は欠損していますが梵字が刻まれて、四面に文字が読れます。永仁五年に川田氏の祖盛資が父栄尊の菩提をとむらうために造立したものです。

これらの供養塔群は鎌倉期から室町期に及ぶ遺跡、遺物として中世の信仰思想を知る貴重なものであります。中世の金石文の典型として価値あるものです。



宝篋印塔

花尾神社境内に丹後局・僧永金の墓をはじめ數十基に及ぶ石塔群があります。

一、丹後局の墓（多宝塔）壬印・神号や安貞元年十二日の刻字があり、よく整った多宝塔ですが、これは多分近世に建てられたものと思われます。

この多宝塔の右下方に「御苔石」と言われ、昔から安産の御守りに表面对し削りとられた石塔がありますが、これがもともとの丹後局の墓塔ではない

## 花尾神社境内の墓塔群 (町文化財指定)

（町文化財指定）

花尾神社境内の墓塔群

いかと推量されます。  
二、宝篋印塔五輪塔群

の左奥永金の墓の右側に、  
一永徳四年（一三八四）  
甲子卯月廿五日当山座主

大禪師影相延善の字や、  
塔身台石に梵字を刻んだ  
宝篋印塔があります。

宝篋印塔が破損してしま  
が、特徴のある美しい原  
型を保ち、年代的藝術的  
に秀れたものです。

三、一石五輪塔その他の昭和五四年石塔研究家黒田清  
光氏により、境内地から発見され現在地に移し建て  
たもので田の神の元祖と言われ貴重なものです。

四、月輪塔（ガチリン塔）一元徳元年八月吉日、快  
逆修（一三二九）の刻字があり、鎌倉末期の古いもの  
です。無縫塔の構造と似ており上部の塔身が円板状であることが特徴です。



丹後局の墓

## 郡山町の歴史の概説

八重岳の山腹から弥生土器が出るから、ずいぶん古代からこの土地にも人が住んでいたと思われる。

おそらくとも九世紀の後半には比於岐の郡が設置され、郡の役所がわが郡山に置かれた。

その場所は郡山中学校の少し南、小字満家原のあたりと考えられる。郡の役所には租税の米が収納される倉庫が附属していた。その倉庫を院と呼んだ。

後になって日置郡の地域に数ヶ所院が設置され、夫々その土地の名を院の名とした。イスの地に造られた院はイス院（伊集院）と呼ばれ、郡山の郡役所に附屬して建っていた元からの院も、その土地の名をとつて満家院と呼ばれるこことになった。

ところがいつの間にか倉庫の名まえが、その倉庫に税を納める人々が住んでいる地域の名になってしまった。

旧郡山町の地域から、鹿児島市比志島町及び小山田町を含めて、戦国時代までこの地域は満家院と呼ばれた。

郡の役人を郡司と云い、院を管理する役人を院司と云う。

鎌倉時代のはじめ、建久八年（一一九五）に作られた「建久図田帳」によると、満家院には百三十町歩の田地があり、その支配者は満家郡司葉平である。この頃になると院司はほとんど郡司と称した。郡司の方が院司よりも位が一級高かったからである。

この葉平は加治木を支配していた加治木八郎親平の三男で、満家院の内東侯、小山田、比志島、河田、西侯の地を父から譲られ、満家左近将監資宗とも称した。親平の長男恒平は加治木と満家院のうちの郡山を譲られた。恒平はまた次男良平に郡山を譲ったので、良平は郡山弥三郎と名のり、郡山氏の祖となつた。

葉平（資宗）の子幸満は承久之乱に参加して行方知れずになつたので、その領地と満家院郡司職は幸満の姉妹の嫁ぎかかつたからである。

先である大隅の税所氏に与えられた。そして更にそのうち比志島、川田、西侯その他若干の地は幸満の姉に贈られ、その子比志島重賢が領するようになる。重賢（榮尊）は西侯を次男西侯弥三郎盛忠に、河田を三男河田右エ門尉盛佐に、前田を四男前田又四郎義永に、辺牟木を五男辺牟木又五郎義隆に夫々管理せしめた。このうち比志島氏河田氏のみが長くその土地を保つた。

比志島重賢は源頼朝には従兄弟にあたる村上頼重の子どもであつたから、比志島氏は頼朝の庶子と伝えられる島津忠久の子孫島津本家には一貫して忠義を捧げた。

重賢の長男祐範、その子時範及び河田盛佐等は弘安四年の元寇に出陣し、偉勲を立て、その驍勇は天下に証された。島津貢久が伊作家より出て本家を継ぎ、島津氏十五代の大守となると、比志島氏は一族を挙げてその三州統一に協力する。川田駿河守義朗は島津氏の軍師として九州制霸に活躍し、比志島國貞は家老として秀吉の島津征伐庄内之乱関ヶ原敗戦等の島津氏浮沈の危機に際し、よく島津藩の命脈を維持し、名声が高かつた。

徳川時代にはいると満家院のうち郡山、川田、油須木、西侯、東侯、厚地の六ヶ村をもつて郡山郷とし、島津藩の直轄地として地頭を置いて支配した。地頭は最初の頃は現在の役場の地に地頭仮屋を建て、ここで郷内の行政を総覽したが、後には住地に赴任せ、行政は、曇・組頭、横目などの職に任命された土地の郷士が執行した。これらの職に任せられるのは、木場、山口、竹内、肥後、郡山、白坂等郡山郷で名家と云われる家の出身者に限られた。

右六ヶ村の石高は五六八〇石前後で、この高を生産する田畠は五三八町歩ほどであった。

明治維新に際しては、伊集院郷と一個小隊を編成し、慶応四年一月、半隊長肥後善右衛門率いられ、三十余名が出陣して大坂の警固に当つた。なお番兵となつて奥羽に出陣した者もあつた。

鹿児島県 日置郡  
郷山町全図

S = 1:10,000



《資料4》

## 郡山町の地名

(大字名)	(小字数)
岳	36
有屋田	33
西俣	53
郡山	159
油須木	32
厚地	137
東俣	82
川田	49

昭和63年11月23日

鹿児島地名研究会

郡山(1)

地名数 246

地名	よみ	大字	門名	初出その他
青木ヶ丸	あおきがまる	郡山町郡山	美西西山郡	ささのじや
赤崩	あかくずれ	郡山町郡山	田川西山郡	あきえざきや
赤仁ヶ谷	あかにがたに	郡山町東俣	山鹿西山郡	あさくわ
赤畠	あかはた	郡山町厚地	豊原西山郡	あきえざきや
秋吉	あきよし	郡山町厚地	田川西山郡	あせゅさや
秋吉	あきよし	郡山町東俣	豊原西山郡	あせゅさや
悪谷	あくたに	郡山町岳	山鹿西山郡	えむじや
麻ヶ迫	あさがさこ	郡山町厚地	田川西山郡	あそびや
厚地	あつち	郡山町の大字	山鹿西山郡	あいえざきや
穴釜	あなかま	郡山町厚地	山鹿西山郡	こちけや
錨	あぶみ	郡山町郡山	田川西山郡	あじけや
錨	あぶみ	郡山町東俣	山鹿西山郡	あじけや
安美世	あみぜ	郡山町油須木	山鹿西山郡	うきのけや
蟻迫	ありさこ	郡山町郡山	木原城西山郡	うめいねおけや
有島	ありしま	郡山町東俣	山鹿西山郡	らいえぞのや
蟻ノ元	ありのもと	郡山町厚地	美東西山郡	うめいねぞのや
有屋田	ありやた	郡山町の大字	山鹿西山郡	ひじのや
案ノ山	あんのやま	郡山町郡山	木原城西山郡	ひじのや
井穴ヶ宇都	いあながうと	郡山町東俣	山鹿西山郡	いおぬえうべ
井川迫	いかわさこ	郡山町郡山	山鹿西山郡	いなみさこ
池田	いけだ	郡山町厚地	山鹿西山郡	いけみさや
池田	いけだ	郡山町郡山	田川西山郡	いせう
池ノ迫	いけのさこ	郡山町厚地	山鹿西山郡	おちみや
池ノ迫	いけのさこ	郡山町西俣	山鹿西山郡	おちみや
池ノ平	いけのひら	郡山町郡山	山鹿西山郡	おちみや

池ノ元	いけのもと	郡山町厚地	石谷門	( ま ) 111 285
石ヶ丸	いしがまる	郡山町有屋田		
	いしたにかど	郡山町厚地	石谷門	
石ノ元	いしのもと	郡山町西保		
	いちうえもん	郡山町川田	市右ヱ門	
市木	いちき	郡山町郡山		
	いちざえもん	郡山町郡山	市佐衛門	
一里山	いちりやま	郡山町厚地		
一町田	いっちょうだ	郡山町有屋田		
一町田	いっちょうでん	郡山町岳		
出水田	いづみた	郡山町厚地		
井手上	いでうえ	郡山町川田		
	いでうえかど	郡山町郡山	井手上門	
井手迫	いでさこ	郡山町郡山		
井手下	いでした	郡山町川田		
井手下	いでした	郡山町郡山		
井手ノ元	いでのもと	郡山町郡山		
	いではらかど	郡山町油須木	井手原門	
	いのうえかど	郡山町郡山	井上門	
	いのうえかど	郡山町東保	井上門	
井ノ尻	いのしり	郡山町郡山		
	いまかみべっぷ	郡山町厚地	今上別府門	
今田ヶ原	いたがはら	郡山町郡山		
	いまむらかど	郡山町岳	今村門	
伊良ヶ谷	いらがたに	郡山町郡山		
井料	いりょう	郡山町有屋田		
岩崎	いわさき	郡山町厚地		
岩崎	いわさき	郡山町郡山		
岩崎	いわさき	郡山町西保	岩崎門	

岩下	いわした	郡山町厚地	田川門	山郡	さで	土守
岩瀬戸	いわせど	郡山町厚地	田川門	山郡	さで	土守
岩竹	いわたけ	郡山町西保	田川門	山郡	さじゆうで	廻游守
岩間ヶ迫	いわまがさこ	郡山町郡山	田川門	山郡	ハシラで	廻游守
岩元	いわもと	郡山町川田	田川門	山郡	ひじゆで	廻游守
上園	うえぞの	郡山町郡山	山郡	山郡	うえゆゑ	田木守
	うえのかど	郡山町郡山	山郡	山郡	うちゆふぞ	坂や兵
	うえのかど	郡山町西保	山郡	山郡	おなぬじるで	山や兵
上ノ原	うえのはる	郡山町油須木	山郡	山郡	おなごうひで	末上
上ノ山	うえのやま	郡山町川田	山郡	山郡	こうせで	末上
右近ヶ迫	うこんがさこ	郡山町東保	山郡	山郡	けいみは	断大
兎田	うさぎた	郡山町郡山	山郡	山郡	みねさば	廻游大
兎山	うさぎやま	郡山町有屋田	山郡	山郡	くねみは	月火
牛ヶ迫	うしがさこ	郡山町有屋田	山郡	山郡	さひきさは	平日
牛ヶ丸	うしがまる	郡山町厚地	山郡	山郡	くわは	増大
牛ヶ丸	うしがまる	郡山町東保	山郡	山郡	くわは	日大
後ヶ迫	うしろがさこ	郡山町岳	山郡	山郡	こむは	日大
後ヶ迫	うしろがさこ	郡山町東保	山郡	山郡	こむは	日大
後平	うしろひら	郡山町郡山	山郡	山郡	こむは	日大
臼田	うすた	郡山町厚地	山郡	山郡	くじまは	興大
	うちかど	郡山町岳	山郡	山郡	くじまは	興大
内木場	うちこば	郡山町岳	山郡	山郡	くじまは	興大
打添	うちぞえ	郡山町東保	山郡	山郡	くじまは	興大
内無シ	うちなし	郡山町郡山	山郡	山郡	くじまは	興大
	うちまちかど	郡山町東保	山郡	山郡	くじまは	興大
内待畠	うちまちはたけ	郡山町東保	山郡	山郡	くじまは	興大
	うちむらかど	郡山町川田	山郡	山郡	くじまは	興大

宇土	うと	郡山町川田	郡山町川田	おと	不吉
宇都	うと	郡山町油須木	郡山町油須木	うと	戸端桜
宇都頭	うとかしら	郡山町東俣	郡山町東俣	うとかしら	御前
宇都久木田	うとくきた	郡山町厚地	郡山町厚地	うとくきた	御前
宇都原	うとばい	郡山町岳	郡山町岳	うとばい	御前
馬屋尻	うまやしり	郡山町厚地	郡山町厚地	うまやしり	元吉
梅木ヶ丸	うめきがまる	郡山町郡山	郡山町郡山	うめきがまる	御前
梅木田	うめきた	郡山町郡山	郡山町郡山	うめきた	御前
椅ヶ迫	うるしがさこ	郡山町郡山	郡山町郡山	うるしがさこ	御前
椅ヶ山	うるしがやま	郡山町郡山	郡山町郡山	うるしがやま	御前
	うわとこかど	郡山町厚地	郡山町厚地	うわとこかど	上床門
上床	うわとこ	郡山町厚地	郡山町厚地	うわとこ	御前
大池	おおいけ	郡山町郡山	郡山町郡山	おおいけ	御前
大浦原	おおうらはる	郡山町郡山	郡山町郡山	おおうらはる	大浦門
大貝	おおかい	郡山町郡山	郡山町郡山	おおかい	御前
扇平	おおぎひら	郡山町厚地	郡山町厚地	おおぎひら	御前
大久保	おおくぼ	郡山町岳	郡山町岳	おおくぼ	御前
大迫	おおさこ	郡山町厚地	郡山町厚地	おおさこ	御前
大迫	おおさこ	郡山町厚地	郡山町厚地	おおさこ	御前
大迫	おおさこ	郡山町西俣	郡山町西俣	おおさこ	御前
大迫	おおさこ	郡山町東俣	郡山町東俣	おおさこ	御前
大鹿	おおしか	郡山町岳	郡山町岳	おおしか	御前
大杉	おおすぎ	郡山町岳	郡山町岳	おおすぎ	御前
大園	おおその	郡山町岳	郡山町岳	おおその	御前
大園	おおぞの	郡山町郡山	郡山町郡山	おおぞの	御前
	おおぞのかど	郡山町東俣	郡山町東俣	おおぞのかど	大園門
大谷	おおたに	郡山町川田	郡山町川田	おおたに	御前
大谷口	おおたにくち	郡山町川田	郡山町川田	おおたにくち	御前
大谷尻	おおたにしり	郡山町郡山	郡山町郡山	おおたにしり	御前

大谷山	おおたにやま	郡山町郡山	郡山町郡山	おおたにやま	御前
大谷平	おおたにひら	郡山町郡山	郡山町郡山	おおたにひら	御前
大谷	おおたに	郡山町岳	郡山町岳	おおたに	御前
大坪	おおつぼ	郡山町川田	郡山町川田	おおつぼ	御前
	おおつぼくだだ	郡山町郡山	郡山町郡山	おおつぼくだだ	大坪久田門
大登ラ	おおどら	郡山町厚地	郡山町厚地	おちゆふ	御前
大中尾	おおなかお	郡山町郡山	郡山町郡山	おおなかお	御前
大野	おおの	郡山町厚地	郡山町厚地	おおの	御前
	おおひらかど	郡山町厚地	郡山町厚地	おおひらかど	大平門
大平	おおひら	郡山町西俣	郡山町西俣	おおひら	御前
大開	おおびらき	郡山町厚地	郡山町厚地	おおびらき	御前
	おおふちわきか	郡山町東俣	郡山町東俣	おおふちわきか	大淵脇門
近江ヶ宇都	おおみがうと	郡山町郡山	郡山町郡山	おおみがうと	御前
尾形尾	おがたお	郡山町郡山	郡山町郡山	おがたお	御前
沖宮田	おきみやた	郡山町油須木	郡山町油須木	おきみやた	御前
小倉	おくら	郡山町西俣	郡山町西俣	おくら	田端川口
小倉頭	おくらかしら	郡山町西俣	郡山町西俣	おくらかしら	御前
尾崎	おざき	郡山町有屋田	郡山町有屋田	おざき	御前
	おざきかど	郡山町厚地	郡山町厚地	おざきかど	尾崎門
落平	おちひら	郡山町川田	郡山町川田	おちひら	御前
乙ヶ山	おとがやま	郡山町油須木	郡山町油須木	おとがやま	御前
鬼ヶ迫	おにがさこ	郡山町東俣	郡山町東俣	おにがさこ	御前
	おばらかど	郡山町厚地	郡山町厚地	おばらかど	小原門
	おばらかど	郡山町郡山	郡山町郡山	おばらかど	小原門
迫呂ノ段	おろのだん	郡山町郡山	郡山町郡山	おろのだん	御前
海江田鼻	かいえだはな	郡山町郡山	郡山町郡山	かいえだはな	御前
柿ヶ丸	かきがまる	郡山町岳	郡山町岳	かきがまる	御前
柿木迫	かききざこ	郡山町東俣	郡山町東俣	かききざこ	御前
柿木平	かきのきひら	郡山町郡山	郡山町郡山	かきのきひら	御前
	かきのきざこ？	郡山町郡山	郡山町郡山	かきのきざこ？	田端川

柿元	かきもと	郡山町川田	山道	山郡	まちのくみよ	山谷大
神楽迫	かぐらさこ	郡山町西俣	山道	山郡	さるみよ	平谷大
柏木ヶ谷	かしわぎがたに	郡山町厚地	山道	山郡	かしわぎ	谷大
片平田	かたひらた	郡山町川田	山道	山郡	かたひら	野大
	かたひらかど	郡山町東俣	山道	片平門	かたひら	
楮ヶ迫	かっかさこ	郡山町東俣	山道	山郡	かっか	賀大
勝目玉	かつめだま	郡山町郡山	山道	山郡	かつめ	頭中大
門貫	かどぬき	郡山町郡山	山道	山郡	かどぬき	門大
門貫	かどぬき	郡山町西俣	山道	山郡	かどぬき	門大
門松	かどまつ	郡山町東俣	山道	山郡	かどまつ	北ノ口
門松	かどまつ	郡山町油須木	山道	山郡	かどまつ	北ノ園
鎌ヶ迫	かまがさこ	郡山町東俣	山道	山郡	かまがさ	北ノ俣
鎌迫	かまざこ	郡山町有屋田	山道	山郡	かまざこ	北村
上今田	かみいまた	郡山町郡山	山道	山郡	かみいまた	桐木口
上岩戸	かみいわと	郡山町厚地	山道	山郡	かみいわと	久木田
上川原田	かみかわはらだ	郡山町東俣	山道	山郡	かみかわはらだ	草原
上ノ丸	かみのまる	郡山町郡山	山道	山郡	かみのまる	楠元
上牧原	かみまきはる	郡山町有屋田	山道	山郡	かみまきはる	崩ヶ迫
上宮	かみみや	郡山町岳	山道	山郡	かみみや	口ノ坪
上宮田	かみみやた	郡山町岳	田川	宮田門	かみみやた	九日田
	かりあつまりが	郡山町厚地	大庭門	狩集門	かりあつまりが	櫟木迫
狩俣	かりまた	郡山町東俣	山道	山郡	かりまた	
仮屋浦田	かりやうらた	郡山町東俣	山道	山郡	かりやうらた	
	かりやかど	郡山町東俣	山道	仮屋門	かりやかど	
仮屋園	かりやぞの	郡山町有屋田	山道	山郡	かりやぞの	
川添	かわぞえ	郡山町厚地	山道	山郡	かわぞえ	
川添	かわぞえ	郡山町有屋田	山道	山郡	かわぞえ	
川田	かわた	郡山町の大字	山道	山郡	かわた	
川原田	かわはらだ	郡山町川田	山道	山郡	かわはらだ	

川原崎	かわはらさき	郡山町東俣	山道	山郡	かわはらさき	門大
川畑迫	かわばたさこ	郡山町川田	山道	山郡	かわばたさこ	郡山町
川平	かわひら	郡山町厚地	山道	山郡	かわひら	郡山町
川平	かわひら	郡山町郡山	山道	山郡	かわひら	郡山町
川山	かわやま	郡山町郡山	山道	山郡	かわやま	郡山町
賀クナキ	がくなき	郡山町西俣	山道	山郡	がくなき	郡山町
	きたかど	郡山町有屋田	山道	山郡	きたかど	北門
北ノ口	きたのくち	郡山町郡山	山道	山郡	きたのくち	北門
北ノ園	きたのその	郡山町西俣	山道	山郡	きたのその	北門
北ノ俣	きたのまた	郡山町厚地	山道	山郡	きたのまた	北門
北原	きたはら	郡山町郡山	山道	山郡	きたはら	北門
北俣	きたまた	郡山町有屋田	山道	山郡	きたまた	北門
北村	きたむら	郡山町厚地	山道	山郡	きたむら	北門
桐木口	きりきくち	郡山町郡山	山道	山郡	きりきくち	北門
	くええかど	郡山町郡山	山道	山郡	くええかど	九右衛門
久木田	くきた	郡山町厚地	山道	山郡	くきた	九右衛門
草原	くさばる	郡山町西俣	山道	山郡	くさばる	九右衛門
楠元	くすもと	郡山町東俣	山道	山郡	くすもと	九右衛門
崩ヶ迫	くずれがさこ	郡山町西俣	山道	山郡	くずれがさこ	九右衛門
口ノ坪	くちのつぼ	郡山町東俣	山道	山郡	くちのつぼ	九右衛門
九日田	くにちでん	郡山町厚地	山道	山郡	くにちでん	九右衛門
櫟木迫	くぬぎさこ	郡山町東俣	山道	山郡	くぬぎさこ	九右衛門
	くぼかど	郡山町郡山	山道	山郡	くぼかど	久保門
	くぼかど	郡山町油須木	山道	山郡	くぼかど	久保門
久保迫	くぼさこ	郡山町東俣	山道	山郡	くぼさこ	久保門
久保迫	くぼさこ	郡山町油須木	山道	山郡	くぼさこ	久保門
久保田	くぼた	郡山町郡山	山道	山郡	くぼた	久保門
久保原	くぼたかど	郡山町厚地	山道	山郡	くぼたかど	久保門
	くぼはら	郡山町郡山	山道	山郡	くぼはら	久保門

					御嶽川				
久保山	くぼやまかど	郡山町厚地	久保山門	久保山門	御嶽川				
	くぼやま	郡山町厚地			御嶽川				
熊ヶ尾	くまがお	郡山町油須木			御嶽川				
熊ヶ瀬戸	くまかせと	郡山町郡山			御嶽川				
倉谷	くらたに	郡山町川田			御嶽川				
栗木ヶ宇都	くりきがうと	郡山町川田			御嶽川				
栗下	くりした	郡山町郡山			御嶽川				
	くりすかど	郡山町油須木	栗須門		御嶽川				
黒岩	くろいわ	郡山町郡山			御嶽川				
黒瀬戸	くろせと	郡山町川田			御嶽川				
黒田	くろだ	郡山町有屋田			御嶽川				
黒仁田	くろにた	郡山町東保			御嶽川				
桑木田	くわきた	郡山町厚地			御嶽川				
桑北	くわきた	郡山町郡山			御嶽川				
桑ノ迫	くわのさこ	郡山町油須木			御嶽川				
桑原田	くわはらた	郡山町厚地			御嶽川				
桑原田	くわはらだ	郡山町郡山			御嶽川				
外戸ノ口	けどのくち	郡山町郡山			御嶽川				
毛ナシ尾	けなしお	郡山町郡山			御嶽川				
鶴ノ巣	こうのす	郡山町郡山			御嶽川				
小浦原	こうらはる	郡山町郡山			御嶽川				
郡山	こおりやま	郡山町の大字			御嶽川				
国蔵田	こくぞうでん	郡山町厚地			御嶽川				
小宮司免	こぐしめん	郡山町東保			御嶽川				
小坂ノ上	こさかのうえ	郡山町川田			御嶽川				
小坂ノ元	こさかのもと	郡山町郡山			御嶽川				
	こじょうかど	郡山町東保	小城門		御嶽川				
小長田	こながた	郡山町有屋田			御嶽川				
小長田	こながた	郡山町郡山			御嶽川				

					御嶽川				
小原	こはら	郡山町東保			御嶽川				
木場田	こばた	郡山町川田			御嶽川				
木場田	こばた	郡山町西保			御嶽川				
小原	こばる	郡山町川田			御嶽川				
小保	こまた	郡山町郡山			御嶽川				
小松ヶ尾	こまつがお	郡山町郡山			御嶽川				
小松ヶ迫	こまつがさこ	郡山町東保			御嶽川				
小丸山	こまるやま	郡山町厚地			御嶽川				
小水取	こみずとり	郡山町郡山			御嶽川				
小牟田	こむた	郡山町郡山			御嶽川				
米ノ山	こめのやま	郡山町厚地			御嶽川				
米ノ山頭	こめのやまから	郡山町厚地			御嶽川				
小山下	こやました	郡山町岳			御嶽川				
小山ノ尻	こやまのしり	郡山町川田			御嶽川				
	ころもだにかど	郡山町厚地			御嶽川				
小早稲田	こわせだ	郡山町西保			御嶽川				
郷戸	ごと	郡山町厚地			御嶽川				
権現山	こんげんやま	郡山町厚地			御嶽川				

## 郡山(2)

地名数 176

地名	よみ	大字	門名	初出その他
催ヶ迫	さいがさこ	郡山町郡山		
坂口	さかぐち	郡山町西保		
	さかぐちかど	郡山町厚地	坂口門	
	さかぐちかど	郡山町東保	坂口門	
坂元	さかもと	郡山町東保		
桜木	さくらぎ	郡山町郡山		
迫田	さこだ	郡山町川田		
笹尾	ささお	郡山町厚地		
笹ノ段	ささのだん	郡山町郡山		
笹原田	ささはらた	郡山町西保		
鰐ヶ平	さばがひら	郡山町西保		
猿内	さるうち	郡山町東保		
	さんええもん	郡山町郡山	三右衛門	
三蔵塚	さんぞうつか	郡山町東保		
三反ヶ丸	さんたんがまる	郡山町厚地		
三反田	さんたんだ	郡山町郡山		
雜津ヶ山	ざっつがやま	郡山町東保		
塩田原	しおたはる	郡山町厚地		
志賀ノ元	しがのもと	郡山町西保		
下宮田	したみやた	郡山町岳	宮田門	
志梨	しなし	郡山町郡山		
篠浦	しのうら	郡山町郡山		
篠浦頭	しのうらかしら	郡山町郡山		
芝ヶ迫	しばがさこ	郡山町東保		
柴立	しばたて	郡山町有屋田		

柴立	しばたて	郡山町郡山	
柴立	しみずかど	郡山町西保	清水門
下石坂	しもいしさか	郡山町厚地	
下川原田	しもかわはらだ	郡山町川田	
下川原田	しもかわはらだ	郡山町東保	
下小野	しもこの	郡山町郡山	
	しものかど	郡山町郡山	下之門
下牧原	しもまきはる	郡山町有屋田	
	しらいしかど	郡山町東保	白石門
白石原	しらいしはる	郡山町厚地	
白薄	しらうす	郡山町油須木	
白水川	しらみずかわ	郡山町川田	
白水谷	しらみずたに	郡山町西保	
白山迫	しろやまさこ	郡山町厚地	
	しんかいかど	郡山町厚地	新海門
新川	しんかわ	郡山町郡山	
	しんじろう	郡山町川田	新次郎
神舞歌	しんぶか	郡山町郡山	
城	じょう	郡山町川田	
城ノ迫	じょうのさこ	郡山町郡山	
城ノ下	じょうのした	郡山町有屋田	
浄土平	じょうひら	郡山町郡山	
	すえよしかど	郡山町厚地	末吉門
	すえよしかど	郡山町油須木	末吉門
菅牟田	すがむた	郡山町郡山	
涼松	すずみまつ	郡山町川田	
須田ノ木	すたのき	郡山町厚地	
砂田	すなた	郡山町厚地	

砂走	すなばしり	郡山町東俣	山田	アスホシ	立
巣山	すやま	郡山町郡山	山田	アスホシ	立
諏訪宇土	すわうと	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
	すわだかど	郡山町西俣	諏訪田門	カセヤシ	通
	すわはらかど	郡山町郡山	諏訪原門	カセヤシ	通
諏訪原	すわはる	郡山町川田	山田	カセヤシ	通
諏訪脇	すわわき	郡山町有屋田	山田	カセヤシ	通
瀬越	せごし	郡山町厚地	山田	カセヤシ	通
瀬越	せごし	郡山町東俣	山田	カセヤシ	通
	せせかど	郡山町川田	瀬瀬門	カセヤシ	通
瀬戸	せと	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
瀬戸口	せとくち	郡山町厚地	山田	カセヤシ	通
	せとぐちかど	郡山町郡山	瀬戸口門	カセヤシ	通
瀬戸谷	せとたに	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
前見	ぜみ	郡山町厚地	山田	カセヤシ	通
	ぜんいちろう	郡山町川田	善一郎	カセヤシ	通
	ぜんしろう	郡山町川田	善四郎	カセヤシ	通
	そのだかど	郡山町厚地	園田門	カセヤシ	通
	そのだかど	郡山町郡山	園田門	カセヤシ	通
雑田	ぞうた	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
高井野	たかいの	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
鷹尾	たかお	郡山町川田	山田	カセヤシ	通
高屋	たかお	郡山町西俣	山田	カセヤシ	通
高尾	たかお	郡山町東俣	山田	カセヤシ	通
高ゲタ	たかげた	郡山町油須木	山田	カセヤシ	通
高村	たかつき	郡山町有屋田	山田	カセヤシ	通
鷹ノ巣	たかのす	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通
鷹巣	たかのす	郡山町東俣	山田	カセヤシ	通
鳴ノ上	なきのうえ	郡山町郡山	山田	カセヤシ	通

滝ノ上	たきのうえ	郡山町岳		
滝ノ宇都	たきのうと	郡山町郡山		
滝ノ下	たきのした	郡山町岳		
岳	たけ	郡山町の大字		
	たけかど	郡山町岳	嶽門	さざなみの入門
竹迫	たけざこ	郡山町郡山		さざなみ
竹下	たけした	郡山町厚地	竹下門	みたけの入門
竹下	たけした	郡山町西俣		みたけのゆまた
竹下	たけした	郡山町油須木		みたけのゆすぎ
	たけのしたかど	郡山町厚地	竹之下門	たけのしたの入門
竹山	たけやま	郡山町郡山		たけやまの入門
田代	たしろ	郡山町厚地		たしろの入門
立平	たちひら	郡山町東俣		たちひらの入門
辰バミ	たつばみ	郡山町西俣		たつばみの入門
立迫	たてさこ	郡山町郡山		たてさこの入門
立迫	たてさこ	郡山町油須木		たてさこの油須木
立山	たてやま	郡山町郡山		たてやまの郡山
	たなかかど	郡山町厚地	田中門	たなかかどの田中門
	たなかかど	郡山町郡山	田中門	たなかかどの田中門
	たなかかど	郡山町東俣	田中門	たなかかどの東俣
棚田	たなた	郡山町厚地		たなたの郡山
谷	たに	郡山町岳		たにの岳
	たにくちかど	郡山町郡山	谷口門	たにくちかどの谷口門
谷口田	たにくちた	郡山町西俣		たにくちたの西俣
谷口	たにぐち	郡山町東俣		たにぐちの東俣
	たにぐちかど	郡山町厚地	谷口門	たにぐちかどの谷口門
田吹野	たふきの	郡山町厚地		たふきの厚地
	たぶちかど	郡山町東俣	田淵門	たぶちかどの田淵門
灰ヶキ	たんけき	郡山町岳		たんけきの岳

大師山	たいしやま	郡山町厚地	山田町厚地	木の山	土八郎			てらみつかど	郡山町厚地	寺光門	コタヤマ 木の山
大丸	だいまる	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			てらやかど	郡山町厚地	寺屋門	木の山
大丸	だいまる	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎			天神田	郡山町川田		木の山
段ノ岡	たんのおか	郡山町東俣	山田町東俣	木の山	土八郎			天神平	郡山町郡山		木の山
地浦	ちうら	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎			でみっかど	郡山町郡山	出水門	木の山
茶園	ちゃえん	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			平	郡山町岳		木の山
	ちゅうえもん	郡山町郡山	仲衛門	木の山	土八郎			塔迫	郡山町東俣		木の山
	ちょうえもん	郡山町郡山	長衛門	木の山	土八郎			塔ノ迫	とうさこ		木の山
地蔵免	ぢぞうめん	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			塔ノ迫	とうさこ		木の山
地蔵免	ぢぞうめん	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎			塔ノ峯	とうのみね		木の山
地頭江	ぢとうえ	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			通山	とおりやま		木の山
陣ノ平	ぢんのひら	郡山町川田	山田町川田	木の山	土八郎				ときわかど	郡山町郡山	常葉門
月方	つきかた	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			常磐原	ときわばら	郡山町郡山	
佃	つくた	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎			常磐山	ときわやま	郡山町郡山	
辻ノ下	つじのした	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎				とくだかど	郡山町厚地	徳田門
辻ノ堂	つじのどう	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎				とくだかど	郡山町油須木	徳田門
坪木ノ元	つぼきのもと	郡山町厚地	山田町厚地	木の山	土八郎				とくながかど	郡山町有屋田	徳永門
坪久田	つぼくた	郡山町郡山	大坪久田門	木の山	土八郎				とくながかど	郡山町油須木	徳永門
坪迫	つぼさこ	郡山町東俣	山田町東俣	木の山	土八郎			森木	とどろき	郡山町郡山	
賦合	つもりあい	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			鳶岡	とびおか	郡山町西俣	
賦合	つもりあい	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎				とよむらかど	郡山町西俣	豊村門
露ヶ山	つゆがやま	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			鳥居ヶ迫	とりいがさこ	郡山町郡山	
鶴丸	つるまる	郡山町有屋田	山田町有屋田	木の山	土八郎			鳥居ヶ原	とりいがはら	郡山町川田	
団師	づし	郡山町郡山	山田町郡山	木の山	土八郎			鳥井ヶ原	とりいがはら	郡山町東俣	
	てらくびかど	郡山町東俣	寺首門	木の山	土八郎			鳥ヶ野	とりがの	郡山町郡山	
寺田	てらた	郡山町油須木	山田町油須木	木の山	土八郎			鳥越	とりごえ	郡山町郡山	
寺田	てらだ	郡山町有屋田	山田町有屋田	木の山	土八郎			堂ヶ原	どうがはら	郡山町西俣	
寺田	てらだ	郡山町西俣	山田町西俣	木の山	土八郎				どうぞのかど	郡山町川田	堂園門
寺ノ平	てらのひら	郡山町西俣	山田町西俣	木の山	土八郎			堂田原	どうだはら	郡山町東俣	

郡山(3)

地名数 153

地名	よみ	大字	門名	初出その他
中尾	なかお	郡山町厚地		ひちめい
	なかかど	郡山町岳	中門	ひちめい
中木場	なかこば	郡山町岳		ひちめい
中迫尻	なかさこしり	郡山町厚地		ひちめい
中島	なかしま	郡山町厚地		ひちめい
	なかぞのかど	郡山町川田	中園門	ひちめい
	なかぞのかど	郡山町郡山	中園門	ひちめい
	なかぞのかど	郡山町東俣	中園門	ひちめい
中玉	なかたま	郡山町東俣		ひちめい
中津川	なかつかわ	郡山町厚地		ひちめい
	なかのかど	郡山町油須木	中之門	ひちめい
中ノ迫	なかのさこ	郡山町郡山		ひちめい
中ノ原	なかのはら	郡山町厚地		ひちめい
中原	なかはら	郡山町有屋田		ひちめい
中原	なかはら	郡山町川田		ひちめい
中原	なかはら	郡山町郡山		ひちめい
	なかはらかど	郡山町厚地	中原門	ひちめい
中原山	なかはるやま	郡山町郡山		ひちめい
中福良	なかふくら	郡山町郡山		ひちめい
中方限	なかほうぎり	郡山町油須木		ひちめい
中牟田	なかむた	郡山町郡山		ひちめい
中村	なかむら	郡山町厚地		ひちめい
中村頭	なかむらかしら	郡山町厚地		ひちめい
	なかむらかど	郡山町郡山	中村門	ひちめい
中山	なかやま	郡山町郡山		ひちめい

永井原	なかよしかど	郡山町郡山	中吉門	
永江	ながいばる	郡山町郡山	大	
	なかえ	郡山町郡山	みよ	洛
永迫	ながさこ	郡山町厚地	達也	中
長迫	ながさこ	郡山町郡山	昌也	木
長迫	ながさこ	郡山町東保	五郎也	木中
永嶋廻	ながしままわり	郡山町東保	ひじき	良中
	ながたかど	郡山町厚地	ひじき	良中
	ながたかど	郡山町油須木	永田門	昌中
長野	ながの	郡山町厚地	志	昌中
長畑	ながはた	郡山町厚地	志	昌中
永山	ながやま	郡山町郡山	王	中
永山	ながやま	郡山町東保	王	中
梨木迫	なしきさこ	郡山町東保	田	中
梨木野	なしきの	郡山町岳	茄子	田門
	なすびたかど	郡山町厚地	田	門
夏木	なつき	郡山町厚地	七ヶ所	門
	ななかしょかど	郡山町東保	七ヶ所	門
ナメリ	なめり	郡山町厚地	さお	門
奈良木	ならき	郡山町東保	さお	門
	にいどめかど	郡山町郡山	新留	門
	にしかど	郡山町川田	西	門
西迫	にしさこ	郡山町厚地	西園	門
	にしそんかど	郡山町郡山	西	門
西ノ瀬戸	にしのせと	郡山町郡山	さ	門
西保	にしました	郡山町の大字	さ	門
	にしむらかど	郡山町西保	西村	門
二重滝	にじゅうたき	郡山町郡山	志	中
仁田原	にたばる	郡山町郡山	志	中

仁田牟礼	にたむれ	郡山町郡山	さかわき	山
二反田	にたんた	郡山町西保	さかわき	山
二本松	にほんまつ	郡山町有屋田	さかわき	山
仁連木	にれき	郡山町郡山	さかわき	山
貫ノ鼻	ぬきのはな	郡山町郡山	さかわき	山
祓水	ぬきみず	郡山町郡山	さかわき	山
野首	のくび	郡山町川田	さかわき	山
野坂	のさか	郡山町郡山	さかわき	山
野下原	のしたはる	郡山町郡山	さかわき	山
能登呂	のとろ	郡山町郡山	さかわき	山
野中田	のなかた	郡山町厚地	さかわき	山
野中田	のなかた	郡山町西保	さかわき	山
登り尾	のぼりお	郡山町厚地	さかわき	山
登り尾	のぼりお	郡山町郡山	さかわき	山
榎ヶ切口頭	はぜがきりくちら	郡山町厚地	さかわき	山
榎ヶ切口	はぜがきりくち	郡山町厚地	さかわき	山
榎ヶ丸	はぜがまる	郡山町郡山	さかわき	山
榎ヶ山	はぜがやま	郡山町厚地	さかわき	山
榎良ヶ迫	はぜらがさこ	郡山町郡山	さかわき	山
畠田	はたけだ	郡山町東保	畠中門	山
	はたなかかど	郡山町東保	畠中門	山
八反田	はちたんだ	郡山町岳	みさき	山
花尾	はなお	郡山町厚地	みさき	山
鼻面	はなづら	郡山町厚地	みさき	山
早馬	はやま	郡山町郡山	みさき	山
払木場	はらいこば	郡山町厚地	みさき	山
	はらぐちかど	郡山町厚地	原口門	山
	はらそのかど	郡山町西保	原園門	山
原田	はらだ	郡山町東保	原	山

馬場ヶ原	はらだかど	郡山町西保	原田門	井手	井手	平田	ひらた	郡山町有屋田	ひらるふ	川	
番田	ばんた	郡山町東保		今人	田丸	平田	ひらた	郡山町郡山	さひのさみ	平八郎	
樋掛	ひかけ	郡山町厚地		まん	船木	平田	ひらた	郡山町西保	さひのさみ	朝邑源	
光り迫	ひかりさこ	郡山町東保		まく	木匠	平ノ城	ひらのじょう	郡山町西保	ちまへ	木賀源	
	ひがしかど	郡山町川田	東門	まく	農人	平原	ひらはる	郡山町川田	ちまへ	木辺源	
	ひがしかど	郡山町岳	東門	まく	木野	平原	ひらはる	郡山町西保	ひおひな	道ヤ南坂	
	ひがしかど	郡山町東保	東門	まく	首	平原	ひらばる	郡山町厚地	さく	木辺源	
東迫頭	ひがしさこれら	郡山町厚地		まく	櫻	樋渡	ひわたし	郡山町油須木	さく	木辺源	
	ひがしさかど	郡山町厚地	東座門	まく	櫻不智	笛ヶ迫	ふえがさこ	郡山町郡山	若字	木辺源	
東迫	ひがしざこ	郡山町厚地		まく	田中	笛吹	ふえふき	郡山町郡山	ひまく	木辺源	
東谷	ひがしたに	郡山町油須木		まく	田中	深谷	ふかたに	郡山町郡山	さそひ	木辺源	
東原	ひがしばる	郡山町岳		まく	田中	吹ヶ迫	ふきがさこ	郡山町厚地	さそひ	木辺源	
東平	ひがしびら	郡山町西保		まく	田中		ふくたかど	郡山町郡山	さそひ	木辺源	
東保	ひがしまた	郡山町の大字		まく	田中		ふくどめかど	郡山町東保	ふく	木辺源	
彼岸田	ひがんた	郡山町厚地		まく	田中		ふくどめかど	郡山町油須木	ふく	木辺源	
肘金	ひじがね	郡山町郡山		まく	田中		ふくながかど	郡山町厚地	ふく	木辺源	
樋ノ迫	ひのさこ	郡山町郡山		まく	田中		ふくながかど	郡山町郡山	ふく	木辺源	
日ノ丸	ひのまる	郡山町厚地		まく	田中		ふくもとかど	郡山町厚地	ふく	木辺源	
雲雀田	ひばりでん	郡山町有屋田		まく	田中		ふくもとかど	郡山町油須木	ふく	木辺源	
百ヶ木場	ひゃくがこば	郡山町厚地		まく	田中		ふくやまかど	郡山町東保	ふく	木辺源	
	ひゃくざえもん	郡山町川田	百左之門	まく	田中		藤ヶ尾	ふじがお	ふく	木辺源	
百田	ひゃくた	郡山町郡山		まく	田中		藤ヶ山	ふじがやま	ふく	木辺源	
百田	ひゃくた	郡山町東保		まく	田中		布施野	ふせの	ふく	木辺源	
平石原	ひらいしはら	郡山町東保		まく	田中		二ツ石	ふたついし	ふく	木辺源	
	ひらかど	郡山町岳	平門	まく	田中			ふちがみかど	郡山町東保	ふく	木辺源
開き	ひらき	郡山町西保		まく	田中			ふちわきかど	郡山町東保	ふく	木辺源
平木場	ひらこば	郡山町岳		まく	田中			淵脇迫	ふちわきさこ	ふく	木辺源
平迫	ひらさこ	郡山町西保		まく	田中			淵脇田	ふちわきた	ふく	木辺源
				まく	田中			太ラケ宇都	ふとらがうと	ふく	木辺源

たらがうと?

古川	ふるかわ	郡山町東保		
古ノ平	ふるのひら	郡山町郡山		
風呂神	ふろのかみ	郡山町厚地		
辺保木	へぼき	郡山町川田		
辺保木	へぼき	郡山町西保		
別府ヶ原	べっぷがはら	郡山町有屋田		
	ほうしゃくかど	郡山町西保	宝尺門	
	ほうしゃくかど	郡山町油須木	宝尺門	
ホキヶ山	ほきがやま	郡山町郡山		
堀切	ほりきり	郡山町油須木		
堀ノ内	ほりのうち	郡山町有屋田		
	ほりのうちかど	郡山町西保	堀之内門	

## 郡 山 (4)

地名数

87

地名	よみ	大字	門名	初出その他
前石迫	まえいしaco	郡山町岳	山居門	ささごの山居
前坂	まえさか	郡山町厚地	山居門	さかの山居
前迫	まえさこ	郡山町厚地	山居門	さちおの山居
前迫	まえさこ	郡山町東保	山居門	さきの山居
	まえそのかど	郡山町郡山	前園門	まへの山居
前田	まえだ	郡山町厚地	山居門	まへの山居
前田	まえだ	郡山町郡山	山居門	まへの山居
前田	まえだ	郡山町岳	山居門	まへの山居
前田	まえだ	郡山町油須木	山居門	まへの油須木
前田	まえだ	郡山町川田	山居門	まへの川田
前田	まえた	郡山町西保	山居門	まへの西保
前田	まえた	郡山町東保	山居門	まへの東保
前畠	まえはた	郡山町岳	山居門	まへの岳
前原	まえはら	郡山町有屋田	山居門	まへの有屋田
前原	まえはる	郡山町厚地	山居門	まへの厚地
曲段	まがりだん	郡山町厚地	山居門	まへの曲段
牧之角	まきのかど	郡山町有屋田	山居門	まへの有屋田
牧ノ口	まきのくち	郡山町油須木	山居門	まへの油須木
	まさえもん	郡山町郡山	正右衛門	まさえもん
松尾	まつお	郡山町郡山	山居門	まつお
松尾	まつお	郡山町油須木	山居門	まつお
松尾迫	まつおさこ	郡山町厚地	山居門	まつおさこ
松尾田	まつおた	郡山町厚地	山居門	まつおた
松ヶ迫	まつがさこ	郡山町厚地	山居門	まつがさこ
松崎	まつざき	郡山町厚地	山居門	まつざき

松下	まつした	郡山町厚地	類呼典	( 1 ) 111 212	南平	みなみびら	郡山町厚地	東山門	西山門	北山門	山森
	まつながかど	郡山町厚地	松永門	まつ		養田	みのた	郡山町油須木	西山門	北山門	山森
松原	まつながかど	郡山町郡山	松永門	まつ	宮切ヶ迫	みやきりがさこ	郡山町厚地	東山門	西山門	北山門	山森
	まつのうちかど	郡山町郡山	松之内門	まつ		宮迫	みやさこ	郡山町厚地	東山門	西山門	北山門
松葉迫	まつはら	郡山町厚地	山森	まつ	宮迫	みやじかど	郡山町油須木	東山門	西山門	北山門	山森
	まつばさこ	郡山町西俣	山森	まつ		宮田	みやぞのかど	郡山町川田	東山門	西山門	北山門
松本	まつもと	郡山町有屋田	山森	まつ	宮田	みやた	郡山町厚地	東山門	西山門	北山門	山森
	まとば	郡山町郡山	山森	まつ		宮田	みやた	郡山町川田	東山門	西山門	北山門
マナ板	まないた	郡山町厚地	山森	まつ	宮田	みやた	郡山町東俣	東山門	西山門	北山門	山森
	まのむれ	郡山町厚地	山森	まつ		宮田	みやだ	郡山町有屋田	東山門	西山門	北山門
丸岡	まるおこ	郡山町東俣	山森	まつ	宮田	みやだ	郡山町西俣	東山門	西山門	北山門	山森
	まるやま	郡山町厚地	山森	まつ		宮ノ迫	みやのさこ	東山門	西山門	北山門	山森
丸山原	まるやまはる	郡山町厚地	山森	まつ	宮ノ脇	みやのわき	郡山町厚地	東山門	西山門	北山門	山森
	まわたし	郡山町厚地	山森	まつ		宮山	みややま	東山門	西山門	北山門	山森
見上り	みあがり	郡山町厚地	山森	まつ	妙見ヶ宇都	みょうけんがうと	東山門	西山門	北山門	山森	
	みあがりさか	郡山町厚地	山森	まつ		向江原	むかえはる	東山門	西山門	北山門	山森
水堀	みずくぼり	郡山町郡山	山森	まつ	向ヶ迫	むこうがさこ	東山門	西山門	北山門	山森	
	みずぐち	郡山町西俣	山森	まつ		向ヶ原	むこうがはら	東山門	西山門	北山門	山森
水ノ手	みずのて	郡山町郡山	山森	まつ	牟田	むすびまつかど	東山門	西山門	北山門	山森	
	みぞうえ	郡山町川田	山森	まつ		牟田	むた	東山門	西山門	北山門	山森
溝下	みぞした	郡山町川田	山森	まつ	村ノ下	むらのした	東山門	西山門	北山門	山森	
	みちがさこ	郡山町厚地	山森	まつ		村前	むらまえ	東山門	西山門	北山門	山森
道ヶ迫	みちした	郡山町郡山	山森	まつ	餅ヶ尾	もちがお	東山門	西山門	北山門	山森	
	みちぞえ	郡山町厚地	山森	まつ		餅ヶ川	もちがかわ	東山門	西山門	北山門	山森
水ヶ迫	みっがさこ	郡山町東俣	山森	まつ	餅ヶ丸	もちがまる	東山門	西山門	北山門	山森	
	みつがはら	郡山町西俣	山森	まつ		持立ヶ尾	もちたてがお	東山門	西山門	北山門	山森
満ヶ原	みつさこ	郡山町郡山	山森	まつ	元山王	もとやまおう	東山門	西山門	北山門	山森	
	みともた	郡山町東俣	山森	まつ		間伏谷	もふしたに	東山門	西山門	北山門	山森
南迫	みなみさこ	郡山町厚地	山森	まつ	百石	ももいし	東山門	西山門	北山門	山森	
	ごくでん?		まつ	もとさん		もとさん	まぶした	まぶした	もとさん	もとさん	

桃木迫	ももきさこ もりぞのかど もりみつかど	郡山町東保 郡山町郡山 郡山町厚地	森園門 盛満門	
森山	もりやま	郡山町川田		

郡山(5)

地名数 6

地名	よみ	大字	門番名	初出その他
禰ヶ迫	やけがさこ	郡山町郡山	山郡山郡	なまくら
屋舗川内	やしきかわうち	郡山町郡山	山郡山郡	なまくら
柳ヶ迫	やなぎがさこ	郡山町有屋田	山郡山郡	なまくら
柳ヶ迫	やなぎがさこ	郡山町岳	山郡山郡	なまくら
柳ヶ迫	やなぎがさこ	郡山町西俣	山郡山郡	なまくら
柳ヶ下	やなぎがした	郡山町岳	山郡山郡	なまくら
柳ヶ丸	やなぎがまる	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
柳ヶ丸	やなぎがまる	郡山町東俣	山郡山郡	なまくら
柳ヶ丸	やなぎがまる	郡山町西俣	山郡山郡	なまくら
柳迫	やなぎさこ	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
柳田	やなぎた	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
柳田	やなぎた	郡山町東俣	山郡山郡	なまくら
	やなぎたかど	郡山町厚地	柳田門	なまくら
	やなぎたかど	郡山町郡山	柳田門	なまくら
柳ヶ丸	やなっがまる	郡山町油須木	山郡山郡	なまくら
矢檜	やひつ	郡山町東俣	山郡山郡	なまくら
山後	やまうしろ	郡山町油須木	山郡山郡	なまくら
山口田	やまくちた	郡山町西俣	山郡山郡	なまくら
山下	やました	郡山町東俣	山郡山郡	なまくら
山下	やました	郡山町油須木	山郡山郡	なまくら
山田	やまだ	郡山町東俣	山郡山郡	なまくら
山ノ内頭	やまのうちかしら	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
山ノ内尻	やまのうちしり	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
山ノ口	やまのくち	郡山町厚地	山郡山郡	なまくら
山ノ口	やまのくち	郡山町岳	山郡山郡	なまくら

山ノ口	やまのくち	郡山町油須木	透澤	( 二 ) 山	山	
山ノ田	やまのた	郡山町川田				
山伏田	やまふした	郡山町川田	透澤	山	山	
山道	やまみち	郡山町有屋田				
山屋敷	やまやしき	郡山町東俣	透澤	山	山	
山ノ神坂	やまんかんさか	郡山町厚地	透澤	山	山	
雪降り	ゆきふり	郡山町岳	透澤	山	山	
雪元	ゆきもと	郡山町岳	透澤	山	山	
雪元	ゆきもと	郡山町西俣	透澤	山	山	
油須木	ゆすぎ	郡山町の大字	透澤	山	山	
袖木ヶ谷	ゆのきがだに	郡山町油須木	透澤	山	山	
袖迫	ゆのきざこ	郡山町厚地	透澤	山	山	
袖木谷	ゆのきたに	郡山町厚地	透澤	山	山	
袖木水流	ゆのきつる	郡山町郡山	透澤	山	山	
湯屋原	ゆやはる	郡山町東俣	透澤	山	山	
弓場ヶ原	ゆんばがはら	郡山町東俣	透澤	山	山	
横海道	よこうみみち	郡山町東俣	透澤	山	山	よこかいどう？
横瀬	よこせ	郡山町厚地	透澤	山	山	
横瀬	よこせ	郡山町川田	透澤	山	山	
横畠	よこはた	郡山町郡山	透澤	山	山	
横道	よこみち	郡山町厚地	透澤	山	山	
横山	よこやま	郡山町厚地	透澤	山	山	
	よしながかど	郡山町厚地	透澤	吉永門	吉永門	
	よしまつかと	郡山町油須木	透澤	吉松門	吉松門	
	よしみつかと	郡山町岳	透澤	吉満門	吉満門	
吉牟田	よしむた	郡山町郡山	透澤	吉内入山	吉内入山	
	よしむらかど	郡山町有屋田	透澤	吉村門	吉村門	
	よしむらかど	郡山町西俣	透澤	吉村門	吉村門	
四ツ合	よつあい	郡山町東俣	透澤	吉内入山	吉内入山	

よねくらかど	郡山町厚地	米倉門	
よねながかど	郡山町郡山	米永門	
よねまるかど	郡山町油須木	米丸門	
六角田	ろっかくでん		
論ヶ迫	ろんがさこ	郡山町厚地	
和田	わきもとかど	郡山町厚地	脇元門
蕨ノ久保	わらべのくぼ	郡山町厚地	

# 地名研究会報

第24号

平成元年6月4日

鹿児島地名研究会

I. 第24回例会 平成元年3月5日(日)

於教職員互助組合会館

(出席者) 青柳俊二・池田信夫・小川亥三郎・片岡八郎・唐鍊祐祥・桐野利彦・浜崎盛雄

肥後芳尚・平田信芳・松田 誠・山口静也・山崎盛隆(計12名)

II. 豊藩名勝考読会 P.73~P.78

(問題となった地名および事項) 配流の島・トカラとタカラ・姫姫国・臥蛇島・悪石島

## 配流の島

平田 問題にしたい地名があったら出して下さい。小川先生、しばらくでした。先生は島に長くおられたのですが、七島まで行かれたことがござりますか。

小川 宝島には行きました。

平田 この豊藩名勝考を読んでいますと、これらの島々に罪人が流されているのですが、そんな言い伝えがあるのですか。

小川 現在は、そうは言わない。

平田 もう忘れてますか。

小川 聞きませんでした。硫黄島はあるらしいけど。

## 「トカラ」と「タカラ」

浜崎 トカラ島の「ト」が、タカラ島の「タ」になると書いてありますが、タ・チ・ツ・テ・トの間でそのように母音が変化する法則みたいなものがありますか。例えば、万葉集の甲類・乙類と言ったような。

平田 そんな解釈は、どうも。タカラはタカラであって、トカラと――

浜崎 いや、ここにはそう、「ト」が「タ」に变成了と書いてある。

平田 そのように説明してありますけど、白尾国柱の説が。

浜崎 というのは、私は頴娃町出身ですが、例の「衣評」、これが「頴娃郡」に変りますが、「衣」から「頴娃」にはならないという説があります。川内の「可愛」、あれは同じ甲類で変り得る。ヤ行とワ行の関係で、「衣」は「頴娃」につながらないはずだと。そんな説があるのですが、よく判らないので、音韻の変化と地名の関係を知りたいのですが

平田 その辺のことは全然知りません。トカラについては、もう一つ中央アジアにもトカラ(トクハラ)という地名があり、東洋史の人たちも、こちらのトカラを何故トカラというのか注目しているのですが、昔から解けてないわけです。トカラとタカラが通じるのだというのが白尾国柱の説ですが、別なものだろうと思いますが。

浜崎 今ひとつ、白尾国柱の説で、薩摩に姫姫国というのが出て来ましたね。

平田 姫姫国は75ページの下の段の3行目です。

浜崎 姫姫国は、岩波の古典全書ですか、あれの解説を見ると、あの人たちは、薩摩国の阿多じゃなくて、屯倉があったのは安芸国、いわゆる広島のどっかだと説明している。頴娃の郷土史には、姫姫のイニエノサトというのが、頴娃の発祥だと書いてあるわけです。岩波の古典全書は安芸国だという。安芸と薩摩と何かつながりがあったのか。

平田 姫郷とか佐多とか長田とか、そういった呼び名の土地は多かったと思うのです。だから、この姫郷が安芸国のアタなのか、薩摩の旧名の阿多なのか。最近では、これはあまり分析しませんからよく判りませんが、今問題にしている75ページの右から3行目の姫郷は薩摩国の中世地名のアタでしょうね。この文章で用いている姫郷の意味は、安芸国の中世地名のアタじゃないと思います。

浜崎 姫郷国というのは、安芸国にあった屯倉を言っているんだと、そう言ったような岩波の解説があり、白尾国柱の説は薩摩国の中世地名の「イニエノサト」であって、薩摩国の中世地名の「イニエノサト」がいわゆる頬張だ。まあ、そういうことを頬張の郷土史には書いてあるのですが。

平田 ああ、そうですか。

浜崎 何しろ、昔のことで、どうも申しわけないのですが。

平田 何でも結構ですから意見を述べて下さい。

#### 臥蛇島・悪石島

平田 臥蛇島（がじゃじま）。そこに蛇がうようよおるんだとか。悪石島（あくせきじま）なんて名前はあまり良い名前じゃないんですけどね。だけど、悪い名前を付けるということは、まじないの意味もあったんでしょうかね。それから、本当に臥蛇はヘビのジャ（蛇）なんだろうか。悪石（あくせき）なんだろうか、その漢字の意味の通りの漢音

で名前が付くとなると、そういう漢文の知識のあった人が名前を付けたことになるんですね。その意味で、臥蛇島とか悪石島とかいうのは、ちょっとおかしいなとは思うのですけどね。

松田 民俗の方から考えたら何か出て来るのじゃないでしょうか。

平田 島の方のことは知らないのだけど、臥蛇という島の名に一番近い単語は「ガジュマル」という木、赤生木のこと。「ガジャ」と「ガジュ」とは、何か近いような気がしますが。

今日読んだところで何かあったら、あとでまた出して下さい。ちょっと休憩しましょう。唐鑑先生の方に時間を割きましょう。

それから今日は会報23号まで出さなきゃならなかったんですけども、第22号まで作るのが精一杯でした。四月二十日すぎに出ることになると思いまが、南日本新聞が出す「たからシリーズ」という冊子の四月号を、地名研究会が依頼されました。月に一度、16ページの冊子が入って来ます。今月号は「野鳥」でしたが、以前「石の橋」とか「鹿児島の正月料理」とかのちょっとした読み物が出されています。地名研究会でその冊子を引き受けました。それを作るのに勢力をとられましたので、第23号は間に合いませんでした。次回にしますのでご諒承下さい。

### III 『鹿屋の中世地名』 唐鑑著

てしまつて、お許し下さい。

最初は、名とか方限とかいうのを考えたかったのですが、角川の地名辞典を見ますと、ああいうのはあまり載っていないんですね。あったんですけど、残っていないうです。明治18年頃から出た『工業

年報』というのには、かなり載っております。『工業年報』のコピーをちょっと探し出せず、急遽変えさせてもらいました。まあ、そういうことで「鹿屋の中世地名」と言っても、別にあまり考へてもおりませんので、窮屈の一策で雑なものです。

鹿屋文書十二の中に、鹿屋院雜掌兼信申状というのがあります。元徳二年（1330）の史料です。この時期は荘園の弁済使と地頭とが領地争いをする時期ですかね、そういう時期だと思うのですが。それで寄郡の役人の弁済使が、地頭が土地を横領しているということで、それを訴えた書状があります。その中に、田とか園とか原とか狩とか、横領された土地の名前がたくさん書いてあります。これについては五味先生の「島津鹿屋院考」という論文があり、大体の方向付がしてあります。それをもとに、考えてみました。これは角川の地名辞典を書く時に気付いたのですが、それをあげただけのことです。これは確か旧記雜録の巻十六に載っている史料です。

それで現在比定できる地名をあげてみると、大体、三十ぐらいの土地が比定できるのではないかと思っております。史料の番号の（1）ですが、私のパソコンではどうも縦に出すに、横にずーっとなっています。「ユーカラ」というソフトなんですが、私の操作ミスなんでしょうか。出してみたら、横になってしまいました。

最初の田貫社というのは前回問題になりました。七狩長田貫社というのですが、今の田崎神社。鹿屋高校のちょっと先、鹿屋工業との中間ぐらいの所にある、楠がある神社です。ちょうどその下は肝属川が流れています。肝属川は、舟熊（ふなぐま）という所まで、昔、舟がのぼったようです。それから先は溶結凝灰岩というのでしょうか、川底に岩が出ていて、小さな舟でも通えないような所になっています。まあ、この辺まで肝属川を利用した内陸水路交通の体系があったような気がします。それから

ちょっと西の方へ行くと、鹿屋駅があります。鹿屋駅の背後に小高い丘がありました。これは、もう、削りとられてしまいましたが、そこは通称「国司山」と云われて、昔はこの辺が鹿屋の中心だったんだろうと五味先生は推定しておられます。

3枚目に地図を入れておきました。これは鹿屋郷の明治前期の地名がこんなもんだったと思ってタベ描きました。一番下の方に田崎とあり、そこにやや大きな集落①とか⑤とありますが、このあたりが田崎神社のあるあたりです。それから北西の方に行きますと、船頭屋敷という所があります。田崎と船頭屋敷の中間ぐらいの所が鹿屋駅のあたりです。鹿屋駅後は、今度は市役所になります。その裏手に「国司山」があります。

（2）大窪田。地図の上から3ぐらいのところに大久保とありますが、ここだろうと思います。田圃の地名ですが、土地の人々は「オッボ」と言ったりします。「オオクボ」じゃなく「オッボ」と。昔はこんな字を書いたのかなあと思います。また、昔は大窪というものが村の名前であった時期もあります。『三国名勝図会』は、この大窪という名前を使っています。何回も行ってみましたが、塊村で非常に古い集落だなというのがよく判ります。下の方に水田があります。今は福岡とか大久保とか分かれています。この地図で下線を引いてある地名は大体中世の史料に載っている地名です。

馬庭田（まにわだ）。これは上谷にあります。中村というのは、中名だと思います。中名のところに祓川村か、と書いてあるのは間違いですね。祓川村を消して下さい。鹿屋の小字一覧は、誰が調べられたのか知りませんが、こういう地名は省いてあります。

先程、話に出ました、鹿屋駅のあたりに久木本市というのがあったんじゃないかなと思います。これは大隅国の中世の市場としては一番古いと五味先生は

書いておられます。久木本市（くきもといち）。史料に出て来る地名です。

下村（しもむら）は、下村→下名村→田崎村というふうな変遷があります。田崎村と明治十三年に改称されています。吾平と鹿屋が吾平郡になり、同じ郡役所の中に入つて吾平下名と鹿屋下名が隣合うことになります。下名が二つあるもんだから非常に分かりにくいということで、田崎村という地名が出来たわけです。同じように吾平にも上名があり、鹿屋上名もあってわざらわしいので、明治十三年に鹿屋上名を祓川に変えております。中世には、中村とか下村と言っておったのが、その後は「名」を使っております。その辺がどうもよく判りません。

それから楓田（えのきだ）、樋渡（ひわたし）。鹿屋合併の近くに橋がありますが、あの辺が樋渡という所になります。楓田というのは、上祓川です。

祓川、昔の上名。祓川には谷が三つあります。肝属川の最上流部に三つくらいがあるんですね。瀬戸があって、瀬戸の境目が上方限と下方限・中方限の境になるわけです。三段に谷底平野がありまして、その一番高い所を上方限と言つております。これが現在の上祓川になります。そして柚木という集落と田上（たがみ）という集落があります。土地の人は大字柚木、大字田上というふうに呼んでいます。

史料の（11）荻原、それから垣本（かきもと）という所。「垣」というのは、例の垣内集落の境を示すものかも知れません。寒水尻（うそっじり）。「うそっ」というのは涌水だと思います。古前城に和田山（わだやま）というのがありますが、この下に涌水があり、「うそっ」と呼んでいます。

それから「大曲」。これはちょうど鹿屋川が屈曲する所で、涌水があります。そこから川がぐーっと曲ってる所です。現在は王子町尾曲（おまがい）になります。尾曲という苗字もあります。北田（きただ）は北田です。（14）古世城は「古前城」（こせんじょう）と

読むのでしょうか。現在は古前城（こせんじょう）と言っていますけども、古くはこういうふうに書いています。

曾田（そだ）は、曾田町ですね。これは非常に興味をもちまして、調べてみました。地図のある資料をご覧下さい。笠野原台地の南西端にある段丘状になった所にあって、わりと隔離した感じですね、道路もあったかなかったりかで、作らなかったりして、古い様子がうかがえます。ちょうど、笠野原台地と鹿屋市街との中間ぐらいの所に開けた段丘面にある集落です。ここは、氏神が門ごとにあります。氏神様はいろんな神様が居つて非常に面白い所なんです。曾田という地名自体、面白い地名ではないかと思っています。それからクサカンムリの付いた「蘭」。瀬貫（せぬき）というのは、今でも祓川に瀬貫という集落があります。それから田崎弥藤太郎菌と書いてありますが、田崎という地名をとつて名乗ったのか、よく判りませんけども、田崎町に通用します。

それから郷原。「ごうはら」というのでしょうか、「ごうのはら」というのでしょうか。現在は郷之原（ごうのはら）町だ、と思います。

専当守重菌と書いてありますが、これは千堂屋敷というのがあります。これは、新栄町の、鹿屋駅の近くの町名ですけども、千堂屋敷と云われる屋敷が現在でも残っています。

野間尼菌。なんと云うんですか？アマ？ですか。これは鹿屋駅の裏に神田川という屈曲して作った池があつたんですが、あの辺を野間と云います。もう埋められていますが。この辺から、土器が出て来るそうです。

青木。青木町というのは戦前は遊廓街があった所ですが、今は青木町と云つても知らない人が多いのですけれども。

字面を合わせて推定しているだけじゃなくて、こ

の史料に書かれている地名が、大体、北から南へ並んでいるものですから、史料もそのように書かれているようですので、大体この辺じゃないかなと思っているところです。

笠野岩屋迫。笠野薬師というのがあり、それから出た地名かなと思います。和田新太郎菌とあります。これは先程出てきました古前城の和田山。白崎は白崎町、今の鹿屋高校のあるあたり。吉別府と云うのは高隈の一一番南、上祓川と下高隈の間の谷ですが、非常に雨の多い所です。高隈山にぶち当った雨雲が雨を降らせて、鹿屋川の上流を、肝属川の上流を作つたんじゃないかなと思いますけども。その谷にある別府。別府というのは莊園集落の一つだと思います。まあ、そういうことです。

それから「野原」。谷田（たんだ）というのがあります。堀之内（ほりのうち）というのもあります。樗木と書いて「おてっぱい」と。それから打馬（うつま）。横山というのは、厳密には大始良ですけども、その辺まで昔は鹿屋院になったのかなと、思つたりします。北の方では高隈に少し、吉ヶ別府に少し入り込んでおり、南の方では横山に入り込んでおりますから、昔の鹿屋院は後の鹿屋郷とすると少し広かったかなあという感じです。

「狩倉」。大炊平は大須平（おおすだいら）か。これは大捕町とあります。大須と捕と一緒にして大捕町となった所です。その一つが大須（おおす）という所なんです。郷之原（ごうのはい）のあたりです。浦・郷之原は暖かい所で、よく野菜を作つて鹿屋の町に売りに来よつた所です。

高牧（たかまき）というのは、いわゆる牧場・牧です。道路や堀を作りまして、牛じゃなくて、馬を囲つた所です。東大の史料編纂所に、福山の牧の絵があり、柵が設けられている様子がきれいに描かれています。

荒平（あらひら）というのは、今の高須の南の方

に磯天神というのがあり、現在は天神町になっています。昔は、荒平と云つていましたが、天神さんを祀つてるので、町名を変えたんだと思います。

まあ、こういうふうに中世の地名が約30位比定できるという、ただそれだけの話です。

それから三番目に、いろいろ読んでもらいたいと思った地名をあげておきました。史料のア・ですがどう読むんですか。

平田 加伊多。「かいだ」と違うの。

唐鑑 「かいだ」と読むのですか。えーと、吉ヶ別府に仮谷（かいだん）という所があるんですけども。そこかなあと、思つたりもしますが。イ・は「いたぶき」と読むんですか。

平田 上板吹（かみいたぶき）でしょうね。

唐鑑 「いたぶき」というのは？

平田 判らんな。

唐鑑 歯がゆいな。次は加津根（かつね）ですか

平田 「葛根（かつね）」でしょうね。

唐鑑 「かつね」ですか。

平田 あの葛（くず）の根。

唐鑑 ああ。その次は何と読みますか？

平田 始娘（あいら）と違うの？

唐鑑 「あいら」ですか。そうかなと、思つてはみたんですが。

平田 次は、雑色（ぞうしき）。

唐鑑 「ぞうしき」ですね。これは何だったのですかね。日本史に出て来ますね。役職の名前ですね。何をしたんですか。

平田 まあ、下働き。

唐鑑 これは、加那乃木（かなのき）と読むのですか。

平田 「かなのき」とは何ですか。そんな木があるんですか。

肥後 「かやのき」じゃないですか。

平田 「かやのき」、ははあ、書きちがい。

唐鑑 福定（ふくさだ）、得万（とくまん）。

平田 得万は人の名前にもとづく地名でしょう。

唐鑑 人の名前ですか。「建久団帳」なんかにも出て来る「莊」の名前とか「名」の名前とか。

平田 「名」の名前でしょう。「万徳」と違うの? 「得万」? 「万徳」というのは多いけど。「得万」というのは少ないんじゃないかな。あまり聞かない。

唐鑑 これは「得万」と書いてあります。コピーしたんですから。

平田 そんなら、「得万」でよいでしょう。「万徳・万得」の反対だろうな。

唐鑑 建久団帳なんかに出て来る云い方ですね。人の名前なんですか。

平田 そう。人の名前だと思いますよ。

唐鑑 その次のケ・は何ですか。

平田 うーん。福礼命婦（ふくれのみょうぶ）?

唐鑑 なんですかね。

平田 命婦（みょうぶ）と云うのは、宮廷に仕えた女官。

唐鑑 はあ。

平田 福礼という人が行ったわけでしょう。これは女性名じゃないかな。

唐鑑 これは名前ですか。「佐加利山」というのは何ですか。

平田 サガリヤマというのは、あそこにある。

唐鑑 サガリヤマですか。

平田 サガリヤマでしょうね。

肥後 栗野にある。

平田 栗野にありますよね。同じ地名が。

唐鑑 サ・は何ですか。

平田 皮籠（かわご）。皮籠石さんという人が居るでしょうが。

唐鑑 「かわごいし」さんは、「神」という字を書く「神護石（こうごいし）」——

平田 「皮籠」というのはね、皮で作った弁当箱があったわけ。それに似たところから来た地名でしょう。

唐鑑 石が付けば、違う?

平田 同じでしょう。「石」が付けば、皮籠の格好をした石ということでしょう。

唐鑑 いや、吹上には。城壁のまわりを囲った石を「こうごいし」と言うんじゃないですか。

平田 その「神籠石」は、また別だろう。もっと古い。

唐鑑 神籠石堀（こうごいしぶい）とかいう地名がありますよ。

平田 あってもいいと思うけど。えっ、本当?

唐鑑 あるんですよ。

平田 神籠石というのは、7世紀のもので、一体何の目的で作ったのか判らないと一時期言われたのが、北九州にあるんだよね。南九州にもある? えーそれは驚きだな。

唐鑑 いや、あってですね。地形図に載ってますよ。

平田 神籠石が?

唐鑑 はい。図幅は、加世田ですかね。

平田 加世田に?

唐鑑 加世田図幅ですかね。地形図は。

平田 ふーん。その次は紙漉（かみすき）だよね

唐鑑 はあ、「かみすき」でしょうね。こんなのは、どういうふうに地名を付けたのかなと思って。

平田 紙を漉いてたんでしょうね。紙を作つてたんでしょうね。実際に和紙を。

唐鑑 ああ。

平田 その次は「屎比利山（くそひりやま）」だろうな。クソヒリヤマ。

唐鑑 「クソヒリヤマ」でしょうね。ひどい名前ですね。（笑い）

平田 屁じゃいかんわな。クソヒリヤマ。

唐鑑 今あげた他にも、ずっと見て行くと、場所を推定できる地名とか、昔の地頭所のあたりとかいろんな名前が出て来たりしてですね。ところで、牛垣というのは何ですか?

平田 えっ?

唐鑑 牛垣。

平田 牛が出ないように垣根をするのでしょうか。馬垣（まがき）。馬の垣根がマガキ、マセガキ。

唐鑑 牛垣という地名が何回か出て来ますよ。

平田 牛を放牧してある所があって、それを垣根で囲ったわけでしょう。だから、牛垣になる。

唐鑑 この久木本（くきもと）というの、何ですか?

平田 「クキ」というのは、久木田——

唐鑑 鹿屋には久木田という地名なんか多いようですけど。

平田 「クキ」の意味が、まだぴんと来ない。

唐鑑 荒蒔田とか、一升蒔田とか、こういう地名は鹿屋には多いんですね。クサカンムリに時という字を書いて。

平田 一升蒔は一升の種子を蒔く広さ。荒蒔きはあらたに開いた「あらた」と「まきた」が複合した地名じゃないかなあ。うーん。まだ説明することができますか。

唐鑑 もう、ないです。

平田 ジャー、どんどん質問してください。

〔質疑応答〕

桐野 牛垣について。あんたも、今、あれを馬が通れんようにしたと言いましたね。馬垣（うまがき）とは言わないようですが。牛垣というの。

山崎 あれは、何とか言つんですけど、今ちょっと思い出せませんが。

桐野 名前はあるかね。馬垣という人の名前はないでしょう。

平田 曲垣平九郎という名前がありますよ。

桐野 マガキ? 十四。すけのそ思ふよ。

浜崎 マガキヘイクロウ。

桐野 いやね、あれは、笠野原の堀ですよね。何のヒラ堀とかいう。あの堀のまわりには、皆、土手を作つたわけよね。どの堀にも土手があった。あの土手は何の意味があったかということをね、地理の人が調べに来たことがあるんですよ。そして、私は尋ねに来た。あれはね、垣を作つて馬が出ないようにならんだろう、と。そげなことはなかと、私は言つた。ああいう所に、馬が出んように垣をするということは、昔はよくやつたもんじゃろうかね。

唐鑑 福山牧のあれは、きれいに垣根が描いてありますよ。絵図なんですけどね。

桐野 そいでよ。笠野原では、まわりを囲つた土手のことを、向うの方じゃ、堀とも言つておりますよ。「堀をつく」という言葉がある。堀を築くと。「堀をつく」というのは、今でも使つているんですよ。なにか、土手を作るという意味なんですよ。堀を作つて、その上にキンチク竹を植えたり、松の木を植えたりして、つまり風を防いだ。風を防ぐのが目的で、そうやつた。それが堀をつくと言つこと。それを馬が外に出るのを防いだんだと解釈した。そういう馬鹿なことがあるもんですかと、私は言つたんですがね。笠野原の土手すなわち堀を築いたのは、やっぱり、自分の領域を明確にするためであつたと、私は思つるんですよ。牛垣というのがあって、牛が出るのを本当に防いだもんじゃろかいね。

唐鑑 外から入つて来るのは?

桐野 何が入つて来る?

唐鑑 猪とか、ハハハハハハ。

桐野 そら、人間が入つて来つたのを防ぐことは、時にはあるかも知れん。笠野原にあるようなあれは入つて来るのは猪ばっかいやから。それで、それを作つたのは、馬を出さんようにしたということは、それはあるかも知らんけど、そもそもその目的はそい

じゃなかったと思うのです。四十町歩も五十町歩も開発するわけですからね。自分の領域を明確にした。自分の境を明確にすることには、いろんな工夫や努力をしたもんですと、私は古老から聞いたことがあるんですがね。しかし、東京辺りから来る偉そうな人はね、偉そうな格好をして言うんですよ、私に。馬が出るのを防いだ、と。私はそうは思わないのです。そういう所は、どこでんあっね。

唐録 これはですね。たまたま行ったら、崖を削った様子がきれいに断面に出とつですね。高牧に行くと、あっちこっちに、これはまだ残っていると、言やつですよ。

桐野 馬が出るのを防いだ、と。  
唐録 荘（おろ）とか荘之元（おろんもと）とかそういう地名が高牧には残っているんですよ。

桐野 牛は棒一本を置いとけば、そいから先にや行かんもんだったということは、古老からよく聞いたもんですよ、牛はね。しかし、馬ちうやつはね、やぞろしいやつやつでね、ちょっとやそこらじや越えるんじゃないいか、という気がするんですがね。馬は、なかなか思うように行かんじゃった。それから、お尋ねしたいのですが、これは弁済使と誰との争いですか。

唐録 地頭と。  
桐野 地頭と弁済使の争い。

唐録 はい。  
桐野 そいとですね。

唐録 弁済使が古くから居った人たちですから。  
桐野 弁済使が訴えたわけ？

唐録 はい、弁済使が訴えた。  
桐野 地頭を訴えた。

唐録 はい、地頭を訴えた。  
桐野 弁済使が地頭を訴えた。

唐録 はい。  
桐野 その中に地名が出て来るわけですね。

唐録 いや、その訴状に地名が出て来る。今あげた、この史料。

桐野 訴状に出て来る。

唐録 これは、その中心とかを書いたのが、まだ

あるんです。それは省いてあります。

桐野 いや、そいでね、私が聞きたいのは、その訴状に出て来る地名というものは、その当時人間が住んでたわけでしょうからね、その地名があるところの地名の分布をきっちと作ってね、それは水田と

どういう関係があつただろうかということを丹念に調べれば、一つの古代の開発の状況、その辺が開発されていたということが大体判るものだから、それ

と地形との関係をよく眺める必要がある。当時は水田が大事なんだから、水田になるような地名じゃつとか、どうか。それと、昔から疑問に思ってるのは吉ヶ別府よね。あんな所に、古代になんで、コッテウシの所へ、広いのがあるのにね、開発せにゃならんやつたろかい、と。だから、あれは古代のもんじゃつどかい、と思うわけよ。後世の人がね、ああいう、てげてげな名前を付けたんじゃないか。あげ

な辺鄙な、今でも辺鄙な山奥の中のね、ああいう所を古代において開発する必要がどこにあったんだろうか、という気がするんですけどね。鹿屋ん方からあがって行けば、一番奥でしょう。これはもう、分水嶺に達する所の手前だから。

唐録 下の方に行けば、古い神社があつたりしてかなり開けています。

桐野 下の方の、手前にずーっとくだる、と。

唐録 上祓川に行く前に、ちょっと高い段の所にですね、道路から中に入つて行くと、かなり開けた水田があるようですが。

桐野 いや、そりや、下の方に行けば。

唐録 あっちは、そうです。

桐野 大きな水田なんですけどね。だから、あの辺に別府という地名があつてもおかしくない。

唐録 いや、今、別府ち、言やれば、あたひげもまあ非常に小規模ですけど、平地は、水田はあることはありますね。

桐野 そりや、その当時を考えにゃいかんですからね。現在のものから考えるのじゃなくて、その当時の状況からみて、ないごて、と思うのです。本当に、別府の開発時代に開発したものだろうかという気がするんです。まあ、建久図帳にも東郷別府とか加世田別府とか出て来ますよね。やっぱい、水田地帯だからね。いい所なんですよ。しかしね、吉ヶ別府と言えばね、おかしいと思ってね。

唐録 しかし——

桐野 南薩台地もね、別府が沢山あるんですがねあれはね、まあ後から付けた地名が多いと私は思う

唐録 ただ、十三世紀にはあったんですね。

平田 これは十四世紀でしょう。

唐録 十四世紀には——

桐野 あった？

唐録 あったわけです。

平田 平安時代の終りでしょうからね。吉ヶ別府も民部省符とか太政官符というのをもらった開墾地でしょうから。そうですね、十二世紀ぐらいの開墾と考えてもいいんじゃないかな。そうしたら、十四世紀にそういう地名があつても不思議ではない。二百年ぐらいのものですよ、差は。

桐野 鹿児島県のね、開発がどういうふうに進展して行くか、ということを、私はちつとばっかい、知つるもんだから。古代のそんな時代に、あそこを開発する理由が判れば、納得できるんですよ。そんな所までね、開発せにゃならんような時代ではない、その当時はね。近世の開発にしても、これはよっぽど貧乏人がしたんやろう、と。抱地があの辺にあつたちうなら、これは判る。ところが、別府はね。この間の鹿大史学で、別府のことをいう人がありましたが、あれは誰な？別府のことを聞いたの

は、鹿大の先生ですか。

平田 さあ、知りません。

桐野 少なくとも古代の末期であるわけですからね。建久図帳に出て来るんだから。古代の末期ではあるわけですよね。そんな時代に、そげん辺鄙な所まで開発する何か特別な理由が、はっきりしたものがあれば、いいんですよ。

唐録 例えば？

桐野 鹿屋から祓川を通り、吉ヶ別府を通つて、ずーっと向うの方に抜ける古い交通路があったとかいうことがはっきりすれば、それは考えられるかも知れん。

唐録 あれは台地切れになってるんじゃないですか。鹿屋から抜ける道路は。

桐野 うん？

唐録 昔の高隈街道は、荒田（あだ）という所がありますね。祓川の所に。今、大きな橋がかかっている、陸橋がかかっている。あそこは荒田というんですけど、あそこからあがつて行きよつたということです。

桐野 古い時代の水田ちうのは、涌水とか、そういうのを頼つて開発しますから、非常に小規模だったような気がするんです。大きな涌水では、水が多すぎて手を付けがならんじゃつたという所もあるんでしょうね。だから、その頃の生活程度に応じた広さの所を開いたらうといふことが想像できるわけですけども。しかし、吉ヶ別府が本物の別府？別府にはそういう本物と、そうじゃないのが、後世のものがあることを私は知つるもんだから。

平田 しかし、吉ヶ別府はこれだけ出て来れば、本物じゃないですか。

桐野 本物の別府であれば、開発した当時のあの辺の開発状態と関連させて考える何かが必要。そして、私が考えているのは、鹿屋から吉ヶ別府を通つて向うの方に抜けられる街道が考えられれば良い。

あそこを抜ければ、それから先の恒吉や市成はずーっと開けて行くわけですよね。古代以来ね、大隅国一つの重要な街道が通っている所だった、と。そしたら、意味がある。

平田 肥後先生。先生は長く高隈に居られたのですが、肝付氏と島津が争った当時は、牛根境あたりに出て来るので、今問題になっている吉ヶ別府を通るんじゃないですか。

肥後 うーん、そうですね。もっと上方。

唐鑑 高須と大姶良。あの辺が肝付と島津の争いの舞台。

平田 いや。

唐鑑 氏久があそこに城を作ったのは、そのため平田 最後はね、貴久の時代ですね。島津貴久の弟の忠将が戦死するわけでしょう。廻城の攻防で。それで縁起が悪いと言って、「福山」と地名を変えるわけですね。だから、牛根の境が最後の攻防戦の地になったんじゃないかな。だから、あの辺がルートになるんじゃないかな。

肥後 うーん、ただ。

桐野 それが考えられるのはね、鹿屋・岩川の街道。これはね、やっぱり、古代から相当あるんではないかと思うんですよ。鹿屋・岩川間は。時代が下ると、鹿屋から笠野原を通るようになるんですよ。笠野原を通る街道が出来る。その以前の街道としてこれは可能性はあると、私は思うんですけどね。そういうことがあると、吉ヶ別府も意味がある。ただ、ちょっと、あの地形の所でね、吉ヶ別府、これは古代の開発でございますと云うても、私にはびんと来んわけです。問題は、交通とその時の開発状態をマッチさせにやいかん。鹿屋・岩川の街道と言えば、これは古代から相当重要性を持っていただろうと思うんですがね。その道路の要であったので要の場所を別府として開発せしめたという理由があると、納得できる。普通の開発の常識じゃね、ちょ

っと考えられない。あそこに行った時、こげな所にどうして別府があっどかいと思うたんですよ。あそこに、もう何度も行った。吉ヶ別府を通って高隈にはしょっちゅう行きよったんですよ。それから、あそこは涌水がほとんどないんだ、あそこは。吉ヶ別府は涌水もない。そういう所ですからね。水田を開いたということは、ちったあ、あいかわ知れんどん、そりゃ、そう簡単にはないところだ。

唐鑑 さっきも言いましたけど、あれから下におりてですね、ちょっと入って行くと、かなり開けた平地があって集落もかなりあるんですよ。

桐野 そりゃ、なんち部落。吉ヶ別府や？

唐鑑 まあ、吉ヶ別府ですね。

桐野 高隈に行く、あの細い道に、こげん所に、ないごてと思うて、涌水があっかどうか、聞いたけど、あそこ辺にはないと言った。

唐鑑 はあ。

桐野 道路沿いのあの辺にはね。下の方はちょっと一段低いでしょう。

唐鑑 はい、低い。

桐野 あの道路から、一段低いからね。あの辺に行けば涌水があっでしょうけど。そりゃ、笠野原よりも大きな台地をもつとのだから。

唐鑑 あそこ辺は養漁場をするぐらいの涌水があるんですよ。

桐野 うん、うん。

唐鑑 地名やら、まあこんなものを調べて、何になっとけと思ったりですね、こういうのを調べて、こういうのがあったということで、どんなふうに利用すればいいのか、というようなことなんです。それからが本当の話じゃないか、と思ったりで。

桐野 それでね。あんたのはね、中世の地名を出っしゃったでしょう。これは非常に良いと思うんですよ。それとね、地形を精密に調べて、水田化出来るような所に、その地名が何%ぐらいあるか。

弥生時代以後は、水田化出来るような所はどんどん開発されて行くというのは、これは常識だと思う。それで、中世の頃には言水田が開けていたんだ、と思う。入来院文書にも出て来る中世の地名を見るとやっぱい水のいい所なんですよ。それで、水田が開発されて来るのに、いい地形であるかどうかを見て行けばですね、水を求めて開発したんだというようなことが、よく分かって来るんじゃないかなと思う。

唐鑑 さっき言われたように、吉ヶ別府という、ああいう所に何故地名として残っているかと言うのは？

桐野 吉ヶ別府というのは、13世紀ごろからあっとでしょう。

唐鑑 14世紀から、まあ。

桐野 まあ、言えば、たいしたものなんだな。

唐鑑 それで、まあ、交通の要衝にあったからとか、そういうーーー

桐野 吉ヶ別府は、戦時中、空襲がある時に吉ヶ別府の上を飛んだとかなんとかいうようなことがよく言われたのではないか。それで、ちった有名になったんじゃないかな。私なんかの考える開発史上では、よく聞きますよね。それは14世紀のその頃にあったのだろうか。

唐鑑 史料には残っているわけです。

桐野 残っとる。それは、やっぱり、古かことは古かわけだ。しかし古い割には発展しちょらんないねえ。

唐鑑 はい。そうですね。

桐野 割合、ちょびっとした部落ですよ。古い割りには発展していないというのは、やっぱり、辺鄙だからですよね。

唐鑑 道路がですね。近世になると、祓川の所から上にあがって笠野原台地の一番西の橋をずっと通って、三角に出るようになっています。一部、その道路は残っていますけども、後はあそこは道路

からはずれたーーー

桐野 やはり、もとの幹線道路からは、はずれる。はずれていても、距離はいけんな。幹線道路からのーーー

唐鑑 距離は、シラスの崖がありますから、人が交通するのには非常に遠くなります。一時、幸侃が庄内に移った時に、あそこに、笠野原に道路を作っていますね。地名が残っているんです。幸侃道路というのが。

桐野 ああ、そうね。

平田 他に質問はありませんか。

山崎 今、水田の話が出てるのですが、「田」が付いている地名について、ちょっと解説してもらえないでしょうか。薩摩半島に住んでいると、大隅半島のことは、ちんぶんかんぶんで。例えば「田貫（たぬき）」とか瀬貫とかありますね。この「貫」とか権田とか権渡田とかーーー

唐鑑 「田」ですか、田はですねーーー

山崎 「田」の上に形容詞が付いているから、その形容詞のところを教えて欲しいのですが。

唐鑑 その「田」を抜いて、考えてもらっていいわけです。

山崎 はーー。だけど、その田圃を形容するために、上に形容詞なんかが付いているわけでしょう。上とか下とか。

唐鑑 地名ですよ、それは。

山崎 はーー。だから、その地名が。例えば、その、「田貫」とか、まあ「瀬貫」の方は「田」は付いていませんけど、その「貫（ぬき）」というのは何なんだろうか、ということなんです。権渡とか権渡田とあり、この権渡（ひわたし）は何だろうか。

(9) 柚木田、これは「ゆのき」と読むんですか。何と読むんですか。

唐鑑 (9) 番ですか、これはーーー

平田 「ゆのきだ」でしょう。

山崎 これは「えのきだ」ですか。

唐鑑 「ゆのきだ」

山崎 (7) と(9)は、読み方が一緒ですか。

平田 いや、違う。(7)番は「えのき」、(9)番は「ゆのき」。

山崎 「ゆのき」でしょう。だから、田圃をこういうふうに、いろんな形容詞で形容してるわけですよね。

唐鑑 いや、その申状の中に、この田圃は横領されたと、なんとか田圃は横領されたと、榎の田は横領されたとか、樋渡の田は横領されたとか。その田ですから、これは付けんでもよかったですけど。

山崎 いや、田圃の名前として付いているのだから。

唐鑑 付いているわけだから？

山崎 田圃の目印として。

唐鑑 それはもう、聞かれても判らんですよ。地名全体の話ですからね。一々聞かれててもね、判るわけないです。

平田 それは、そうだ。

浜崎 同じようなことですが。地名を調べる時に地名の由来とか、いつ頃出来たのか、年代が判れば一番いいんじゃないでしょうか。例えば、大窪田というのがありますね。私どもは「大窪」とか「久保」という地名は、いわゆる地形地名で、くぼんだ所を指すと考えて、その辺の田圃だろうと、そういうような由来を考えて現場を見たりするんですけれども。だから、ここはくぼんだから「窪田」というふうになったんだろう、と。まぁ、そういう何か、いわゆる由来みたいなものを教えてくれないか、というようなことなんですが。

唐鑑 だから、地名を調べる場合に最初はそんな所から入って行くわけですけれども。その地名を利用して、いろいろ歴史的に推測して行くという方法もあると思うんですがね。僕は、あんまり、地名の

由来を研究することよりも、地名をこういうふうな地名がこう——

浜崎 それから調べて行きますと、これは焼畠の跡だなあというようなことが判る。一作畠（いっさくばた）とか呼ばれるものは。

唐鑑 そういうものもありますよね。いわゆる文化地名とか地形地名とかあるでしょうけどね。

浜崎 だから、樋渡田とは何だろうか。いわゆる田圃に水を引くのに橋をかけて水を引いたのだろうかと言ったような疑問があるから。

唐鑑 まあ、樋渡と言えば、樋が渡ったからと説明すれば、それでいいかも知れませんが。

平田 竹を切って樋を作りますよね。樋が渡る所でしょうからね。

浜崎 箱樋（はこで）なんてのは、箱で樋を作った所。ところで、「蘭」の付くのが8つほどあります。これは現場を見て何か共通する地形の特徴があるのでしょうか。

唐鑑 ああ、蘭ですか。蘭はここに書いてあるように、蘭は畠ですよ。

浜崎 蘭は畠？

唐鑑 はい。これは、最初は税金がかからんのですね。律令時代は、田だけに税金がかかっていた。

浜崎 畠の場合はそうなっていたんですね。

唐鑑 それで、田圃があって、蘭があって。蘭は畠ですよ。

浜崎 私どもの所は、小さな小学校区に、十箇所「蘭」の付くのがあるんです。五領という所ですが

唐鑑 地形的には、そういうのは。

浜崎 川のそばで、何か神様の菜園地、野菜を植えた所じゃないかとか、いろんな話があつたりして地名から何かそんなことが探し出せないか、と。こういうような幼稚な質問ですが。

唐鑑 例えば、古い時代には水田だけに税金がかっていた。畠にはからなかった。だから、田と

その他は区別していた。「蘭」は水利上、台地の上とか水のかからん所に多く出て来る地名というふうに、私はずっと考えて来た。常識的に考えて来たのですけど。

山崎 「蘭田」はどうなるんですか。

平田 もともと蘭であったものを、田に変えたら蘭田になる。

唐鑑 灌溉して？ そういうことも考えられますけど、ちょっとね。

桐野 「蘭」というのは、畠にきっとのですか。

平田 畠とか果樹園とかですね。

桐野 そいでね、鹿児島の地名は「蘭」が多く出て来るでしょう。そこで、鹿児島は古い時代には水田よりは畠の方が多かったんだ、と。ある学者が来せえな、自治会館で、もう、おまんさま、日本的に有名な学者が来て、鹿児島はそうだと言う。鹿児島の風土は水田が出来るような風土じゃねと。そん風土はいけな風土な、おまんさまが言やつとはと、私は言いたかったけど、言わなかつたけども。それは非常に間違つるんですよ。それはね、歴史家はね、地形というものを考えんからいかん。それはね、私はちゃんと知ってるわけよ。大体ね、近世の享保の頃まではね、鹿児島も水田の方が多いのだから。それは今のように畠になって、それが多いというのはシラス台地が開発されて来たからなんですよ。享保の頃からね。享保の頃には、まあ半々以上に水田が多いという。これはもう全国的などこにでも見られる傾向で、鹿児島が水田が少なくて畠が多いという風土じゃありません、と。いくら学者だからと言って、てげてげなことを言うもんだと、私は思つるんですがね。まぁ、そんなことはないので現在のような状態から類推すれば、そのような考え方になります。こんどは、「蘭」と結び付けせえな、そいで畠を主張しやつとこいなんか、そりゃ滑稽ですよ。われわれから見れば滑稽じゃ。ないごと鹿児島では「蘭」が多いわけな？

唐鑑 台地が多いから。

桐野 台地が多い？ 「蘭」自体が台地じゃなくてあれは河岸段丘。河岸段丘、低地の。低い所の河岸段丘で、あれじゃないかと思つるんですが。シラス台地が開発されるのは、あれは享保以後ですよ。まぁ、もっとつきつめて行けば、天明の頃から、シラス台地の開発が進んで来る。天明と言えば、享保よっか先やな。

平田 今、先生の云われたことを、1万分1ぐらいの地図に、蘭と田圃を色で分けて行けば、はっきりするかも知れんね。

唐鑑 蘭という地名と田圃と、地名を調べて地形図に落として行けば。

桐野 今の蘭が当時の蘭の位置じゃんそかいなあ

平田 そんなに動かないのじゃないですか。

桐野 動かんでしょうね。

唐鑑 小字がたくさんありますよ。鹿屋にはそういう地名が。それを実際に場所とその地形を見比べて行くと、面白そうだと思ったんですがね。

桐野 そうですね。その「蘭」が水田化されて行く、江戸時代の言葉を使えば、いろいろな言い方をしてるようですがね。畠成田（はたなりた）か？ 畠成田とか、なんとか。あれは検地帳に出て来るから、畠成田。そういう言葉が出て来ますからね。そういうので、蘭を水田化して行くのは時代の方向だから、よく判るんですよね。歴史的事実を用いて蘭が水田になった、そういうような具体的な事実が欲しいわけよ。歴史的事実でもって確証して行くのが、一番強いですからね。

平田 これは、あれだね、ほんと。田圃が先で、畠が後と、きちんと分けてあるね。

唐鑑 狩倉（かりくら）って、何ですか？

平田 狩倉？

唐鑑 鹿倉（かくら）と同じなんですか。

平田 同じでしょう。

桐野 鹿倉と。

唐鑑 狩倉（かくら）と読むんですね、これは。

桐野 私は樋脇ですが、狩集（かりあつまり）を「かやつまり」という。「かやつまり」というわけよ。あれは、いけんでしょうかね。「かやつまり」とは何ですか？私は小さい時から「かやつまり」と聞きよった、「かやつまり」というふうに。今でも、「かやつまり」というかどうかは知りませんがね。「かやつまり」とは、ないじゃろかいねと、私も、今いろいろ考えますが、それは「狩集（かりあつまり）」じゃろうと、そげん思つたっがな。

唐鑑 鹿倉（かくら）というのは、近世では藩の官有林ですよね。あるいは狩猟をする獵場ですよね。あれは、あばてんね、あっですよ。

平田 たくさんある。島津どんがほとんど握っているから。

桐野 狩倉（かりくら）な。その倉（くら）ちうのは、何ちう意味やんそかい。場という意味やろかい。場所という意味やろかい。狩場のこと。

唐鑑 たくさんおっとこいという意味——

桐野 それで、狩集（かりあつまり）やっでな。狩が余計に出来る所じゅいかも知れんな。

唐鑑 苗字もありますね。狩集（かりあつまり）という。

桐野 うーん。

唐鑑 同級生にいました。

桐野 あっでしょうね。狩集（かりあつまり）という。

唐鑑 苗字が。

桐野 それで、あれは鹿児島語でいう「かやつまり」じゃっどかいな。あたいげん方じゅ「かやつまり」ち言うが。

平田 狩集（かやつまり）でしょうね。

桐野 「かやつまり」でしょうね。

平田 樋脇に「狩集」という集落があるでしょう

桐野 「かやつまり」というのがある。私の生まれたのは塔之原（とうのはら）ですけど、塔之原に狩集という所がある。小さい時から親がよく言うもんじゃったから憶えとるんですよ。今はあんまり聞かんけれども。

肥後 五味先生の「鹿屋院小考」ですが、これはいつ頃発表されたものでしょうか。

平田 鹿大史学の？

唐鑑 鹿大史学でなくてですね。

平田 鹿大史学でないの？

唐鑑 はい、1965年4月6日と書いてあるんです

肥後 小冊子になっているんですか。

唐鑑 これは全国的な本です。「日本歴史」かなんかじゃないかと思います。

肥後 「日本歴史」？

唐鑑 これは県立図書館に行かれたらありますから、コピーされたらと思います。それから、これは私が図書館に居る頃、地図を整理したもので。明治期の鹿児島の市街地図の代表的なものを見易いように整理したものです。この一覧表にあるものが代表的な地図じゃないかと思います。

桐野 これは非常によかったです。こういう整理されたものが図書館にあると、利用できる。現物そのもので、笠野原近辺の地図があるんですよ。いつ作ったかが判らん。いつと時代が判ると、あの集落がいつ出来たかということが判るんですがね。まぁ、われわれの知っている地名でないから、よほど調べなくてはね。恐らく藩政期のものじゃろうと私は思つるんですがね。

唐鑑 この成尾絵図とかを見れば、いろいろ面白いですね。鶴丸城がきれいに描いてある。

平田 県立図書館はそういうのを集めて集めればね、整理して。

桐野 それとね、県内にある絵図とか、各地にある古地図とかね、集めにゃいかん。やっぱいね、図書館には誰か、もっと地理の判る人が居るにゃいかんないなあ。あいう所は。

唐鑑 ある程度は整理しましたけれども。

桐野 それでよくなったのよ。素人ばっかいじゃいかん。

唐鑑 もう一人、地理を入れとけばよかったです。

平田 唐鑑さん、質問。もう一人質問が。

肥後 いいですか。榎田と柚木田ですが。

唐鑑 はあ。

肥後 小川さんの説によれば、樹木の名前の付いた「田」というのは、「所」というふうに理解した方が良いという解釈があるんですが、その現状はどうなってますか。全部、これは「田」のところにあげてあるんですが。

平田 これは全部「田」の所でしょうか、ということ。それとも、田のない所にも田の付く地名があるのか、ということ。

唐鑑 それにあるかどうかということですね。それに載ってるかということですね。

肥後 田の所の場所か。

唐鑑 どげんだったでしょうかね。これは見てみれば判るんでほすけど。

平田 見たところ、皆、田圃の所だよね。

唐鑑 田圃だったような気がします。

肥後 ああ、そうですか。

唐鑑 はい。祓川の一番北の所です。百引の方に高隈の方にあがって行くと、川をはさんでこっち側を田上（たがみ）、向う側を柚木と言います。「ゆのっ」と言います。

肥後 はあ。

桐野 この祓川というのは、どこから出た地名な

唐鑑 祓川というのは。

平田 新しい地名？

唐鑑 明治13年に付けた地名です。そこで、祓川の谷をですね、「はれごんだん」と云うた、といいう人もおいやっとですよ。あるいは、あそこに。

桐野 明治何年？

唐鑑 十三年。

桐野 十三年。地租改正の頃やね。

唐鑑 はい。文書がありました。あそこに瀬戸山神社というのがあるんですよ。そこの「祓」「ミンギ」をするところから来たちう人もおいやっとですけど。その辺はよく判らんのですが。

桐野 今は上（かみ）中（なか）下A（しも）があつた。

唐鑑 中は祓川。中は付けないので。

桐野 はあ、中は付けない。

唐鑑 小学校がある所です。

平田 ああ、祓川小学校。

桐野 上祓川、ただ祓川というぐあいですね。

唐鑑 下祓川が、下方限ですけど。二つに分けて西と下祓川に。

平田 はい。他に質問はありませんか。

唐鑑 瀬戸（せぬき）の「貫」は例の「ぬき」？

平田 トンネルでしょうね。

唐鑑 この下を実は貫（ぬき）が通ってるんですけどね。ハハハハハ——。本当にあれでしうね。まぁ、こういうのを現在の比定地を探して、それをどのように利用するかというのが、桐野先生のおっしゃるように、本当は問題だらうと思います。

桐野 まぁ、これね、誰かが始めにやいかんわけですから。こうしてね。いろいろ地名を引きずり出しちゃったのは非常にいいです。

平田 それで、さっき言ったような田と蘭の区分ということだけをねらって面白いやね。1万分1図あたりで。

桐野 その事実を明らかにすることがね、非常に大事なことになる。何でも学問はそうだと私は思うんですね。それを、どういうふうに解釈し、どういうふうなことをするか、後々の人がどんどん出来るわけですよ。ところが、事実は調べてみなきゃ判らん。特に若け衆は、ほがなかで、その事実を、こういうふうな事実があるということを明らかにしておけばですね。そりゃ、後からん衆はい易いですよ。だから、その意味でな、これはいい研究ですよ

唐鑑 最後に一つ。この史料の一番最初のところに書いてあるのですが、田と菌と野原と狩倉に分けたかということですね。訴状に分けて注文を付けたのか、というその辺がですね。やっぱい、税制上の問題じゃないかなというふうに、税金の問題じゃないかな、というふうに思ったわけです。

平田 田と菌と野原とね。

桐野 それは、田とないやつたけ。

唐鑑 田と菌と、それから野原は何なんでしょうね。

桐野 野原？

唐鑑 原野でしょうか？

桐野 野原は野原よ。だから、それはね、当時の土地の、農地でもいいかも知れんが、農地の種目じゃなかったろかい。今でも田とか畠とか山とか種目があるでしょう。その種目に応じて税をかけとるから。どこをおっとられたと、こげなよか所をおったとられたと、云わにゃいかん。

唐鑑 当時は、耕作地とか土地を、このように分けとった、ということ。

桐野 そのように分けとったから、それをそのまま使ったんじゃないかな。

唐鑑 ははあ。

桐野 つまり、それは一つの公用語だったかも知れんですよ。その当時のね。

唐鑑 はあ、はあ。

平田 これこれの品目のを。

唐鑑 これには税金をかけるという。

平田 私のものだという主張でしょう。先祖伝来のちゃんとした文書があったから言うわけでしょう

桐野 明治十三年の地租改正による土地台帳・地券台帳ですが、明治十三年に部分訂正をして、それをもとに明治二十一年には土地台帳が出来るのですから。明治二十一年の土地台帳もですね、「山畠」と書いてあるのが、たくさんあります。

唐鑑 「山畠」はありますね。

桐野 そいでね、なーいじゃろかいと思って、いろいろ調べてみるとめ、結局、あれは切替畠（きかえた）やらい。切替畠やった、山畠というのは。切替畠はそもそも肥料をやらずに作った。そういうふうに段々思つたのですがね。

唐鑑 そいで、今思ひだした。狩倉も多いですね

桐野 ふーん、土地台帳に。

唐鑑 いや、土地台帳というか、字絵図に。狩倉というのが。

桐野 そりゃ、大隅国は特に多いかも知れんけど

唐鑑 とくに百引の辺は多いようです。

桐野 ふん、ふん。

平田 他にありませんか。

山崎 意見ですけど、狩倉とか田とか菌というのが種目であれば、本当は狩倉も種目なんだから、狩倉の中に実際はその所その所の名前があって当然だという気がします。今、狩倉という話を聞いてそう思いましたけど。

平田 だから？

肥後 ここには大炊平・荒平・白木などの字がある

山崎 普通にはそうだけど、今、狩倉というのがいっぱいあるという、その場合がですね。だから、狩倉だけを種目にして、他の所は種目じゃない、ちゃんとした名前を付けたわけです。そういうこと

ですかね。字絵図を作る時に。

唐鑑 字絵図は、鹿児島の場合は、最初作ったのは明治十二・三年じゃないですか。

桐野 そうですよ、地券台帳が出来る時に出来てるんだから。

唐鑑 正式に作り直したのは、明治二十一—

桐野 明治二十一年で、それ以後ですね、町村によって、どんどん作り直していますよ。

肥後 狩倉は藩有だから。

唐鑑 ですよね。

肥後 えー、それには余り差をつけない。

唐鑑 つけないんですよね。

肥後 しかし、まぁ、牛根の場合ですね、いつだったかな、幕末の絵図には、山に名前が付いていますね。

唐鑑 それは藩が付けた名前かも知れません。

肥後 えー。

唐鑑 今は狩倉と鹿倉を一まとめにしたんですね。明治時代の小字にしても、十ばっかいののを、一つにまとめて書いていますよね。

肥後 そうですね、山の方はとくに大まかに分けている。

唐鑑 水田は面積も形もきれいに書いてありますね。

平田 はい、どうもご苦労さまでした。ありがとうございました。

唐鑑 話題提供ということで、どうも。よか勉強になりました。

平田 今日は唐鑑先生から、以前勤務された鹿屋の地名を話題提供ということで説明して頂きました。六月は、浜崎さん、頬娃町の地名について話をして頂けませんか。頬娃はこういう所だと、こういう言い伝えがあるとか、というようなことを話して頂けたらと思います。まぁ、気楽に話して下さいませんか。

浜崎 ああ、そうですか。

平田 六月は「頬娃の地名」ということでお願ひします。どうも有難うございました。

# 鹿屋の中世地名

唐 錢祐祥

一 鹿屋氏文書  
「島津庄鹿屋院雜掌兼信申状」(資料) 元徳二年(1330年)

\* 鹿屋院弁済使(寄郡の役人)が地頭の領地押領に対し出した訴状

\* 同押領注文には「田・菌・野原・狩倉」の多数の地名が記載されている。

\* 参考文献「島津の庄大隅鹿屋院小考」

## 1 申状の地名比定地

(1) 田貢社

田崎神社(七狩長田貢社)。近くの老神より、昭和三七年多量の宋錢が出土。至大通宝(一三一〇年)が最古。中國との交易で知られる波見津との中間に肝属川を利用した内陸水路交通体系が存在し、神社の下の船隈から上流は河原と鹿床に溶結灰岩が露出し、ここがそう行の終点と鹿屋院の中心であったと考えられている。

(2) 大窪田 上祓川町大久保。明治十三年上名村を祓川と改称。元禄・天保郷帳・三国名勝図会などは、この集落名をとつて上名村を大窪村としている。

(3) 馬庭田 上谷町に馬庭門あり。

(4) 中村 中村→祓川村か。

(5) 久木本市 大隅国の中世市場に関する最も古い史料と謂われる先の国司山(旧国鉄鹿屋駅、新市役所建設予定地)附近にあったと推定される。

(6) 下村

大浦町に小字あり。上村分限帳に「榎木田」とある。

(7) 榎木田 大浦町に小字あり。上村分限帳に「榎木田」とある。

(8) 横渡田 西祓川町南端の横渡橋附近か。小字あり。

(9) 上祓川町 上祓川町は古くは上名村上方限といい同じく祓川町は中方限、西祓川町・下祓川町は下方限といった。

(10) 田上 上田川村田上。

(11) 萩原田 王子町(山中)萩原。土地の人は「おわら」と發音

(35) 垣本 川町柿本 古前城町和田山に小字あり。湧水の意か。

(13) 北田 王子町尾曲

(14) 古世城田

(15) 小牟多田

(16) 曽田 曾田町 「菌」

(17) 田崎町瀬賀 郷之原町瀬賀

(18) 郷原武重菌

(19) 専守重菌 新栄町岩崎谷に「千堂屋敷」というのがある。

(20) 野間尼菌 新栄町岩崎谷(旧鹿屋駅裏)に野間池があった。

(21) 青木菌 共栄町は小字青木あり。旧青木町

(22) 串良町に笠野薬師あり。和田新太郎菌

(23) 並野若屋迫 古前城町和田山か。

(24) 白崎町 和田山

(25) 吉別府 下高隈町吉別府 「野原」

(26) 堀内原 下高隈町谷田か。

(27) 打門原 横山町堀之内か。

(28) 横山町 「狩倉」

(29) 打馬原 横山町堀之内か。

(30) 高牧町 大浦町大須か。

(31) 高牧町 大浦町大須か。

(32) 荒平 横山町の旧集落名

(33) 白木町 永古原町に小字あり。

### 三 特殊な地名

ア 加伊多	ウ ウイ
佐加利山	上板吹
シ 紙漉	加津根
ス 皮籠	始娘
カ カコ	雑色
キ クケ	加那乃木
カ キ	福定
コ 得万	福定
サ 福礼命婦	



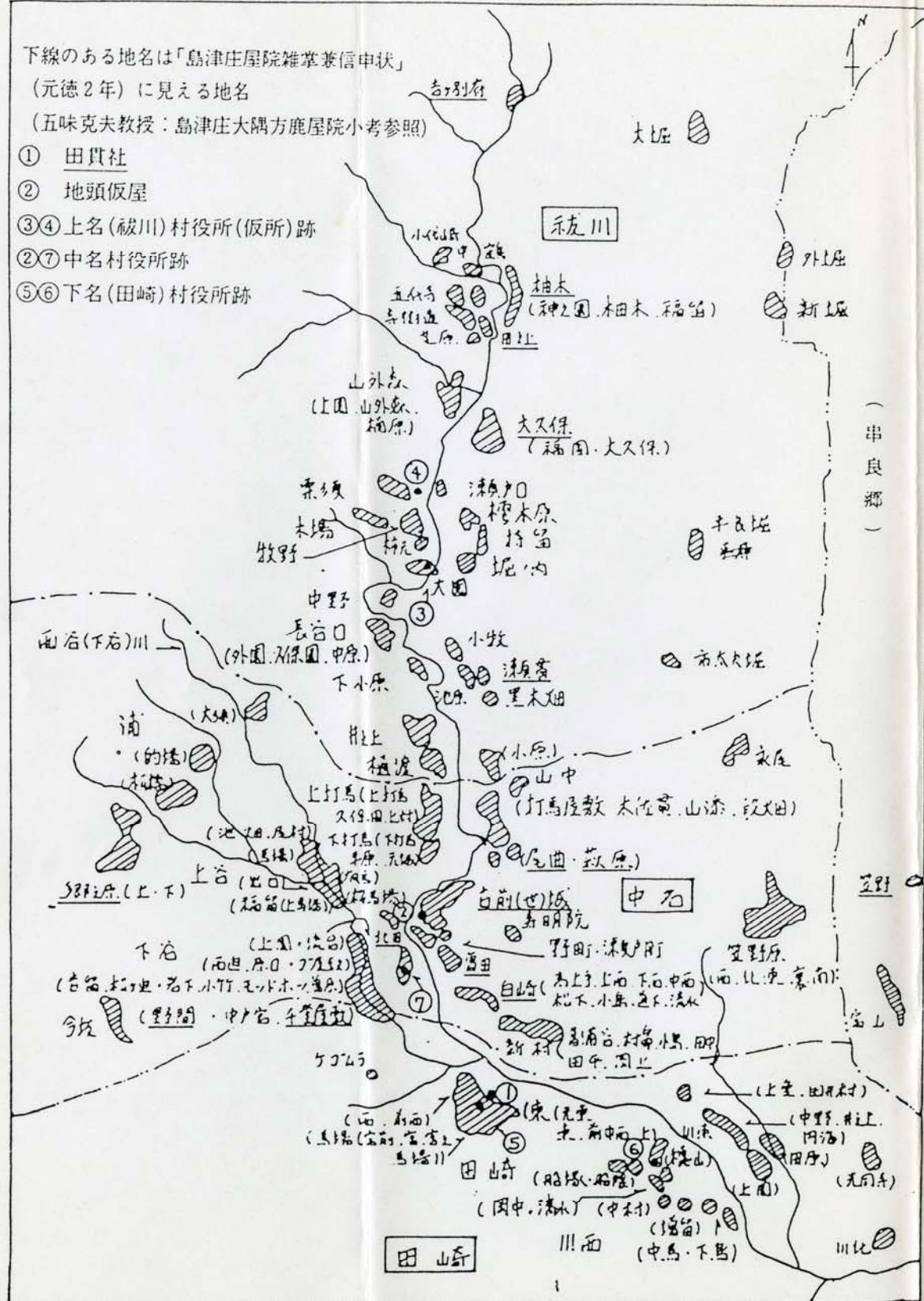
第2図 鹿屋郷の村落—明治前期—(高須を除く)

下線のある地名は「島津庄屋院雑掌兼信申状」

(元徳2年)に見える地名

(五味克夫教授：島津庄太隅方鹿屋院小考參照)

- ① 田貫社
  - ② 地頭仮屋
  - ③④上名(祓川)村役所(仮所)跡
  - ②⑦中名村役所跡
  - ⑤⑥下名(田崎)村役所跡



### 鹿屋市曾田町の門神(氏神)分布

